

特別史跡 か そ り かいづか 加曾利貝塚

第14次調査報告書

2024

千葉県教育委員会
千葉県埋蔵文化財調査センター



1 調査区鳥瞰 (南東から)



2 調査区全景 (西から)

卷頭図版2



1 85号住居跡 遺物出土状況



2 85号住居跡 石剣出土状況



1 140号住居跡 遺物出土状況



2 140号住居跡 全景

卷頭図版 4



1 140号住居跡・6号溝状遺構 黒色土・黄褐色土堆積状況



2 140号住居跡 貝層



1 142号住居跡 人骨出土状況



2 168号土坑 貝層

卷頭図版6



1 黄褐色土分布状況



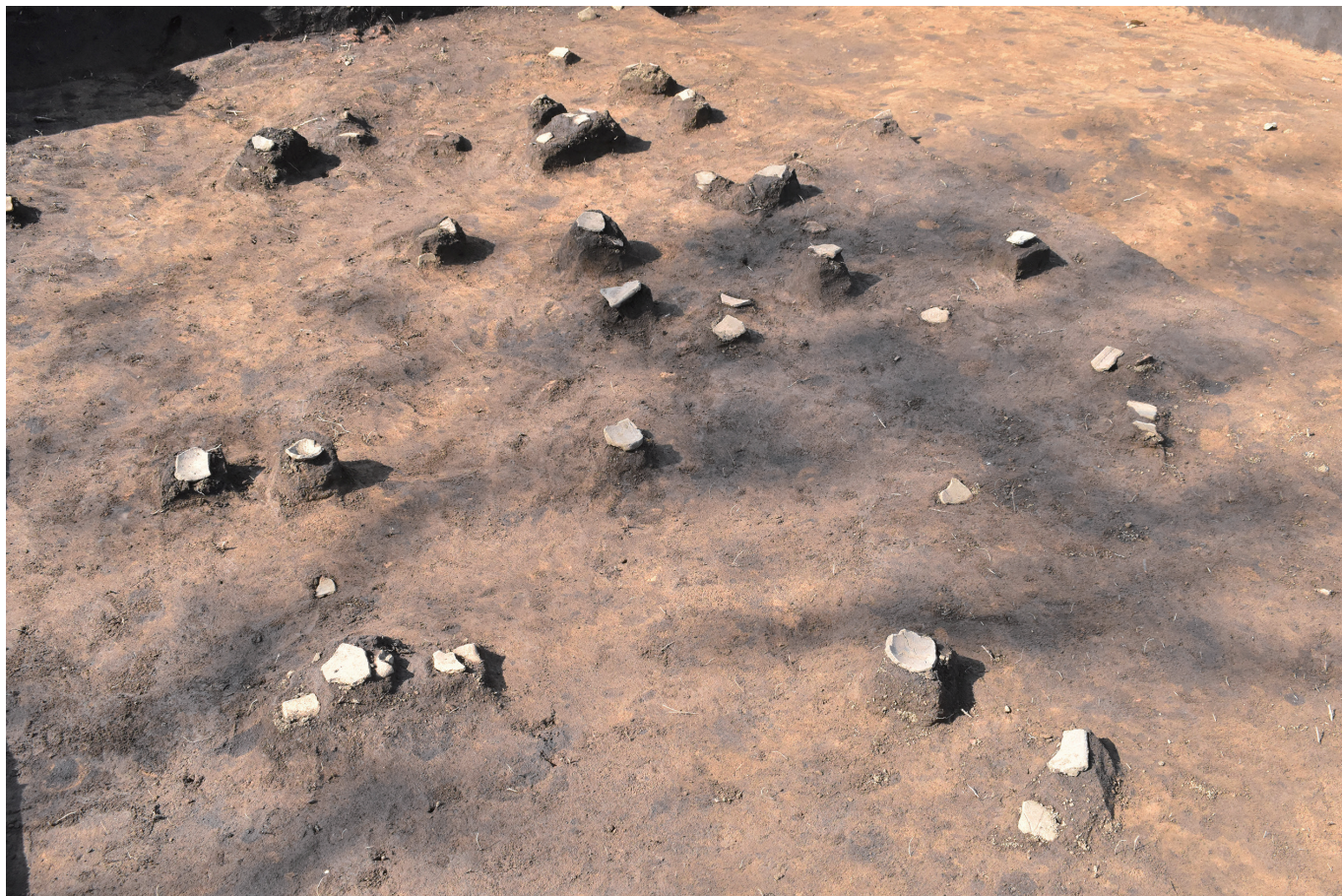
2 IK1 北壁断面



1 IK13 北壁断面



2 黒色土遺物出土状況 J11-37グリッド



1 黒色土遺物出土状況 J11-86グリッド



2 K11-91グリッドマス掘り 北壁断面

例 言

- 1 本書は、千葉県千葉市若葉区桜木2丁目154番1号他に所在する国指定特別史跡加曽利貝塚について実施した、第14次発掘調査に関する報告書である。
- 2 本事業は、平成29年度から令和元年度にかけて国庫補助を受け、千葉市教育委員会を事務局として、千葉市埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 調査期間、面積は以下のとおりである。

平成29(2017)年9月26日～12月22日	準備工 9月26日～10月6日
	発掘 10月7日～12月9日
	撤去工 12月12日～12月22日
平成30(2018)年7月30日～12月5日	準備工 7月30日～8月6日
	発掘 8月7日～11月24日
	撤去工 11月26日～12月10日
令和元(2019)年6月5日～12月20日	準備工 6月5日～6月21日
	発掘 6月25日～12月7日
	撤去工 12月9日～12月20日

面積 700㎡

- 4 発掘調査は平成29年度・平成30年度・令和元年度ともに、松田光太郎・菅谷通保(千葉市埋蔵文化財調査センター)が担当し、西野雅人・白根義久(千葉市埋蔵文化財調査センター)が補佐した。
- 5 出土品等整理は令和元年度12月以降、令和2・3・4年度に実施した。本書の執筆は事業担当の菅谷通保・西野雅人・松田光太郎を中心に森本 剛・千葉南菜子(千葉市教育委員会生涯学習部文化財課)・長原 亘(千葉市立加曽利貝塚博物館)・杉本 亘(千葉市埋蔵文化財調査センター)が行った。また渡邊 玲(千葉市立加曽利貝塚博物館)・濱 秀輝(千葉市埋蔵文化財調査センター)の協力を得た。職員による執筆分担は本文目次に示した。編集は松田光太郎が行った。
- 6 各種自然科学分析については、主として外部機関や個人への委託、または調査協力という形をとり、以下の方々から玉稿を賜った。所属等については本文にも示した。

動物遺体分析 微小貝類(第3章第1節3)	千葉県立中央博物館 黒住耐二
脊椎動物(第3章第1節4)	早稲田大学 樋泉岳二
植物遺体分析 白色物質(第3章第2節1・2)	株式会社パレオ・ラボ 竹原弘展・米田恭子
炭化材(第3章第2節3)	株式会社パレオ・ラボ 伊藤 茂他
炭化種実(第3章第2節4)	株式会社パレオ・ラボ バンダリ スタルシャン
土器種実圧痕(第3章第2節5)	金沢大学 佐々木由香
	東京都埋蔵文化財センター 大網信良
	株式会社パレオ・ラボ 山本 華
石器石材分析(第3章第3節)	有限会社考古石材研究所 柴田 徹
土壌・鉱物・発泡物質分析 鉱物(第3章第4節1)	第四紀文献センター 町田瑞男
土壌(第3章第4節2)	東京自然史研究機構 細野 衛
	北方ファイトリス研究室 佐瀬 隆
発泡物質(第3章第4節3)	関東第四紀研究会 上杉 陽・近藤 敏

放射性炭素年代測定（第3章第5節） 株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループ

- 7 遺構・遺物の撮影は、松田光太郎・菅谷通保が行った。
- 8 遺構名は調査時の遺構番号と本書の遺構番号は変更したものがあり、凡例の表に示した。
- 9 出土遺物に付した注記の遺跡名はKSM14とした。遺構名は調査時の遺構番号名を注記した。
- 10 出土資料及び調査記録等は一括して千葉市加曽利貝塚博物館及び千葉市埋蔵文化財調査センターで保管する予定である。
- 11 引用・参考文献については各節の末に記載した。
- 12 発掘調査から報告書刊行まで、文化庁文化財部記念物課、千葉県教育庁教育振興部文化財課の御指導を受けた他、史跡保存整備委員会及び特別史跡加曽利貝塚調査研究部会（平成29年度～）を設置して委員から御指導を受けた。指導組織体制の詳細は第1章第3節に示す。その他、以下の諸機関・諸氏の御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表する（敬称略）。

文化庁文化財部記念物課、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉市立加曽利貝塚博物館、千葉縄文研究会、公益財団法人千葉市教育振興財団、(株)アルカ、(有)カワヒロ産業、(株)大崎コンピューターエンジニアリング、(株)サン・ジオテック、(有)新成田総合社、(株)千葉測器、(株)パレオ・ラボ、(株)都重機建設、早稲田大学考古学研究室、秋田かな子、石井 寛、伊藤 茂、上杉 陽、宇根宏紀、江原 英、大塚達朗、大網信良、小川慶一郎、小川勝和、小倉和重、小澤清男、長田友也、忍澤成視、加藤和浩、黒住耐二、黒沼保子、小林 嵩、小林清隆、近藤昭彦、近藤 敏、齋藤弘道、坂上和弘、坂本 匠、佐瀬 隆、佐藤巧庸、佐藤正教、柴田 徹、鈴木素行、鈴木徳雄、竹野内恵太、竹原弘展、竹本弘幸、田中大介、田邊えり、塚原勇人、角田祥一、樋泉岳二、中村耕作、西村広経、平原信崇、廣田哲徳、廣田正史・福田正宏、藤田 尚、細野 衛、町田瑞男、宮原俊一、森将志、安井健一、山形秀樹、山岸良二、山崎世理愛、山本 華、湯浅利彦、米田恭子、渡辺 新、バンダリ スダルシャン、Zaur Lomtadidze

凡 例

- 1 本書の遺構番号は、『史跡 加曾利貝塚 総括報告書』の遺構番号に連続するように、調査時の番号を変更している。変更した遺構番号については、下の遺構番号新旧対照表に表記した。なおIKは調査時に使用した遺構の略称であり、整理を経て、遺構の種別が確定しなかったものに対して、その名称を継続して、本書で使用している。
本調査に係る出土品の注記は、遺跡名を「K S M14」と略記し、遺構名は調査時の番号の略号を記した。
- 2 本書で掲載した遺構図の標高については、海拔高で表示した。
- 3 遺構・遺物実測図の縮尺は、各挿図中に記載した。
- 4 写真図版の遺物スケールは縮尺不同である。
- 5 遺構・遺物挿図中におけるスクリーントーンの表示内容は下記の通りである。なおこれ以外については各挿図中に凡例を示した。



遺構番号新旧対照表

調査時の番号	→	本書の番号	総括報告書の番号	調査時の番号	→	本書の番号	総括報告書の番号
IK 1	→	IK 1		IK10	→	141号住居跡	未報告遺構 6
IK 2	→	85号住居跡	85号竪穴住居跡	IK11	→	IK11	
IK 3	→	140号住居跡	未報告遺構 5	IK12	→	169号土坑	未報告遺構 7
IK 4	→	6号溝状遺構		IK13	→	IK13	
IK 5	→	168号土坑	未報告遺構 4	IK14	→	143号住居跡	
IK 6	→	167号土坑	未報告遺構 3	IK15	→	IK15	
IK 7	→	IK 7		IK16	→	IK16	
IK 8	→	170号土坑		番号無し	→	171号土坑	
IK 9	→	142号住居跡					

本文目次

巻頭図版

例言

凡例

目次

第1章 序章	1
第1節 遺跡の立地と環境	1
1 周辺の自然的環境(松田)	1
2 周辺の歴史的環境(松田・長原)	4
第2節 発掘調査に至る経緯	17
1 加曾利貝塚の過去の発掘調査(松田)	17
2 調査の経緯(森本)	25
3 調査の目的(菅谷)	26
第3節 調査体制と調査方法・調査経過(松田)	28
1 調査体制	28
2 調査方法	32
3 調査経過	34
第2章 遺構と遺物の調査	37
第1節 調査の概要(松田)	37
1 概要	37
2 基本層序	39
第2節 遺構と出土土器(松田・菅谷・千葉)	46
1 住居跡	46
2 溝状遺構	123
3 土坑	126
4 性格不明遺構(IK)	133
第3節 貝層と出土土器(松田・菅谷)	156
1 遺構外貝層	156
2 遺構内貝層	161
第4節 包含層と出土土器(松田・菅谷)	167
第5節 土製品(西野)	187
1 土偶	187
2 土版	190
3 耳飾	190
4 ミニチュア土器	192
5 有孔土製円板	193
6 土器片円板	193

	7 土器片錘	195
	8 他の土製品・特殊土器	195
	9 焼成粘土塊	197
第6節	石器・石製品(松田)	198
	1 遺構内出土石器・石製品	198
	2 遺構外出土石器・石製品	204
第7節	骨角歯牙貝製品(西野)	211
	1 骨角歯牙製品	211
	2 貝製品	211
第3章	自然科学分析	213
第1節	動物遺体分析	213
	1 調査・分析の方法(西野)	213
	2 貝類(西野)	215
	3 微小貝類遺体	222
	4 脊椎動物遺体	226
第2節	植物遺体分析	231
	1 85号住居跡出土土器中の白色物質の蛍光X線分析	231
	2 85号住居跡出土土器中の白色物質の植物珪酸体分析	233
	3 85号住居跡出土炭化材の樹種同定	235
	4 出土炭化種実	236
	5 土器種実圧痕の同定	242
第3節	石器石材分析	253
	1 各岩石の判定基準	253
	2 器種毎の構成岩石種	256
	3 縄文時代後晩期の器種毎に見た石材に関する考察	258
	4 まとめ	265
第4節	土壌・鉱物・発泡物質分析	267
	1 縄文時代晩期土壌とロームの鉱物分析	267
	2 縄文時代晩期土層の土壌分析	293
	3 85号住居跡床面直上出土の発泡物質について	321
第5節	放射性炭素年代測定	331
	1 85号住居跡出土炭化材の年代測定	331
	2 140号住居跡・6号溝状遺構覆土土壌の年代測定	333
第4章	成果のまとめ	336
	1 第2次調査トレンチの位置(松田)	336
	2 土器(菅谷)	338
	3 土製品(西野)	341
	4 石器・石製品(松田)	341
	5 骨角歯牙貝製品(西野)	345

6	晩期集落（菅谷）	345
7	遺跡構造（松田）	346
8	生業活動（西野）	351
9	結語（松田）	351

挿図目次

第1章

第1図	遺跡位置図	2	第4図	周辺の遺跡（2）	8
第2図	遺跡周辺の地形区分図	3	第5図	調査地点位置図	24
第3図	周辺の遺跡（1）	7	第6図	グリッド配置図	33

第2章

第7図	調査区位置図	38	第45図	140号住居跡出土土器（2）	96
第8図	土壌サンプル採取位置図（1）	39	第46図	140号住居跡出土土器（3）	97
第9図	調査区断面位置図	40	第47図	140号住居跡出土土器（4）	98
第10図	調査区西壁土層断面図	41	第48図	140号住居跡出土土器（5）	99
第11図	第2次調査Vトレンチ西壁土層断面図	42	第49図	140号住居跡出土土器（6）	100
第12図	K11-91グリッドマス掘り土層断面図	43	第50図	140号住居跡出土土器（7）	101
第13図	黄褐色土・明褐色土分布状況（上位面）	44	第51図	140号住居跡出土土器（8）	102
第14図	黄褐色土・明褐色土分布状況（下位面）	45	第52図	140号住居跡出土土器（9）	103
第15図	遺構配置図	47	第53図	140号住居跡出土土器（10）	104
第16図	142号住居跡 貝層被覆状況	48	第54図	140号住居跡出土土器（11）	105
第17図	142号住居跡	49	第55図	140号住居跡出土土器（12）	106
第18図	142号住居跡 人骨出土状況	50	第56図	140号住居跡出土土器（13）	107
第19図	143号住居跡 炉	51	第57図	140号住居跡出土土器（14）	108
第20図	141号住居跡（1）	53	第58図	140号住居跡出土土器（15）	109
第21図	141号住居跡（2）	54	第59図	140号住居跡出土土器（16）	110
第22図	85号住居跡（1）	57	第60図	140号住居跡出土土器（17）	111
第23図	85号住居跡（2）	58	第61図	140号住居跡出土土器（18）	112
第24図	85号住居跡 遺物出土状況（1）	60	第62図	140号住居跡出土土器（19）	113
第25図	85号住居跡 遺物出土状況（2）	60	第63図	140号住居跡出土土器（20）	114
第26図	85号住居跡 遺物出土状況（3）	61	第64図	140号住居跡出土土器（21）	115
第27図	85号住居跡出土土器（1）	67	第65図	140号住居跡出土土器（22）	116
第28図	85号住居跡出土土器（2）	68	第66図	140号住居跡出土土器（23）	117
第29図	85号住居跡出土土器（3）	69	第67図	140号住居跡出土土器（24）	118
第30図	85号住居跡出土土器（4）	70	第68図	140号住居跡出土土器（25）	119
第31図	85号住居跡出土土器（5）	71	第69図	140号住居跡出土土器（26）	120
第32図	85号住居跡出土土器（6）	72	第70図	140号住居跡出土土器（27）	121
第33図	85号住居跡出土土器（7）	73	第71図	140号住居跡出土土器（28）	122
第34図	85号住居跡出土土器（8）	74	第72図	6号溝状遺構（1）	124
第35図	85号住居跡出土土器（9）	75	第73図	6号溝状遺構（2）	124
第36図	85号住居跡出土土器（10）	76	第74図	6号溝状遺構（3）	125
第37図	85号住居跡出土土器（11）	77	第75図	167号土坑	126
第38図	140号住居跡（1）	80	第76図	168号土坑	128
第39図	140号住居跡（2）	81	第77図	169号土坑	129
第40図	140号住居跡（3）	83	第78図	170号土坑	130
第41図	140号住居跡（4）	84	第79図	141号住居跡・169号土坑・ 143号住居跡・IK15・IK16出土土器	131
第42図	140号住居跡（5）	86	第80図	6号溝状遺構・168号土坑・167号土坑・ 170号土坑・142号住居跡出土土器	132
第43図	140号住居跡 貝層	87			
第44図	140号住居跡出土土器（1）	95			

第81図	IK15	133	第116図	西側包含層出土土器(6)	175
第82図	IK 1 (1)	135	第117図	西側包含層出土土器(7)	176
第83図	IK 1 (2)	136	第118図	西側包含層出土土器(8)	177
第84図	IK 1 出土土器(1)	137	第119図	西側包含層出土土器(9)	178
第85図	IK 1 出土土器(2)	138	第120図	西側包含層出土土器(10)	179
第86図	IK13	139	第121図	東側包含層出土土器(1)	180
第87図	IK13 遺物出土状況	139	第122図	東側包含層出土土器(2)	181
第88図	IK13出土遺物(1)	140	第123図	東側包含層出土土器(3)	182
第89図	IK13出土遺物(2)	141	第124図	南側包含層出土土器(1)	183
第90図	IK13出土遺物(3)	142	第125図	南側包含層出土土器(2)	184
第91図	IK 7 (1)	144	第126図	南側包含層出土土器(3)	185
第92図	IK 7 (2)	145	第127図	南側包含層出土土器(4)	186
第93図	IK 7 周辺遺物出土状況	145	第128図	土偶(1)	188
第94図	IK 7 出土遺物(1)	147	第129図	土偶(2)	189
第95図	IK 7 出土遺物(2)	148	第130図	土版	190
第96図	IK 7 出土遺物(3)	149	第131図	耳飾	191
第97図	IK 7 出土遺物(4)	150	第132図	ミニチュア土器	192
第98図	IK 7 出土遺物(5)	151	第133図	有孔土製円板	193
第99図	IK 7 出土遺物(6)	152	第134図	土器片円板(1)	193
第100図	IK 7 出土遺物(7)	153	第135図	土器片円板(2)	194
第101図	IK11	154	第136図	土器片錘	195
第102図	IK17	155	第137図	他の土製品・特殊土器	196
第103図	貝層分布図	157	第138図	遺構出土石器・石製品(1) 142号住居跡	198
第104図	貝層サンプル位置図	158	第139図	遺構出土石器・石製品(2) 85号住居跡	199
第105図	遺構外貝層(1)	159	第140図	遺構出土石器・石製品(3) 85号住居跡	200
第106図	遺構外貝層(2)	160	第141図	遺構出土石器・石製品(4) 140号住居跡	202
第107図	168号土坑貝層サンプル採取位置図	162	第142図	遺構出土石器・石製品(5) 140号・141号住居跡	203
第108図	IK7貝層サンプル採取位置図	163	第143図	遺構出土石器・石製品(6) 167号土坑	203
第109図	貝層サンプル出土土器(1)	164	第144図	遺構出土石器・石製品(7) IK 1・7	204
第110図	貝層サンプル出土土器(2)	165	第145図	遺構外出土石器・石製品(1)	205
第111図	西側包含層出土土器(1)	170	第146図	遺構外出土石器・石製品(2)	206
第112図	西側包含層出土土器(2)	171	第147図	遺構外出土石器・石製品(3)	207
第113図	西側包含層出土土器(3)	172	第148図	遺構外出土石器・石製品(4)	208
第114図	西側包含層出土土器(4)	173	第149図	骨角歯牙製品	211
第115図	西側包含層出土土器(5)	174			

第3章

第150図	貝類計測値の時期的変化	221	第160図	土器圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(1)	249
第151図	脊椎動物遺体(現地採取資料)の組成(NISP比)	227	第161図	土器圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(2)	250
第152図	貝層サンプルから検出された脊椎動物遺体(現地採取資料)の出土量と組成(NISP)	228	第162図	土器圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(3)	251
第153図	貝層サンプルにおける魚骨の包含率(サンプル1リットル当たりのNISP)	229	第163図	土器圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(4)	252
第154図	貝層サンプルから検出された魚類遺体の出土数と組成(NISP)	229	第164図	後晩期遺跡磨製石斧構成岩石種比較	258
第155図	貝層サンプルにおける魚骨のメッシュ別検出率	230	第165図	後晩期遺跡打製石斧構成岩石種比較	260
第156図	土器内の白色物質の蛍光X線分析	232	第166図	後晩期遺跡磨石類構成岩石種比較	261
第157図	加曽利貝塚出土の土器内白色物質と植物珪酸体	234	第167図	後晩期遺跡砥石構成岩石種比較	262
第158図	炭化材の走査型電子顕微鏡写真	235	第168図	後晩期遺跡石皿・台石構成岩石種比較	263
第159図	加曽利貝塚から出土した炭化種実	240	第169図	後晩期遺跡石棒・石剣構成岩石種比較	263
			第170図	後晩期遺跡石鎌構成岩石種比較	264
			第171図	後晩期遺跡玉類構成岩石種比較	265
			第172図	遺跡周辺の地形区分図及び 鉍物分析試料採取位置図	268
			第173図	鉍物分析・土壌分析試料採取断面図(1)	269
			第174図	鉍物分析・土壌分析試料採取断面図(2)	270

第175図	千葉県北部の段丘面と分水嶺	270	第198図	140号住居跡覆土の団粒・単粒各粒子の 実体顕微鏡写真(1)	304
第176図	K17グリッドの粒度による鈹物組成 の差 (No. 3とNo.13)	272	第199図	140号住居跡覆土の団粒・単粒各粒子の 実体顕微鏡写真(2)	305
第177図	K11-31グリッド	274	第200図	140号住居跡覆土・6号溝状遺構覆土 地山ロームの植物珪酸体組成図	306
第178図	140号住居跡 (No. 1～No.32)	276	第201図	140号住居跡覆土・6号溝状遺構覆土・ 地山ロームから検出された植物珪酸体	307
第179図	K11-91グリッド	278	第202図	K17グリッド ローム層 (基本土層) の 植物珪酸体組成図	309
第180図	K17グリッド (No. 1～No.18)	280	第203図	K17グリッドローム層 (基本土層) から 検出された珪酸体	310
第181図	K17グリッド (No.19～No.37)	281	第204図	加曽利基本土層と模式土層の対比	311
第182図	加曽利南貝塚4地点の柱状図と サンプル層中の橄欖石・両輝石・ 火山ガラスの存在比率	284	第205図	日本列島における植生の分布	313
第183図	段丘面区分図と千葉一松戸間の分水嶺 (隆起軸)	287	第206図	K17グリッドローム層 (基本土層) と 6号溝状遺構覆土層・140号住居跡覆土層 地山ローム層の対比	313
第184図	加曽利貝塚における東京軽石層の標高	288	第207図	覆土の炭素含量とATガラス含量の相関図	315
第185図	鈹物写真(1)	290	第208図	140号住居跡および6号溝状遺構跡の 覆土堆積モデル	316
第186図	鈹物写真(2)	291	第209図	完新世、火山灰分布域における 人為、植生、土壌層の関係模式図	318
第187図	鈹物写真(3)	292	第210図	85号住居跡の床面直上出土の発泡物質	321
第188図	温暖湿潤な火山灰分布域における 火山灰土壌層の生成模式図	294	第211図	207図発泡物質の構成	322
第189図	140号住居跡覆土等の硬度	298	第212図	140号住居跡を切る6号溝状遺構最下部よりも 新しいスコリア質赤砂帯	324
第190図	K17グリッド ローム層の硬度	298	第213図	スコリア質赤砂帯中の他火山起源円筒状～ パイプ状透明ガラス片等	325
第191図	140号住居跡覆土等のpH (H ₂ O)・pH (NaF)	299	第214図	富士山北東側斜面 滝沢林道1560m地点の 縄文晩期～弥生期テフラ層	327
第192図	K17グリッド ローム層の pH (H ₂ O)・pH (NaF)	300	第215図	滝沢林道1560m地点での縄文晩期～弥生期 テフラ柱状図	328
第193図	140号住居跡覆土等の炭素・窒素含量、 炭素・窒素比	301	第216図	暦年較正結果	332
第194図	140号住居跡覆土等の メラニックインデックス (MI)	302	第217図	暦年較正結果	335
第195図	140号住居跡覆土等の団粒・ 単粒各粒度組成図(1)	302			
第196図	140号住居跡覆土等の団粒・ 単粒各粒度組成図(2)	302			
第197図	140号住居跡覆土等の団粒・ 単粒各粒度組成図(3)	303			

第4章

第218図	第2次調査トレンチ位置図	337	第220図	遺構変遷図	348
第219図	後・晩期石器組成グラフ	342			

表目次

第1章

第1表	周辺の遺跡一覧表	9	第5表	調査体制表	28
第2表	保存・整備以前の調査歴	18	第6表	千葉市史跡保存整備委員会の構成	30
第3表	加曽利貝塚発掘調査歴	22	第7表	特別史跡加曽利貝塚調査研究部会の構成	31
第4表	発掘調査に係る届出等の文書	25	第8表	特別史跡加曽利貝塚調査研究部会の開催	31

第2章

第9表	85号住居跡柱穴観察表	59	第11表	出土地別石器・石製品点数表	198
第10表	土製品出土点数集計	187	第12表	石器・石製品観察表	209

第3章

第13表	貝サンプル一覧	214	第34表	重鉍物組成 (K11-91グリッド)	278
第14表	貝類種名一覧	217	第35表	全鉍物組成 (K17グリッド) (No. 1～No.18)	280
第15表	貝種組成	218	第36表	重鉍物組成 (K17グリッド) (No. 1～No.18)	281
第16表	貝類計測値分布	220	第37表	全鉍物組成 (K17グリッド) (No.19～No.37)	282
第17表	第14次調査で確認された微小貝類	223	第38表	重鉍物組成 (K17グリッド) (No.19～No.37)	283
第18表	堆積物サンプルから抽出された 微小貝類の詳細組成	224	第39表	土壌の測定・分析項目と性状	294
第19表	貝層サンプル一覧	226	第40表	土壌分析結果概要	297
第20表	脊椎動物遺体(現地採取資料)の 組成(NISP)	227	第41表	140号住居跡覆土等の硬度	298
第21表	貝層サンプルから検出された 脊椎動物遺体の組成(NISP)	228	第42表	K17グリッド ローム層の硬度	298
第22表	植物珪酸体 検出状況	233	第43表	140号住居跡覆土等のpH(H ₂ O)・pH(NaF)	299
第23表	加曽利貝塚から出土した炭化種実	239	第44表	K17グリッド ローム層のpH(H ₂ O)・pH(NaF)	300
第24表	土器圧痕同定結果	243	第45表	140号住居跡覆土等の 炭素・窒素含量、炭素・窒素比	301
第25表	土器圧痕同定結果一覧	247	第46表	140号住居跡覆土等の メラニックインデックス(MI)	302
第26表	出土石器器種毎構成岩石種表	257	第47表	K17グリッド立川ローム層(基本土層) のATガラス含有率	315
第27表	後晩期の器種毎構成岩石種表	259	第48表	覆土層の始良Tnテフラ(AT)ガラスの 含有率と二次堆積立川ロームの付加率	315
第28表	K17グリッドの粒度による 鉍物組成の差(No. 3とNo.13)	272	第49表	6号溝状遺構覆土と140号住居跡覆土の 堆積モデルのパラメーター	316
第29表	全鉍物組成 K11-31グリッド	274	第50表	測定試料及び処理	331
第30表	重鉍物組成 K11-31グリッド	274	第51表	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	332
第31表	全鉍物組成(140号住居跡)	276	第52表	測定試料及び処理	333
第32表	重鉍物組成(140号住居跡)	277	第53表	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	334
第33表	全鉍物組成(K11-91グリッド)	278			

第4章

第54表	後・晩期石器組成集計表	342	第56表	遺構・貝層の時期	347
第55表	後・晩期における石鏃の石材比率	343			

写真図版目次

巻頭図版1	1. 調査区鳥瞰 2. 調査区全景		J11-86グリッド	
巻頭図版2	1. 85号住居跡 遺物出土状況 2. 85号住居跡 石剣出土状況		2. K11-91グリッドマス掘り 北壁断面	
巻頭図版3	1. 140号住居跡 遺物出土状況 2. 140号住居跡 全景		図版1	1. 遺跡近景 2. 調査前状況 3. 第2次調査トレンチ確認(1) 4. 第2次調査トレンチ確認(2) 5. 第2次調査トレンチ確認(3)
巻頭図版4	1. 140号住居跡・6号溝状遺構 黒色土・黄褐色土堆積状況 2. 140号住居跡 貝層		図版2	1. 142号住居跡 人骨出土状況(1) 2. 142号住居跡 人骨出土状況(2) 3. 142号住居跡 人骨出土状況(3) 4. 143号住居跡 炉跡 5. 143号住居跡 炉体土器
巻頭図版5	1. 142号住居跡 人骨出土状況 2. 168号土坑 貝層		図版3	1. 141号住居跡(1) 2. 141号住居跡(2)
巻頭図版6	1. 黄褐色土分布状況 2. IK1 北壁断面		図版4	1. 85号住居跡 石剣出土状況 2. 85号住居跡 遺物出土状況 3. 85号住居跡 耳飾出土状況
巻頭図版7	1. IK13 北壁断面 2. 黒色土遺物出土状況 J11-37グリッド			
巻頭図版8	1. 黒色土遺物出土状況			

4. 85号住居跡 石剣出土状況(1)
5. 85号住居跡 石剣出土状況(2)
- 図版5 1. 85号住居跡
2. 85号住居跡 覆土下部 獣骨出土状況
3. 85号住居跡 炭化材出土状況
4. 85号住居跡 鉢形土器出土状況
5. 85号住居跡 炉跡
- 図版6 1. 140号住居跡 土層断面
2. 140号住居跡 旧IVトレンチ4区
遺物出土状況
3. 140号住居跡 旧Vトレンチ4区
貝層検出状況
4. 140号住居跡 遺物出土状況
5. 140号住居跡 土版出土状況
- 図版7 1. 140号住居跡
2. 140号住居跡 出入口
3. 140号住居跡 壁柱穴
4. 140号住居跡 屋内土坑
5. 140号住居跡 炉跡
- 図版8 1. 6号溝状遺構 東側 硬化面
2. 6号溝状遺構 西側 硬化面
3. 6号溝状遺構 東側 明赤褐色土
4. 6号溝状遺構 土層断面
5. 6号溝状遺構 西側
- 図版9 1. 167号土坑
2. 167号土坑 土層断面
- 図版10 1. 168号土坑
2. 168号土坑 貝層
- 図版11 1. 169号土坑
2. 170号土坑 遺物出土状況
- 図版12 1. 170号土坑 陥没後
2. IK15 遺物出土状況
- 図版13 1. IK1
2. IK1 貝層検出状況
3. IK1 遺物出土状況
4. IK1 玉出土状況
5. IK1 焼土検出状況
- 図版14 1. IK13 床面検出状況
2. IK13 遺物出土状況
3. IK13 鯨椎骨出土状況
4. IK13 170号土坑検出状況
5. IK13 土層断面
- 図版15 1. IK7 確認状況
2. IK7・142号住居跡 土層断面
- 図版16 1. IK7 鉢形土器出土状況
2. IK7 遺物出土状況
3. IK16
4. IK11
5. IK17
- 図版17 1. J11-38グリッド 貝層
2. J11-38グリッド 断面
- 図版18 1. 黒色土遺物出土状況 J11-59グリッド
2. 土器出土状況 IK7
3. 土器出土状況 J11-59グリッド
4. 土器突起出土状況 K11-61グリッド
5. 赤彩土器出土状況 K11-77グリッド
- 図版19 1. 土器出土状況 J11-98グリッド
2. 土偶出土状況 J11-56グリッド
3. 土偶出土状況 J11-37グリッド
4. 玉出土状況 J11-38グリッド
5. 人骨 142号住居跡
- 図版20 遺構出土土器(1)85号住居跡
- 図版21 遺構出土土器(2)140号住居跡
- 図版22 遺構出土土器(3)140号住居跡・IK15・IK7
- 図版23 遺構出土土器(4)IK7・
遺構外包含層出土土器(1)
- 図版24 遺構出土土器(5)85号住居跡
- 図版25 遺構出土土器(6)140号住居跡
- 図版26 遺構出土土器(7)140号住居跡・IK13
- 図版27 遺構出土土器(8)IK13・IK1・IK7
- 図版28 遺構出土土器(9)IK7・141号住居跡
- 図版29 遺構外包含層出土土器(2)
- 図版30 遺構外包含層出土土器(3)
- 図版31 1. 遺構出土土器(10)141号住居跡・
143号住居跡・170号土坑
2. 遺構出土土器(11)167号土坑・
168号土坑・169号土坑
- 図版32 1. 遺構出土土器(12)6号溝状遺構
2. 遺構出土土器(13)IK1
- 図版33 1. 遺構出土土器(14)85号住居跡
2. 遺構出土土器(1)85号住居跡
- 図版34 1. 遺構出土土器(2)140号住居跡
2. 遺構出土土器(3)140号住居跡・
167号土坑・IK1・IK7
- 図版35 1. 遺構外出土土器(1)打製石斧・磨製石斧
2. 遺構外出土土器(2)磨石類
- 図版36 1. 遺構外出土土器(3)石皿・台石・砥石
2. 遺構外出土土器(4)尖頭器・石鏃
石錐・石棒・石剣・玉類
- 図版37 1. 土偶(1)
2. 土偶(2)・土版
- 図版38 1. 耳飾
2. ミニチュア土器・有孔土製円板
- 図版39 1. 土器片円板(1)
2. 土器片円板(2)
- 図版40 1. 土器片円板(3)・土器片錘
2. 他の土製品(1)
- 図版41 1. 他の土製品(2)
2. 焼成粘土塊
- 図版42 1. 骨角歯牙製品
2. 貝製品

付表目次

付表1 土器以外全体索引
付表2 土製品
付表3 焼成粘土塊
付表4 骨角歯牙貝製品

付表5 貝類同定結果
付表6 貝類計測値
付表7 出土脊椎動物遺体(現地採取資料)の同定結果
付表8 貝層サンプルから検出された脊椎動物遺体の同定結果

第1章 序章

第1節 遺跡の立地と環境

1 周辺の自然的環境

加曽利貝塚は東京湾東岸の千葉県の中西部に位置し、千葉市若葉区桜木2・3・8丁目に所在する。千葉市の中心部であるJR千葉駅からは北東へ4kmの場所にある(第1図)。

立地を見ると、遺跡は東京湾に注ぐ都川の支流である坂月川の右岸に広がる、標高約30~32mの台地上にある。この台地は千葉市域に広く広がる下総台地と呼ばれる台地であるが、この下総台地はいくつかの地形面からなり、上位から順に下総上面、下総下位面、千葉段丘に区分されている(杉原1970)。第2図は都市域の地質地盤図「千葉県北部地域」とその説明書(地質調査総合センター公開)に基づき作成した地形区分図であるが、これを見ると、加曽利貝塚は下総上位面にある。下総上位面は後期更新世、下末吉海進時の高海水準期に形成されたもので、その基盤には木下層と呼ばれる砂層、その上には常総粘土層(下末吉ローム層)、武蔵野ローム層、立川ローム層に分けられる関東ローム層が存在する。また加曽利貝塚の南側の谷を挟んだ反対側の台地は加曽利貝塚立地面より1段低くなっており、同地質地盤図では千葉段丘面(千葉面)に比定されている。加曽利貝塚東傾斜面も、遺跡の東側を流れる坂月川の谷に向かって傾斜しており、その東端は1段低い平坦面となっているが、その平坦面は、それと同じ段丘面になるという考えも示されている(貝塚・杉原1976)。

加曽利貝塚の南東端には坂月川の支流の谷が存在している。その谷は、坂月川合流部より南西側に800m延び、(現桜木小学校付近にて)北に向きを変えて消滅するが、その先端には埋没谷が存在し、この埋没谷以東に加曽利貝塚が存在していると認識されている。

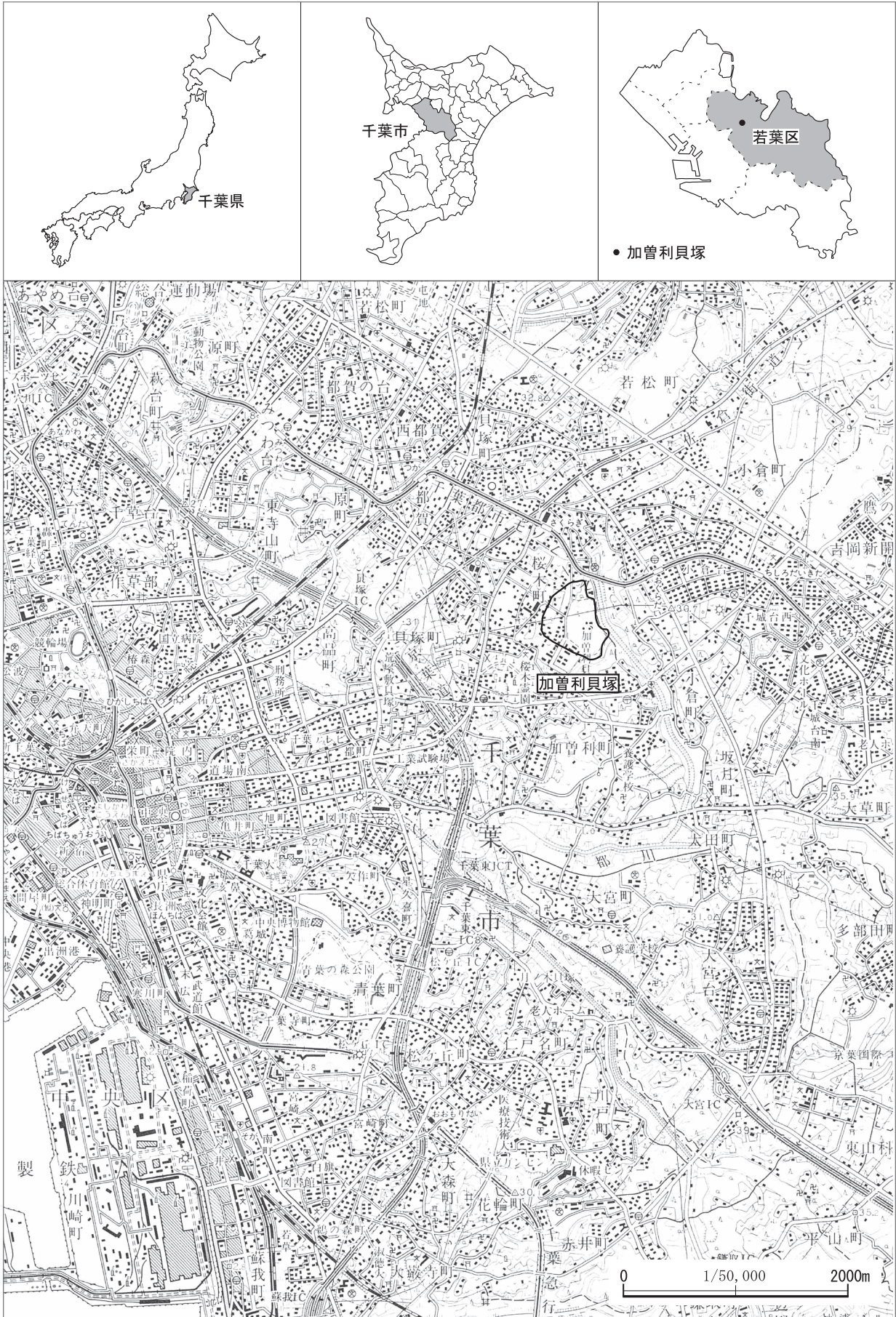
また遺跡北方約1km付近は下総台地上の東京湾側と太平洋側を隔てる分水界となっており、遺跡東側を流れる坂月川もその付近に水源をもって、北西から南東に向かって流れている。坂月川は千葉市若葉区加曽利町付近(加曽利貝塚より約2.1km下流)にて都川に合流し、都川は合流地点から西流して、JR本千葉駅付近にて向きを南に変え、東京湾に注いでいる。これら河川流域には沖積低地が広がっているが、本千葉駅付近には砂州が存在している。

この沖積低地は最終氷期の海面低下により深く下刻され、その後の縄文海進に伴う海面上昇により海水が入り込む溺れ谷と化したと考えられているが、都川下流域の砂州の形成も縄文海進最盛期に開始されたと考えられており(杉原1988)、縄文海進前後の海水準変動と砂州による閉塞等の要素により、都川流域の縄文時代の海岸線の変化が考察されている。貝塚・杉原前掲によれば、縄文海進ピーク時の海岸線は、坂月川と都川の合流地点より約1km坂月川を遡上した付近と推定され、約1.5km遡上した地点でも海水棲珪藻が検出されている(貝塚・阿久津1979)。その一方、4000~5000年前(未較正年代)に都川下流域は沼沢地になったという推定もある(杉原1988)。しかしこれらの研究はAMSによる年代測定が導入される以前の研究成果であり、その後の研究は行われていない。千葉市域における縄文時代各時期の海岸線の復元については、AMS法を用いた年代測定を伴うボーリング調査による解明が待たれていると言える。(松田)

文献

貝塚爽平・杉原重夫1976「加曽利南貝塚の地理」『加曽利南貝塚』中央公論美術出版

杉原重夫 1970「下総台地西部における地形の発達」『地理学評論』43-12, 703-718. 日本地理学会



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺の地形区分図

貝塚爽平・阿久津純1979「千葉県の低地と海岸における完新世の地形の変化(付都川・古山川合流点付近沖積層の珪藻群集)』『第四紀研究』17-4, 189-206. 日本第四紀学会

杉原重夫 1988「千葉市付近における縄文時代の海岸線の位置と古地理」『千葉市立加曽利貝塚博物館開館20周年記念特別講座講演集』千葉市立加曽利貝塚博物館

2 周辺の歴史的環境

ここでは加曽利貝塚周辺の遺跡を中心に千葉市の遺跡について概観する。

(1) 旧石器時代

千葉市内の旧石器時代の遺跡の調査例は多くはないが、千葉市緑区神明神社裏遺跡(関口2006)や太田法師遺跡(岡田2008)、椎名崎古墳群B支群(鶴岡2006)等で遺物集中地点が検出されている。加曽利貝塚の付近では、中央区荒久遺跡(第3図136)において旧石器時代前半期のナイフ形石器群や終末期の細石刃石器群が出土し、加曽利貝塚至近の京願台遺跡(同図40)や柳沢遺跡(同図75)で石器群が出土している。

(2) 縄文時代

縄文時代草創期は千葉市緑区六通神社南遺跡(島立他2003)や緑区弥三郎第2遺跡(織笠他1992)にて草創期の槍先形尖頭器等の石器群が出土している程度で、千葉市内で当該期の土器の検出は不明瞭である。早期前葉ないしは草創期後半になると若葉区東寺山石神遺跡(鈴木他1977)や同区山之越第1遺跡(第3図81)等、市内で撚糸文土器を出土する遺跡が増加するようになる。しかし該期の住居跡は緑区小山遺跡等(山下他1994)、数少ない遺跡での検出に留まる。早期の後半、条痕文土器期になると、多数の炉穴をもつ遺跡が急増し(稲毛区鳥喰東遺跡(千葉市教育委員会1976))、稲毛区鳥込貝塚(内野1971)や中央区向ノ台遺跡(同図132)のように貝塚も作られるようになる。

前期になると前期前葉に環状集落が出現し(稲毛区谷津台遺跡(伊庭他1988)・緑区小山遺跡(山下他1994))、前期後半には中央に墓域をもつ環状集落-若葉区木戸先遺跡(林田2000)が現れる。また前期では低地に立地する規模の大きな貝塚として中央区神門遺跡や宝導寺台遺跡がある(金丸他1989、寺門他1991、庄司1970)。また加曽利貝塚南側の谷を隔てた低位段丘上に縄文時代前期末葉~中期初頭の住居跡が調査された古山遺跡(同図73)があり、縄文時代前期の住居跡が検出されている加曽利貝塚東傾斜面低位面との一体的関係が想定される。

中期では前葉の阿玉台式期になるとまとまった数の住居からなる集落が出現するようになる。加曽利貝塚より北西約2kmに位置する若葉区根崎遺跡(同図12)や近傍の同区柳沢遺跡(同図75)等は阿玉台式期に限定される集落である。またこの阿玉台式期に始まる、またはそれに続く中期後葉の加曽利E式期に始まる継続的で大規模な環状貝塚が多数存在するようになる。環状貝塚は加曽利貝塚(同図1)を始め、その周辺では若葉区廿五里北貝塚(同図7)、廿五里遺跡(同図8)、荒屋敷貝塚(同図58)、中央区月ノ木貝塚(同図151)、へたの台貝塚(同図152)等がそれであり、市南部では緑区有吉北貝塚(西野他1998)、有吉南貝塚(西野他2008)がある。また地点貝塚にはなるが、加曽利貝塚の面する坂月川水系では若葉区蕨立遺跡(同図82)やさら坊遺跡(同図83)があり、坂月川を挟んで至近には京願台遺跡(同図40)滑橋貝塚(同図39)や広ヶ作遺跡(同図38)、遺跡の西隣に大作北遺跡(同図71)がある。

中期末葉から後期初頭にかけては大規模な環状貝塚は一旦途切れ、遺跡数が減る。千葉市若葉区中薮遺跡(同図77)、餅ヶ崎遺跡(西野他2019)等のように、それまでとは別の場所に集落が営まれるようになる。後期前葉の堀之内式期になると再び遺跡数が増え、再び大規模な集落や貝塚が存在するようになる。加曽利貝塚(同図1)がその一例であり、その周辺では若葉区草刈場貝塚(同図55)、荒屋敷貝塚(同図58)、台

門貝塚(同図65)等の貝塚町貝塚群、花輪貝塚(同図102)、中央区矢作貝塚(清藤他1981)、高崎台遺跡(同図141)等がある。また市西部では花見川区内野第1遺跡(古谷他2001)、築地貝塚(滝口1961)、犢橋貝塚(芹沢1961)、稲毛区園生貝塚(神尾1963)、市東南部では緑区木戸作貝塚(郷田他1979)、小金沢貝塚(郷田他1982)、六通貝塚(西野他2007)、大膳野南貝塚(中村他2014)、誉田高田貝塚(出口1991)等がある。後期中葉以降になると遺跡数は減少するものの、内野第1遺跡、犢橋貝塚、園生貝塚、台門貝塚、加曾利貝塚、六通貝塚のように後期後葉や晩期前半まで継続する遺跡があり、緑区築地台貝塚(折原1978・佐藤他2000)等のように後期後葉～晩期に主体がある遺跡もある。

(3) 弥生時代以降

千葉市内の弥生時代の遺跡は、総じて少ない。中でも弥生時代前期から中期前葉にかけては、集落が僅少で、わずかに若葉区根崎遺跡(第4図12)に前期の住居跡1軒が確認されているにすぎない。また中期前葉になると、若葉区新田山遺跡(同図92)や同区南屋敷遺跡(梁瀬1996)で再葬墓と思われる土器が出土しているが、集落がほとんど確認されていない。中期後葉になると、集落が増加する。中でも葭川流域の稲毛区踏形遺跡で大陸系磨製石器が複数種類まとまって出土し(長原2006)、若葉区戸張作遺跡では、環濠と思われる遺構も確認されている(菊池1998)。都川下流域の中央区星久喜遺跡(同図139)や若葉区城之腰遺跡(同図146)等で集落と墓域(方形周溝墓)の形成が確認できるようになる。後期になると中期後葉から継続する遺跡がある一方、若葉区車坂遺跡(同図66)や同区田向南遺跡(同図120)等、新たに集落の形成が確認される遺跡が増加する。

弥生時代終末から古墳時代初頭には、都川下流域の平地を望む台地縁辺部に、星久喜遺跡(同図139)や辺田遺跡(同図133)で方墳(方形周溝墓)が確認されている。中でも、星久喜遺跡1・2号墳出土の土師器で、出現期古墳の類例として知られる神門古墳群中の3号墳出土の手焙形土器と極めて近似する土器が目される。集落では、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての遺跡として中央区向ノ台遺跡(同図132)が調査されている。

古墳時代前期は遺跡数が増加し、市域全域に集落が確認されるようになる。市域南部で市内最大・最古の前方後円墳である大覚寺山古墳が村田川流域との関係の上で造営されるが、加曾利貝塚周辺を含む市域のほとんどの場所では前方後円墳は確認されない。若葉区姫宮遺跡(同図113)や若葉区石神遺跡(鈴木他1977)、同区戸張作遺跡(菊池1998)で方墳が造られる。市域南部を除き古墳規模が発達しないのが特徴だが、集落としては前述の石神遺跡や戸張作遺跡のある葭川流域に代表的な集落が偏在する。なお、加曾利貝塚の南の小支谷を挟んだ隣接台地上には、古墳時代前期と中期の集落が確認された古山遺跡があるが、周辺に同時期の古墳は確認されていない。この古山遺跡(同図73)からは、昭和63年の調査で三角板皮綴短甲の部材(22号住居跡)がみつか(田中他1990)、県内でも貴重な古手の武具が出土した遺跡として知られている。

中期の古墳は多くないが、葭川流域の石神遺跡で石枕の出土で知られる2号墳や、市内出土須恵器としては古相の好例が副葬されていた支川都川流域の若葉区坊屋敷遺跡5号墳(同図157)等で円墳が確認されている。比較的まとまった集落は、古山遺跡のように前期以来継続する遺跡が目立つものの、市域全体への拡散は顕著ではない。

後期になると円墳が増加し、群集墳が市域に広く拡散しながら造営される中、加曾利貝塚周辺では戸張作遺跡、若葉区東田遺跡(同図61)、新山遺跡(同図114)等では小型の前方後円墳も造られる。しかし、古墳そのものの大きさや群集規模は、総じて大きくはない。葭川流域の都町山遺跡等では、埋葬主体部に軟質砂岩を構築材とした石室を伴う円墳が散見されるが、都川流域の場合、埋葬主体部が木棺直葬の円

墳が主流となり、地域の中での明確な差として認識できる。集落も少なくないが、古墳規模に準ずるよう
に大きく発展する集落は少ない。市立加曾利中学校周辺にある立木南遺跡(同図116)や、その谷向の台地
上にある花輪貝塚(同図102)は、比較的まとまった後期の集落であり、前方後円墳が作られた新山遺跡(同
図114)との位置関係から、墓域と集落の密接な関係性が示唆される。

奈良・平安時代においては、当地域は下総国千葉郡糟噫菰郷に含まれると推定される。古墳時代後期か
ら平安時代まで継続する立木南遺跡は、掘立柱建物跡が見つかるなど、周辺の同時期の集落に比して長期
間かつ規模の大きな拠点集落と考えられる。なお、花輪貝塚でも同時期の集落が見つかっており、これら
の集落の前時代を差配したと推測される古墳時代後期の地域首長の墓域(前方後円墳を含む)と目される
新山遺跡の存在を含め、時代を超えた継続的な拠点集落が存在していた可能性があるのが加曾利中学校周
辺台地一帯の特徴といえる。

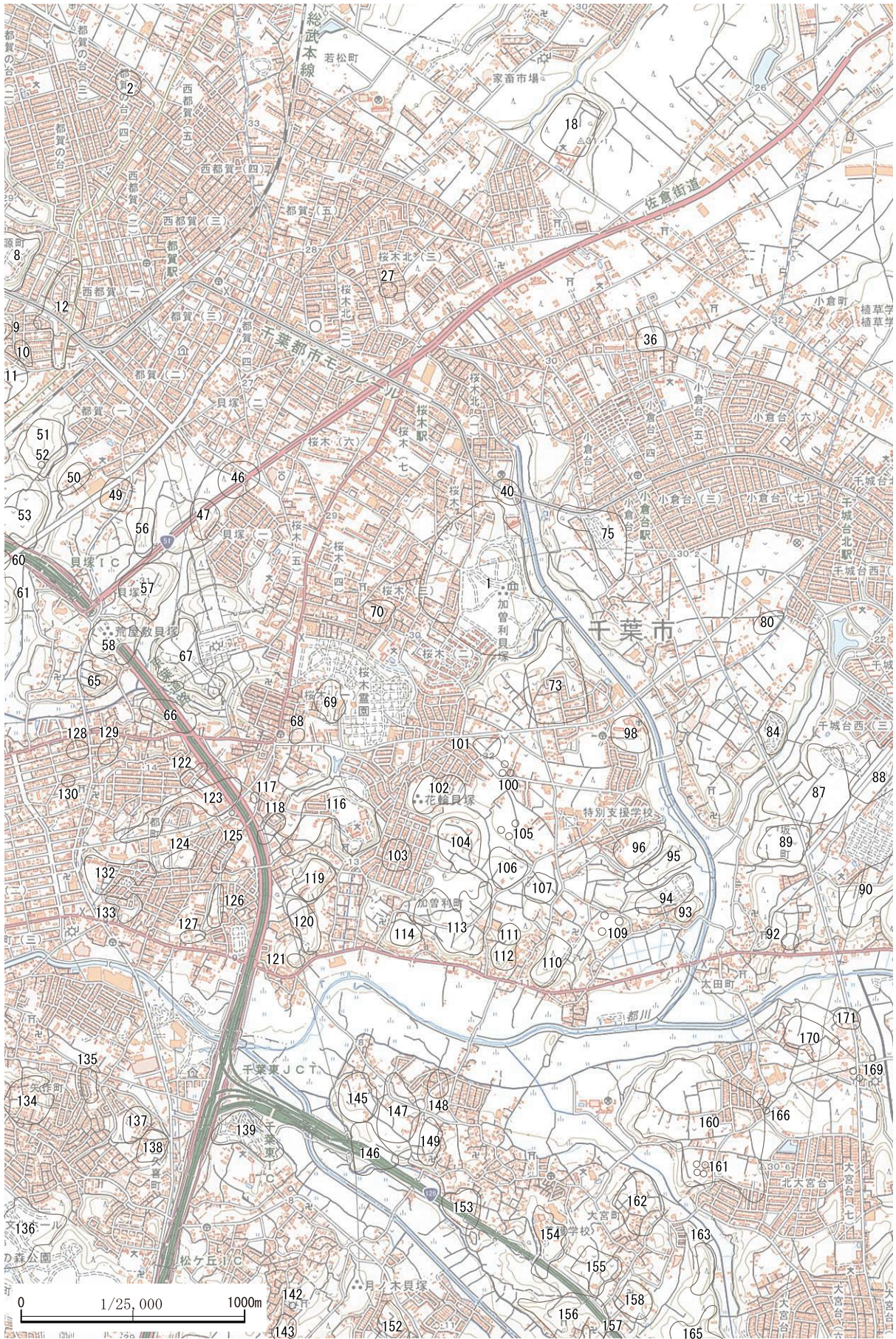
中近世においては、遺跡近傍の坂月川の谷頭付近(若松町・小倉町)に直線的な御成街道が通っている。
これは鷹狩りを目的として、船橋御殿と東金御殿を結んで造られた道路である。両御殿の中間にあたる若
葉区御殿町には御茶屋御殿が築かれており、発掘調査の結果、堀と土塁と区画された遺構が確認され(岡
田1995他)、平成16(2004)年に千葉市指定文化財となっている。(松田・長原)

文献(遺跡地図範囲外) 発行年・五十音順

- 芹沢長介 1961「千葉県千葉市犢橋貝塚」『日本考古学年報』9 日本考古学協会
滝口 宏 1961『印旛・手賀』早稲田大学考古学研究室
神尾明正 1963「園生貝塚の発掘による地形面とその考察」『千葉大学文理学部紀要』4-1 千葉大学
庄司 克 1970「宝導寺台貝塚発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』3 加曾利貝塚博物館
内野美三夫他1971『鳥込貝塚』鳥込貝塚発掘調査団
千葉市教育委員会1976「鳥込東遺跡」『千葉市史史料編1』千葉市
鈴木道之助他1977『東寺山石神遺跡』(財)千葉県文化財センター
折原 繁他1978『築地台貝塚・平山古墳』(財)千葉県文化財センター
郷田良一 1979『千葉東南部ニュータウン7 木戸作遺跡』(財)千葉県文化財センター
清藤順一他1981『千葉市矢作貝塚』(財)千葉県文化財センター
郷田良一他1982『千葉東南部ニュータウン10 小金沢貝塚』(財)千葉県文化財センター
伊庭彰一他1988『谷津台遺跡』千葉市遺跡調査会
金丸 誠他1989『千葉市浜野川神門遺跡』(財)千葉県文化財センター
出口雅人 1991『千葉市誉田高田貝塚範囲確認調査報告書』千葉県教育委員会
寺門義範他1991『千葉市神門遺跡』(財)千葉市文化財調査協会
織笠 昭他1992『土気南遺跡群Ⅱ 弥三郎第2遺跡』(財)千葉市文化財調査協会
山下亮介他1994「小山遺跡」『土気南遺跡群Ⅵ』(財)千葉市文化財調査協会
岡田茂弘 1995『千葉御茶屋御殿跡 第7次調査概報』千葉市教育委員会
小澤清男 1996「山王遺跡」『千葉市文化財調査協会年報』8 (財)千葉市文化財調査協会
梁瀬裕一 1996「南屋敷遺跡」『千葉市文化財調査協会年報』8 (財)千葉市文化財調査協会
菊池健一 1998『千葉市戸張作遺跡Ⅰ』(財)千葉市文化財調査協会
西野雅人他1998『千葉東南部ニュータウン19 千葉市有吉北貝塚Ⅰ』(財)千葉県文化財センター
菊池健一 1999『千葉市戸張作遺跡Ⅱ』(財)千葉市文化財調査協会



第3図 周辺の遺跡(1) 旧石器時代・縄文時代



第4図 周辺の遺跡(2) 弥生時代以降

第1表 周辺の遺跡一覧表

遺跡No.	遺跡名	所在地	種別	時代・時期	参考文献
1 若葉104	加曾利貝塚	若葉区桜木町135-10他	貝塚、集落跡	縄文(早・前・中・後・晩)、古墳(後)	別に記載
2 若葉43	大西遺跡	若葉区高品町大広	包蔵地	縄文(早・前・中)、弥生	
3 若葉31	渡戸台北遺跡	若葉区原町渡戸台	包蔵地	縄文(早・前・中・後)	
4 若葉29	渡戸台遺跡	若葉区原町渡戸台	包蔵地	縄文(早・前・中・後)	
5 若葉562	紅嶽遺跡	若葉区都賀の台1丁目	包蔵地	縄文(後)	
6 若葉30	渡戸台南遺跡	若葉区原町渡戸台	包蔵地	縄文(早・後)	
7 若葉1	廿五里北貝塚	若葉区源町851他	貝塚、集落跡	縄文(中・後)	湖口他2012
8 若葉28	廿五里遺跡	若葉区東寺山町2-6	貝塚、集落跡、城館跡、塚	縄文(中・後)、中世	穴倉1973、森本他1986、湖口他2012、長原2017・2018
9 若葉40	原遺跡	若葉区原町81-1他	集落跡	縄文(早～後)、奈良・平安	寺門他1990
10 若葉34	山王遺跡	若葉区原町278-1他	集落跡、古墳	縄文(早～後)、弥生(後)、古墳(後)、奈良・平安	寺門他1990、白根1995
11 若葉35	谷津頭遺跡	若葉区原町157-1他	集落跡	縄文(中)、古墳(後)	(財)千葉市文化財調査協会 1991
12 若葉37	根崎遺跡	若葉区原町365-1	包蔵地、集落跡	旧石器、縄文(早～晩)、弥生、古墳、奈良・平安	山口他1986、寺門他1990、白根1995、鶴岡1995、湖口1997、佐藤1997、井出2021、小林(高)2021
13 若葉38	中広遺跡	若葉区原町中広	包蔵地	縄文(中・後)	
14 四街道212	三ツ谷遺跡	四街道市和良比字三ツ谷417他	包蔵地	縄文(中)	
15 若葉87	東台遺跡	若葉区若松町東台	包蔵地	縄文(前)	松原他1996
16 若葉90	東台南遺跡	若葉区若松町東台	包蔵地	縄文(前)	
17 若葉85	中広遺跡	若葉区若松町中広	包蔵地		
18 若葉98	滑橋遺跡	若葉区若松町	集落跡	平安	
19 若葉86	川野辺遺跡	若葉区若松町東台	包蔵地	縄文(中)	
20 若葉42	北原遺跡	若葉区都賀北原	包蔵地	縄文(後)	
21 若葉50	北原遺跡	若葉区高品町北原	包蔵地	縄文(早・前・後)	
22 若葉59	六方境南遺跡	若葉区貝塚町六方境	包蔵地	縄文(中・後)	
23 若葉60	六方境遺跡	若葉区貝塚町六方境	包蔵地	縄文	
24 若葉58	六方境東遺跡	若葉区貝塚町六方境	包蔵地	縄文	
25 若葉70	大塚北遺跡	若葉区貝塚町大塚	包蔵地		
26 若葉71	大塚原遺跡	若葉区貝塚町大塚	包蔵地	縄文	
27 若葉69	中尾余遺跡	若葉区貝塚町中尾余	包蔵地	古墳(後)	
28 若葉92	中台遺跡	若葉区若松町中台	包蔵地	縄文(中)	
29 若葉91	滑橋台北遺跡	若葉区若松町滑橋台	包蔵地	縄文(中・後)	
30 若葉93	榊形遺跡	若葉区若松町榊形	包蔵地		
31 若葉89	中新田遺跡	若葉区若松町中新田	包蔵地	縄文(中)	
32 若葉97	榊形南遺跡	若葉区若松町榊形	包蔵地	縄文(中)	
33 若葉115	庚初遺跡	若葉区小倉町庚初	包蔵地	縄文(中)	
34 若葉114	新道遺跡	若葉区小倉町新道	包蔵地	縄文(中)	
35 若葉96	滑橋台遺跡	若葉区若松町滑橋台	包蔵地	縄文(後)	

	遺跡No.	遺跡名	所在地	種別	時代・時期	参考文献
36	若葉94	滑橋台南遺跡	若葉区若松町滑橋台	包蔵地	縄文(後)、平安	
37	若葉95	若松・広ヶ作遺跡	若葉区若松町広作	包蔵地	縄文(中)	
38	若葉116	広ヶ作遺跡	若葉区小倉町1754-1他	集落跡、貝塚	縄文(中・後)	武部1984、山下1990、西野2020
39	若葉112	滑橋貝塚	若葉区小倉町1016他	貝塚、集落跡	縄文(前・中・後)	
40	若葉109	京願台遺跡	若葉区桜木町京願台	包蔵地、集落跡、貝塚	旧石器、縄文(中)	山口他1986
41	若葉100	東大作遺跡	若葉区桜木町東大作	包蔵地		
42	若葉101	東大作西遺跡	若葉区桜木町東大作	包蔵地		
43	若葉102	西大作遺跡	若葉区桜木町西大作	包蔵地		
44	若葉67	耳切遺跡	若葉区貝塚町耳切	包蔵地	縄文	
45	若葉68	馬込遺跡	若葉区貝塚町馬込	包蔵地		
46	若葉73	須摩堀遺跡	若葉区貝塚町1306-69他	包蔵地	旧石器、縄文、奈良・平安	田井1986
47	若葉72	谷津上遺跡	若葉区貝塚町1365-1他	包蔵地、集落跡	旧石器、縄文(中・後)、古墳(後)、平安	田井1986、小澤1997、塚原2000、築瀬2001
48	若葉65	谷ツ上遺跡	若葉区貝塚町谷ツ上	包蔵地	縄文(中・後)	
49	若葉62	草刈場北遺跡	若葉区貝塚町草刈場	包蔵地	旧石器、縄文(中・後)	菊池(健)2002、長原2004
50	若葉66	尻籠遺跡	若葉区貝塚町尻籠	包蔵地	縄文、平安	
51	若葉568	高品尻籠遺跡	若葉区高品町1060-1他	集落跡、古墳	縄文時代(中・後期)・古墳時代・奈良・平安時代	塚原他2011、湖口他2012、築瀬2013
52	若葉49	駒形古墳	若葉区高品町駒形	古墳	古墳	
53	若葉47	高品第2遺跡	若葉区高品町キツ長	集落跡、古墳	縄文(中・後)、奈良・平安	古内1973
54	若葉64	向ノ内遺跡	若葉区貝塚町向ノ内	貝塚	縄文(中・後)	
55	若葉61	草刈場貝塚	若葉区貝塚町水戸作	貝塚、集落跡	縄文(中・後・晩)	
56	若葉63	貝殻後遺跡	若葉区貝塚町貝殻後	貝塚、古墳	縄文(中)、古墳	
57	若葉79	荒屋敷北貝塚	若葉区貝塚町681-1他	集落跡、貝塚	縄文(中・後)、古墳(中・後)、奈良・平安	田井1986、小澤1996
58	若葉77	荒屋敷貝塚	若葉区貝塚町畑中	貝塚、集落跡	縄文(中・後)、古墳(中)	西山1974、中山他1976、種田他1978、横田他1998
59	若葉78	荒屋敷西遺跡	若葉区貝塚町向	貝塚	縄文(前・中)	倉田2003、長原2005
60	若葉48	キツ長南遺跡	若葉区高品町93-1他	包蔵地	縄文、平安	(財)千葉市文化財調査協会1990
61	若葉56	東田遺跡	若葉区高品町80他	集落跡、古墳	縄文(早～中)、弥生(後)、古墳、奈良・平安	横田他1989
62	若葉55	貝堤遺跡	若葉区高品町貝堤	貝塚	縄文(早・前・中・後)	
63	若葉80	干場遺跡	若葉区貝塚町干し場	包蔵地、貝塚	縄文(早・前・後)	
64	若葉565	大門遺跡	千葉市若葉区			
65	若葉76	台門貝塚	若葉区貝塚町殿作	貝塚	縄文(中・後・晩)、古墳(後)	田中2008
66	若葉82	車坂遺跡	若葉区貝塚町車坂	集落跡、貝塚、塚	縄文(前)、弥生(後)、古墳(中・後)、奈良・平安、中近世	真下1973
67	若葉75	殿山遺跡	若葉区貝塚町1444-1他	集落跡	縄文(中・後)、古墳(後)、平安	菊池(健)1995
68	若葉106	上人塚遺跡	若葉区桜木町上人塚	包蔵地	縄文(前)、平安	
69	若葉99	大作遺跡	若葉区桜木町大作	古墳、包蔵地	縄文(中・後)、古墳、平安	千田1983
70	若葉103	南大作遺跡	若葉区桜木町南大作	包蔵地	縄文、古墳、奈良・平安	田中2015

	遺跡No	遺跡名	所在地	種別	時代・時期	参考文献
	71	若葉566 大作北遺跡	千葉市若葉区			佐藤他2002、菊池(健)他2008
	72	若葉105 加曾利貝塚隣接地遺跡	若葉区桜木町283-1他	集落跡、貝塚	縄文(中・後)	(財)千葉市文化財調査協会 1989
	73	若葉135 古山遺跡	若葉区加曾利町1848他	集落跡	縄文(早・前・中・後・晩)、弥生(後)、古墳(前・中)	大宮1937、青沼1976、横田1989、田中他1990
	74	若葉125 玄藤遺跡	若葉区小倉町山王936他	包蔵地	縄文(中)	
	75	若葉126 柳沢遺跡	若葉区小倉台1丁目1020	包蔵地、集落跡	旧石器、縄文(早・前・中・後)	山口他1986、古谷2009
	76	若葉118 八津田遺跡	若葉区小倉町八津田	包蔵地	縄文(中)	
	77	若葉113 中薮遺跡	若葉区小倉町861-9他	集落跡、貝塚	縄文(中)	今泉他1986
	78	若葉121 木戸作遺跡	若葉区小倉町木戸作	包蔵地	縄文(後)	
	79	若葉119 道ノ堀遺跡	若葉区小倉町道ノ堀	包蔵地	縄文(後)	山下2012
	80	若葉120 南閑堀遺跡	若葉区小倉町南閑堀	包蔵地	縄文(後)、平安	
	81	若葉117 山之越第1遺跡	若葉区小倉町山之越	包蔵地	縄文(中)	長原2018、小林(嵩)他2020
	82	若葉169 蕨立遺跡	若葉区千城台西2丁目、蕨立	貝塚、集落跡	縄文(中・後)	武田1977、岡崎他1982
	83	若葉168 さら坊遺跡	若葉区千城台西3丁目、さら坊	貝塚、集落跡	縄文(中・後)	
	84	若葉124 小倉山王遺跡	若葉区小倉町山王424他	集落跡	古墳、奈良・平安	花嶋 1984
	85	若葉122 山之越第2遺跡	若葉区小倉町山之越	包蔵地	縄文(中)	
	86	若葉123 山之越南遺跡	若葉区小倉町	包蔵地	縄文(後)	
	87	若葉159 台さら坊遺跡	若葉区坂月町台さら坊	貝塚、古墳	縄文(中・後)、古墳、平安	田中2015、長原2017、長原2018
	88	若葉164 味噌草野遺跡	若葉区坂月町味噌草野	包蔵地	縄文(中・後)、平安	菊池(健)2002、塚原他2011、西野2020
	89	若葉163 松山台遺跡	若葉区坂月町201-1他	古墳、集落跡	縄文(中・後)、古墳、奈良・平安	小澤1995、横田他1998
	90	若葉158 夕賀遺跡	若葉区坂月町夕賀	包蔵地	平安	
	91	若葉160 家ノ上遺跡	若葉区坂月町家ノ上	包蔵地		
	92	若葉165 新田山遺跡	若葉区坂月町山王	包蔵地	縄文、弥生(中)、古墳(後)	
	93	若葉144 永作古墳	若葉区加曾利町永作	古墳	古墳	
	94	若葉142 永作南遺跡	若葉区加曾利町1、502他	集落跡	縄文、古墳(後)、平安	
	95	若葉140 永作遺跡	若葉区加曾利町永作	包蔵地	縄文(後)、古墳(前・後)	
	96	若葉143 永作北遺跡	若葉区加曾利町1、482-1他	集落跡	縄文(中・後)、古墳(後)、奈良・平安	白根1993
	97	若葉141 永作西遺跡	若葉区加曾利町永作	包蔵地	縄文(中・後)	
	98	若葉137 若郷遺跡	若葉区加曾利町1、803他	包蔵地、集落跡	旧石器、縄文(中・後)、古墳(前・中・後)、奈良・平安	寺門1991、飛田1993
	99	若葉138 若郷南遺跡	若葉区加曾利町若郷	包蔵地		
	100	若葉139 若郷古墳群	若葉区加曾利町若郷	古墳	古墳	千葉市埋蔵文化財調査センター2014
	101	若葉108 上人塚遺跡	若葉区桜木町上人塚	包蔵地	平安	
	102	若葉130 花輪貝塚	若葉区加曾利町花輪	貝塚	縄文(中・後)、古墳、奈良・平安	田中2006
	103	若葉133 花輪遺跡	若葉区加曾利町花輪	集落跡	縄文、弥生	
	104	若葉136 高畑遺跡	若葉区加曾利町高畑	包蔵地	平安	
	105	若葉150 大泉台古墳群	若葉区加曾利町大泉台	古墳	古墳	

	遺跡No	遺跡名	所在地	種別	時代・時期	参考文献
106	若葉145	大泉谷遺跡	若葉区加曾利町大和泉台	包蔵地	平安	
107	若葉146	台畑遺跡	若葉区加曾利町1334-1他	包蔵地	古墳	横田1988、寺門他1990、白根1996、倉田2003、長原2004、塚原2004
108	若葉147	台畑東遺跡	若葉区加曾利町台畑	包蔵地		
109	若葉157	辺田前古墳群	若葉区加曾利町辺田前	古墳	古墳	
110	若葉155	作遺跡	若葉区加曾利町小原作	古墳、塚	古墳、近世	
111	若葉148	台畑南遺跡	若葉区加曾利町台畑	包蔵地	平安	
112	若葉149	台畑古墳群	若葉区加曾利町台畑	古墳	古墳	小林(嵩)2018
113	若葉154	姫宮遺跡	若葉区加曾利町659-1他	集落跡	古墳、奈良・平安、中近世	
114	若葉152	新山遺跡	若葉区加曾利町新山	集落跡、古墳	古墳	
115	若葉129	立木遺跡	若葉区加曾利町立木	包蔵地	縄文(前)	
116	若葉127	立木南遺跡	若葉区加曾利町959-1他	包蔵地、集落跡、古墳	旧石器、縄文(早・後)、古墳(前・後)、奈良・平安	倉田他1988、山下1992、小澤1994、永塚1996、横田他1998
117	若葉132	聖人塚古墳	若葉区加曾利町和田	古墳	古墳	三森1973
118	若葉131	聖人塚遺跡	若葉区加曾利町915-1他	集落跡、古墳	縄文(前)、古墳	小澤1995
119	若葉128	田向遺跡	若葉区加曾利町田向	包蔵地	平安	倉田2016、長原2017、小林(嵩)2017
120	若葉151	田向南遺跡	若葉区加曾利町田向	古墳、集落跡	縄文、弥生、古墳(前・中)、中世	山本勇1984
121	若葉153	和田前遺跡	若葉区加曾利町和田	集落跡、古墳	縄文(中・後・晩)、弥生(後)、古墳(前)	
122	中央10	天神台遺跡	中央区都町天神台	集落跡、古墳	古墳	
123	中央9	都町・山王遺跡	中央区都町1254-9他	古墳、集落跡	縄文(早～後)、古墳(後)、中世	横田1990、築瀬1991、山下1992、小澤1995、白根1995、小澤1996、大賀他2000、古谷2002、白根2003
124	中央15	松原遺跡	中央区都町松原	塚、包蔵地	縄文、中近世	
125	中央18	蛤谷津上遺跡	中央区都町1215-3他	集落跡、古墳	縄文(中)、古墳(前)	小澤1994、湖口1995
126	若葉134	和田前西遺跡	若葉区加曾利町878-1他	集落跡	縄文、弥生、古墳(前)	
127	中央17	御所ヶ原郭遺跡	中央区都町御所ヶ原	古墳、包蔵地	古墳(前)	
128	中央11	貝塚向遺跡	中央区都町貝塚向	包蔵地	縄文(前)、弥生(後)	
129	中央12	木戸場北遺跡	中央区都町木戸場	包蔵地	平安	
130	中央14	山ノ根遺跡	中央区都町山ノ根	包蔵地	平安	
131	中央13	木戸場遺跡	中央区都町木戸場	貝塚、集落跡	縄文(早・前)	
132	中央8	向ノ台遺跡	中央区都町向ノ台	集落跡、貝塚	縄文(早・前)、古墳、中近世	塚原2011、塚原他2016
133	中央142	辺田遺跡	中央区都町辺田1117-13他	集落跡	縄文(前)、弥生、古墳	古谷2008、菊池(健)他2008
134	中央20	井合遺跡	中央区矢作町906-1他	集落跡	縄文(早・後)、古墳(中)、平安	田川1983、横田他1989、横田1990、山下1992、白根1993
135	中央21	矢作三山塚遺跡	中央区矢作町545-1	集落跡、塚	縄文(早)、古墳(前)、近世	田川他1978
136	中央28	荒久遺跡	中央区青葉町654	包蔵地、集落跡	旧石器、縄文(早・前・後)、弥生(後)、古墳(前～後)	田村他1989、小林(信)1989、渡辺1991、白井2006
137	中央47	和唐地遺跡	中央区星久喜町和唐地	包蔵地	縄文(早・後)、古墳(中)	
138	中央46	琵琶首台遺跡	中央区星久喜町枇杷首台	包蔵地	縄文(中)、古墳(後)	
139	中央45	星久喜遺跡	中央区星久喜町小路谷	集落跡	縄文(早・前・中)、弥生(中)、古墳(前・中・後)	柿沼1973、山本1984、倉田2016

	遺跡No	遺跡名	所在地	種別	時代・時期	参考文献	
	140	中央49	南部多遺跡	中央区星久喜町南部田	包蔵地	縄文	
	141	中央48	高崎台遺跡	中央区星久喜町高崎台	貝塚	縄文(後)	倉田2016、木口他2023
	142	中央52	取林古墳	中央区星久喜町取林	古墳	古墳	
	143	中央51	取林遺跡	中央区星久喜町取林	包蔵地	古墳(後)	
	144	若葉174	下和田西遺跡	若葉区大宮町下和田	包蔵地	縄文(早)	
	145	若葉172	上和田遺跡	若葉区大宮町宇上和田	包蔵地	縄文(前)、平安	
	146	若葉175	城之腰遺跡	若葉区大宮町城之腰	城館跡、集落跡	縄文(中)、弥生、古墳(後)、奈良・平安、中近世(戦国)	菊池(真)1979
	147	若葉171	宮ノ前遺跡	若葉区大宮町宮ノ前	包蔵地	縄文(中・晩)、古墳(後)、平安	
	148	若葉181	下和田遺跡	若葉区大宮町下和田	包蔵地	平安	
	149	若葉173	東屋敷遺跡	若葉区大宮町東屋敷	包蔵地	縄文(中)、平安	
	150	中央50	道免遺跡	中央区星久喜町道免	貝塚	縄文(早・中・後)	
	151	中央85	月ノ木貝塚	中央区仁戸名町月ノ木	集落跡、貝塚	縄文(中・後)	
	152	中央84	へたの台貝塚	中央区仁戸名町282-5他	貝塚、集落跡	縄文(中)、古墳(中・後)、平安、近世	田中1990、寺門1991、白根1993、山下2007、湖口他2012、小林(嵩)2015、木口他2023
	153	若葉180	西屋敷遺跡	若葉区大宮町西屋敷	集落跡、古墳	縄文(中)、古墳(後)、奈良・平安	菊池(真)1979
	154	若葉204	稲荷台遺跡	若葉区大宮台1066他	集落跡	縄文(中)、弥生、古墳、奈良・平安、中近世	村田1991
	155	若葉192	宿遺跡	若葉区大宮町宿	包蔵地	縄文(後)、平安	
	156	若葉199	近江谷・城山遺跡	若葉区大宮町近江谷	城館跡、包蔵地、集落跡	縄文、平安、中世(戦国後期)	西山1988、横田1990
	157	若葉198	坊屋敷遺跡	若葉区大宮町1621他	包蔵地、集落跡、古墳	旧石器、縄文(中)、古墳(後)、中世	小澤1997、中山2000、飛田2004
	158	若葉200	栄福寺遺跡	若葉区大宮町3869他	城館跡、古墳、塚、包蔵地	縄文(後)、古墳(前・後)、中近世	小澤1996
	159	若葉201	下田南遺跡	若葉区大宮町下田町	包蔵地		
	160	若葉176	瀧ノ谷遺跡	若葉区大宮町3654他	集落跡、貝塚、古墳	縄文(前・中・後)、弥生(後)、古墳(前・中・後)、奈良・平安	横田1988
	161	若葉186	瀧ノ谷古墳群	若葉区大宮町瀧ノ谷	古墳	古墳	
	162	若葉177	押元貝塚	若葉区大宮町押元3763他	貝塚	縄文(中・後)、古墳(後)	
	163	若葉194	東五郎北遺跡	若葉区大宮町東五郎	包蔵地	縄文(中・後)、古墳(後)	
	164	若葉191	三ノ作遺跡	若葉区大宮町三ノ作	包蔵地	縄文(中・後)	
	165	若葉187	東五郎遺跡	若葉区大宮町東五郎	集落跡、古墳	縄文(中・後)、古墳(中・後)、平安	対馬他1977
	166	若葉184	大久保古墳群	若葉区大宮町大久保	古墳	古墳	
	167	若葉183	太田遺跡	若葉区大宮町太田	包蔵地	縄文	
	168	若葉178	網田遺跡	若葉区大宮町網田	包蔵地	縄文(中)	佐藤1999
	169	若葉185	聖天古墳群	若葉区大宮町網田	古墳	古墳	
	170	若葉179	太田向阿弥田遺跡	若葉区大宮町太田向	集落跡、古墳	縄文(早・前・後)、古墳(前)、奈良・平安	
	171	若葉182	聖天遺跡	若葉区大宮町聖天	包蔵地	古墳(前・後)	

- 佐藤順一他2000『千葉市築地台貝塚』（財）千葉市文化財調査協会
- 林田利之 2000『木戸先遺跡』『千葉県の歴史 資料編 考古1（旧石器・縄文時代）』 千葉県
- 古谷 涉他2001『千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書』（財）千葉市文化財調査協会
- 島立 桂他2003『六通神社南遺跡』『千葉東南部ニュータウン26』（財）千葉県文化財センター
- 関口達彦 2006『東南部ニュータウン36 千葉市神明神社裏遺跡1（旧石器時代）』（財）千葉県教育振興財団文化財センター
- 鶴岡 健 2006『東南部ニュータウン35 千葉市椎名崎古墳群B支群』（財）千葉県教育振興財団
- 長原 亘 2006『踏形遺跡』『埋蔵文化財調査センター年報』18（財）千葉市教育振興財団
- 西野雅人他2007『千葉東南部ニュータウン37 千葉市六通貝塚』（財）千葉県教育振興財団
- 岡田誠造 2008『東南部ニュータウン39 千葉市太田法師遺跡1（旧石器時代）』（財）千葉県教育振興財団文化財センター
- 西野雅人他2008『千葉東南部ニュータウン40 千葉市有吉南貝塚』（財）千葉県教育振興財団文化財センター
- 中村哲也他2014『大膳野南貝塚』（公財）千葉市教育振興財団
- 西野雅人他2019『千葉市餅ヶ崎遺跡』 千葉市埋蔵文化財調査センター
- 文献**（遺跡地図範囲内）
- 大宮守誠 1937「千葉県加曾利古山貝塚に就いて」『考古学雑誌』27-6 考古学会
- 柿沼修平 1973「星久喜遺跡」『京葉』（財）千葉県都市公社
- 宍倉昭一郎1973「廿五里南貝塚」『日本考古学年報』24 考古学会
- 古内 茂 1973「高品第2遺跡」『京葉』（財）千葉県都市公社
- 真下高幸 1973「車坂遺跡」『京葉』（財）千葉県都市公社
- 三森俊彦 1973「聖人塚古墳」『京葉』（財）千葉県都市公社
- 西山太郎 1974『千葉市荒屋敷貝塚－遺構確認報告書－』（財）千葉県都市公社
- 青沼道文 1976「古山遺跡」『千葉市加曾利町古山遺跡確認調査報告 千葉市文化財報告書 第1集』 千葉市教育委員会
- 中山吉秀他1976『千葉市荒屋敷貝塚－貝塚外縁部遺構確認調査報告－』（財）千葉県文化財センター
- 武田宗久 1977『蕨立遺跡』 蕨立貝塚発掘調査団
- 対馬郁夫他1977『千葉市大宮町東五郎遺跡発掘調査報告書』 東五郎遺跡調査団
- 種田齊吾他1978『千葉市荒屋敷貝塚 貝塚中央部発掘調査報告』 千葉市教育委員会
- 田川 良他1978『千葉市矢作三山塚発掘調査略報』 矢作三山塚発掘調査団
- 菊池真太郎1979『千葉市城の腰遺跡・西屋敷遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 岡崎文喜他1982『蕨立遺跡』『遺跡研究論集Ⅱ』 蕨立遺跡調査会
- 田川 良 1983『井合遺跡発掘調査報告書』 千葉市遺跡調査会
- 千田利明 1983『大作遺跡』『千葉市文化財調査報告書 第6集』 千葉市教育委員会
- 武部喜充他1984『広ヶ作遺跡調査報告』 千葉市遺跡調査会
- 花嶋興一 1984『千葉県千葉市小倉町山王遺跡発掘調査報告書』 千葉市遺跡調査会
- 山本 勇 1984「星久喜遺跡」「田向南遺跡」『千葉市文化財調査報告書 第8集』 千葉市教育委員会
- 今泉 潔他1986『千葉市中薮遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 田井知二 1986『千葉市荒屋敷北貝塚・谷津上・須摩堀遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 森本和男他1986『廿五里遺跡』『千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター
- 山口典子他1986『柳沢遺跡』『根崎遺跡』『京願台遺跡』『千葉都市モノレール関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

(財)千葉県文化財センター

倉田義広他1988『立木南遺跡』(財)千葉市文化財調査協会

西山太郎 1988「近江谷・城山遺跡」『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第9集』(財)千葉県文化財センター

横田正美 1988「台畑遺跡」「瀧ノ谷遺跡」『昭和63年度千葉市内遺跡群発掘調査報告書』千葉市教育委員会

小林信一 1989『千葉市荒久遺跡(2)』(財)千葉県文化財センター

田村隆他 1989『千葉市荒久遺跡(1)』(財)千葉県文化財センター

(財)千葉市文化財調査協会1989「加曾利貝塚隣接地遺跡」『千葉市文化財調査協会年報』1

横田正美他1989「井合遺跡」『昭和63年度千葉市内遺跡群発掘調査報告書』千葉市教育委員会

横田正美 1989「古山遺跡」『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 昭和63年度』(財)千葉市文化財調査協会

横田正美他1989「東田遺跡」『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 昭和63年度』(財)千葉市文化財調査協会

田中英世 1990『千葉市へたの台貝塚』(財)千葉市文化財調査協会

田中英世他1990『千葉市古山遺跡』(財)千葉市文化財調査協会

(財)千葉市文化財調査協会1990「キツ長南遺跡」『千葉市文化財調査協会年報』2

寺門義範他1990「原遺跡」「山王遺跡」「根崎遺跡」「台畑遺跡」『埋蔵文化財調査(原町遺跡群)報告書』千葉市教育委員会

山下亮介 1990「広ヶ作遺跡」『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成元年度』千葉市遺跡調査会

横田正美 1990「都町・山王遺跡」「井合遺跡」「近江谷・城山遺跡」『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成元年度』
千葉市教育委員会

(財)千葉市文化財調査協会1991「谷津頭遺跡」『千葉市文化財調査協会年報』3

寺門義範 1991「若郷遺跡」「へたの台貝塚」『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成2年度』千葉市教育委員会

村田六郎太1991『稲荷台遺跡』(財)千葉市文化財調査協会

築瀬裕一 1991「都町・山王遺跡」『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成12年度』千葉市教育委員会

渡辺修一 1991『千葉市荒久遺跡(3)』(財)千葉県文化財センター

山下亮介 1992「立木南遺跡」「都町・山王遺跡」「井合遺跡」『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成3年度』
千葉市教育委員会

白根義久 1993「井合遺跡」「へたの台貝塚」『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成4年度』千葉市教育委員会

白根義久 1993『千葉市永作北遺跡』(財)千葉市文化財調査協会

飛田正美 1993『千葉市若郷遺跡』(財)千葉市文化財調査協会

小澤清男 1994「立木南遺跡」「蛤谷津上遺跡」『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成5年度』千葉市教育委員会

小澤清男 1995「松山台遺跡」「聖人塚遺跡」「都町・山王遺跡」『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成6年度』
千葉市教育委員会

菊池健一 1995「殿山遺跡」『千葉市文化財調査協会年報』7 (財)千葉市文化財調査協会

湖口淳一 1995『千葉市蛤谷津上遺跡』(財)千葉市文化財調査協会

白根義久 1995『千葉市山王遺跡』(財)千葉市文化財調査協会

白根義久 1995「根崎遺跡」「山王遺跡」『千葉市原町遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』(財)千葉市文化財調査協会

鶴岡栄一 1995『千葉市根崎遺跡(I地区)』(財)千葉市文化財調査協会

小澤清男 1996「荒屋敷北貝塚」「都町・山王遺跡」「栄福寺遺跡」『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成7年度』
千葉市教育委員会

小澤清男 1996「山王遺跡」『千葉市文化財調査協会年報』8 (財)千葉市文化財調査協会

白根義久 1996「台畑遺跡」『千葉市原町遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』(財)千葉市文化財調査協会

- 永塚俊司 1996『立木南遺跡』 千葉大学文学部考古学研究室
- 松原典明他1996『東台遺跡』『土気南遺跡群Ⅶ』 (財)千葉市文化財調査協会
- 湖口淳一 1997「根崎遺跡』『千葉市原町遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』 (財)千葉市文化財調査協会
- 小澤清男 1997「谷津上遺跡」「坊屋敷遺跡」「埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成8年度」 千葉市教育委員会
- 佐藤順一 1997『千葉市根崎遺跡K地点』 千葉市教育委員会
- 横田正美他1998「荒屋敷貝塚」「松山台遺跡」「立木南遺跡」「埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成9年度」
千葉市教育委員会
- 佐藤順一 1999「網田遺跡』『千葉市榎作遺跡・網田遺跡・宇津志野遺跡群・海老遺跡・荒屋敷貝塚』 (財)千葉市文化財調査協会
- 大賀健他 2000『千葉市山王遺跡発掘調査報告書』 千葉市教育委員会
- 塚原勇人 2000「谷津上遺跡」「埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成11年度」 千葉市教育委員会
- 中山貴正 2000『千葉市坊屋敷遺跡』 (財)千葉市文化財調査協会
- 築瀬裕一 2001「谷津上遺跡」「埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成12年度」 千葉市教育委員会
- 菊池健一 2002『千葉市川崎遺跡・草刈場北遺跡・味噌草野遺跡』 (財)千葉市文化財調査協会
- 佐藤順一他2002「大作北遺跡」「埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成13年度」 千葉市教育委員会
- 古谷 渉 2002『千葉市都町山王遺跡』 (財)千葉市文化財調査協会
- 倉田義広 2003「荒屋敷西遺跡」「台畑遺跡」「埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成14年度」 千葉市教育委員会
- 白根義久 2003『千葉市都町山王遺跡・居寒台遺跡』 (財)千葉市文化財調査協会
- 塚原勇人 2004『千葉市台畑遺跡』 (財)千葉市教育振興財団
- 長原 亘 2004「草刈場北遺跡」「台畑遺跡」「埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成15年度」 千葉市教育委員会
- 飛田正美 2004『千葉市坊屋敷遺跡Ⅱ』 (財)千葉市教育振興財団
- 長原 亘 2005『千葉市荒屋敷西遺跡・菱名第遺跡』 (財)千葉市教育振興財団
- 白井久美子2006「荒久遺跡』『千葉市中野台遺跡・荒久遺跡(4)』 (財)千葉県文化財センター
- 田中英世 2006『千葉市花輪貝塚-平成15年度確認調査報告-』 (財)千葉市教育振興財団
- 山下亮介 2007「へたの台貝塚』『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成18年度」 千葉市教育委員会
- 菊池健一他2008「大作北遺跡」「辺田遺跡』『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成19年度」 千葉市教育委員会
- 田中英世 2008『千葉市台門貝塚』 (財)千葉市教育振興財団
- 古谷 渉 2008『千葉市辺田遺跡』 (財)千葉市教育振興財団
- 古谷 渉 2009「柳沢遺跡』『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成20年度」 千葉市教育委員会
- 塚原勇人他2011「味噌草野遺跡」「高品尻籠遺跡』『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成22年度」 千葉市教育委員会
- 塚原勇人 2011『千葉市向ノ台遺跡』 (財)千葉市教育振興財団
- 湖口淳一他2012「廿五里遺跡」「廿五里北貝塚」「高品尻籠遺跡」「へたの台貝塚』『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成23年度」 千葉市教育委員会
- 山下亮介 2012「道ノ堀遺跡』『埋蔵文化財調査センター年報』24 千葉市埋蔵文化財調査センター
- 築瀬裕一 2013「高品尻籠遺跡』『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成24年度」 千葉市教育委員会
- 千葉市埋蔵文化財調査センター2014「若郷古墳群』『埋蔵文化財調査センター年報』26
- 小林 嵩 2015『千葉市へたの台貝塚』 (財)千葉市教育振興財団
- 田中英世 2015「南大作遺跡」「台さら坊遺跡』『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成26年度」 千葉市教育委員会
- 倉田義広 2016「田向遺跡」「星久喜遺跡」「高崎台遺跡』『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成27年度」 千葉市教育

委員会

塚原勇人他2016『千葉市向ノ台遺跡Ⅱ』（公財）千葉市教育振興財団

小林 嵩 2017『千葉市田向遺跡』（公財）千葉市教育振興財団

長原 亘 2017「廿五里遺跡」「台さら坊遺跡」「田向遺跡」『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書 平成28年度』

千葉市教育委員会

小林 嵩 2018『千葉市台畑古墳群』（公財）千葉市教育振興財団

長原 亘 2018「廿五里遺跡」「山之越第1遺跡」「台さら坊遺跡」『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書 平成29年度』

千葉市教育委員会

西野雅人 2020「味噌草野遺跡」「広ヶ作遺跡」『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書 令和元年度』 千葉市教育委員会

小林 嵩他2020『千葉市山之越第1遺跡』（公財）千葉市教育振興財団

井出祥子 2021「根崎遺跡」『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書 令和2年度』 千葉市教育委員会

小林 嵩 2021『千葉市根崎遺跡（第7次）』（公財）千葉市教育振興財団

木口裕史他2022「根崎遺跡」「加曾利貝塚」『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書 令和3年度』 千葉市教育委員会

木口裕史他2023「へたの台貝塚①・②・③」「高崎台遺跡」『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書 令和4年度』

千葉市教育委員会

第2節 発掘調査に至る経緯

1 加曾利貝塚の過去の発掘調査

(1) 保存・整備以前の発掘調査

ここでは千葉市が調査に関わった保存・整備に伴う発掘調査より前の発掘調査について概観する。

加曾利貝塚の名が学界に紹介されたのは考古学史の中でも比較的早く、明治20（1887）年の上田栄吉氏による「下総国千葉郡介墟記」、明治30（1897）年の『日本石器時代人民遺物発見地名表』（第1版）等に登場する（上田1887、井上1894、東京帝国大学1897）。そして記録に残る最初の発掘調査は、明治40（1907）年の東京人類学会第3回遠足会がそれにあたる。当時の学界を牽引していた坪井正五郎氏や大野雲外氏らが参加し、坪井氏は「彼れ程広い貝塚は他に例をも求める事がむつかしいと申して宜しい」と述べている（坪井他1907）。そしてその直後、坪井氏・松村瞭氏が行った発掘調査において加曾利貝塚では最初となる埋葬人骨が出土した（八幡1924）。その後、江見水蔭氏による発掘や東京人類学会第5回遠足会が実施されたが（江見1909、石田1915、上羽1915、小田桐1915）、加曾利貝塚における画期的な出来事は、大正11（1922）年、大山柏氏らが加曾利貝塚の地形測量を実施し、貝塚が「接続する二個の環状を為す点」を明らかにしたこと、貝塚にA・B・C・D点の4点を付与した点である。この時大山氏は貝塚の一角（大山史前学研究所1937所収のB11地点）の発掘も実施している（大山史前学研究所1937）。この調査には東京帝国大学の小金井良精氏も参加しており、その後、大正13（1924）年、東京帝国大学人類学教室の調査が、小金井氏の他、松村氏・八幡一郎氏・甲野勇氏・山内清男氏・宮坂光次氏らが参加して実施された。この調査は人骨資料採取を目的とし、B・D地点と、新たに設定したE地点が調査されたが、調査の過程でE地点とB地点の土器の差、B地点の貝層出土土器と貝層下土層出土土器の差等が認識され、加曾利E式土器、堀之内式土器、加曾利B式土器の年代的序列の確定につながり（八幡1924、山内1928・1939 a・b・1940）、この時の調査は縄文土器編年の確立に大いに貢献することになった。

その後、汎太平洋学術会議や第一早稲田高等学院等によって発掘が行われたが（八幡1926、大宮1937、

藤澤1938)、規模の大きなものは昭和11(1936)年の史前学会第1回遠足会である。この遠足会では南貝塚B・C地点で3か所の発掘がなされ、その報告は史前学雑誌に詳細に掲載されると共に、大正11年の測量図も掲載された(大山史前学研究所1937)。

戦後は明治大学考古学研究室により北貝塚E地点の発掘が行われ、加曽利E式土器の細分型式(加曽利E I・II式土器)の層位的出土が確認された(芹沢1962)。

第2表 保存・整備以前の調査歴

調査主体	地点名称	調査年	年号	調査地点	備考	主要文献
東京人類学会	遠足会1907地点	1907	明治40		東京人類学会第3回遠足会-坪井正五郎・大野雲外他	坪井1907
東京帝国大学 人類学教室	人類1907地点	1907	明治40		坪井正五郎・松村瞭他	八幡1924
個人	江見1908地点	1908	明治41		江見水蔭	著者不明 1909
東京人類学会	人類学会遠足会 1915地点	1915	大正4		東京人類学会第5回遠足会-長谷部言人・小金井良精他	上羽1915他
個人	大山1922地点	1922	大正11	南貝塚B地点	A・B・C・D地点測量・発掘。大山柏他	大山1937
個人	上羽1923地点	1923	大正12		上羽貞幸	上羽1923
個人	上羽1924地点	1924	大正13		上羽貞幸	八幡1924
東京帝国大学 人類学教室	人類学会1924a地点	1924	大正13	北貝塚D・E地点、 南貝塚B地点	小金井良精・松村瞭・八幡一郎・甲野勇・山内清男・ 宮坂光次	八幡1924
東京帝国大学 人類学教室	人類学会1924b地点	1924	大正13		小金井良精・松村瞭・八幡一郎・甲野勇・宮坂 光次	MM生1925
汎太平洋学術会議	学術会議1925地点	1925	大正14		汎太平洋学術会議。小金井良精・松村瞭・八幡 一郎・甲野勇・宮坂光次	第三回汎太 平洋学術会 議常務委員 会1926
史前学会	史前学会1928地点	1928	昭和3	南貝塚A地点	宮坂光次・池上啓介・竹下次作	大山1937
第一早稲田高等学院 史学部	早高1934地点	1934	昭和9	南貝塚	西村真次・大宮守誠・武田宗久	大宮1937
第一早稲田高等学院 史学部	早高1935地点	1935	昭和10		大宮守誠・武田宗久	大宮1937
第一早稲田高等学院 史学部	早高1936地点	1936	昭和11	南貝塚C地点	池上啓介・菊池義次	大山1937
史前学会	史前学会遠足会 1936地点	1936	昭和11	南貝塚B・C地点	史前学会第1回見学遠足会-大山柏・竹下次作・ 池上啓介・大給尹・土岐仲男・大場磐雄	大山1937
第一早稲田高等学院 史学部	早高1937地点	1937	昭和12	南貝塚B地点	藤澤宗平	藤澤1938
個人	椎名1949地点	1949	昭和24		椎名仙卓	加曽利貝 塚調査団 1976, 182.
個人	國學院1949地点	1949	昭和24		椎名仙卓・麻生優	椎名・麻生 1950
明治大学考古学研究室	明大1958地点	1958	昭和33	北貝塚E地点	杉原荘介・芹沢長介	芹沢1962

文献 発行年・五十音順

- 上田英吉 1887「下総国千葉郡介墟記」『東京人類学雑誌』2-19, 308-315. 東京人類学会
- 井上喜久治1894「下総地方遺跡談」『東京人類学雑誌』9-95, 169. 東京人類学会
- 東京帝国大学1897『日本石器時代人民遺物発見地名表』(第1版) 東京帝国大学
- 坪井正五郎他1907「東京人類学会第三回遠足会(下総国千葉郡都村大字加曾利貝塚調査)」『東京人類学雑誌』23-260, 東京人類学会
- 著者不明 1909「滑車形土製品一対揃いて発見さる」『東京人類学雑誌』24-277, 272. 東京人類学会
- 江見水蔭 1909「加曾利貝塚大発掘」『地中の秘密』博文館
- 坪井正五郎1910「日本石器時代人民使用耳飾りの種類及び相互の関係」『東京人類学雑誌』25-286, 123-127. 東京人類学会
- 石田収蔵 1915「下総国千葉郡加曾利貝塚発掘」『人類学雑誌』30-11, 431-432. 東京人類学会
- 上羽貞幸 1915「東京人類学会遠足会」『人類学雑誌』30-11, 432-433. 東京人類学会
- 小田桐健児1915「下総加曾利貝塚踏査」『人類学雑誌』30-11, 434-435. 東京人類学会
- 小金井良精1923「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』38-1, 25-48. 東京人類学会
- 上羽貞幸 1923「加曾利貝塚の近状」『考古学雑誌』13-11, 739-740. 考古学会
- 八幡一郎 1924「千葉県加曾利貝塚の発掘」『人類学雑誌』39-4・5・6, 209-212. 東京人類学会
- 中谷治宇二郎1924「東大人類学倉庫跡より発見されし二個の石器に就いて」『人類学雑誌』39-7・8・9, 232-242. 東京人類学会
- MM生 1925「下総加曾利貝塚行」『人類学雑誌』40-1, 41-42. 東京人類学会
- 小金井良精・松村瞭1926「Kasori Shell-Heaps」『Japan Guide-Books, Excursions, Pan-Pacific Science Congress』11 National Research Council, Department Of Education, Tokyo
- 第三回汎太平洋学術会議常務委員会1926『第三回汎太平洋学術会議第二要報』
- 平瀬信太郎1926「加曾利貝塚の貝類について」『人類学雑誌』41-7, 313-315. 東京人類学会
- 八幡一郎 1926「汎太平洋学術会議見学旅行加曾利行」『人類学雑誌』41-12, 596-598. 東京人類学会
- 杉山寿栄男1927『日本原始工芸』22・116・144. 工芸美術研究会
- 中谷治宇二郎1927「注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布」『東京帝国大学理学部人類学教室研究報告』第四編 東京帝国大学
- 山内清男 1928「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』43-10, 463-465. 東京人類学会
- 八幡一郎 1930「千葉県加曾利貝塚の発掘」『土器 石器』26-31. 古今書院
- 杉山寿栄男1931「図版第22 臺附土器」『日本考古図録大成 第14輯』日東書院
- 杉山寿栄男1933「縄文土器」『日本考古図録大成 第5輯』日東書院
- 八幡一郎 1935「日本石器時代文化 関東地方」『日本民族』26-38. 岩波書店
- 史前学会 1936『加曾利貝塚の概要』史前学会
- 池上啓介 1937「第一回史前学会貝塚見学遠足会記」『史前学雑誌』9-1, 73-74. 史前学会
- 大宮守誠 1937「千葉県加曾利古山貝塚に就いて」『考古学雑誌』27-6, 387-413. 考古学会
- 大山史前学研究所1937「千葉県千葉郡都村加曾利貝塚発掘調査報告」『史前学雑誌』9-1, 1-68. 史前学会
- 佐々木邦 1937「人と貝」『史前学雑誌』9-1, 69-72. 史前学会
- 藤澤宗平 1938「加曾利貝塚に就いて」『早高史学』1, 23-38. 第一早稲田高等学院史學部
- 山内清男 1939 a「加曾利B式(古い部分・図版20~25)」『日本先史土器図譜 第Ⅲ輯』先史考古学会
- 山内清男 1939 b「加曾利B式(中位の古さ・図版30~39)」『日本先史土器図譜 第Ⅳ輯』先史考古学会
- 小川栄一 1940『千葉縣之貝塚』

- 山内清男 1940「加曾利E式(図版80~89)」『日本先史土器図譜 第Ⅸ輯』 先史考古学会
- 甲野 勇 1941「独鈷石資料—下総国千葉郡都村加曾利貝塚発見」『古代文化』12-5, 237-238. 日本古代文化学会
- 中島寿雄 1943「石器時代土偶の乳房及び下腹部膨隆に就いて」『人類学雑誌』58-7, 287-299. 日本人類学会
- 田辺義一 1943「日本石器時代の朱について」『人類学雑誌』58-12, 453-454. 日本人類学会
- 甲野 勇 1947『図解先史考古学入門』 山岡書店
- 椎名仙卓・麻生優1950「加曾利貝塚発掘記」『学会月報』1 國學院大學考古学会
- 酒詰仲男・篠遠喜彦他1951「加曾利貝塚」『考古学辞典』 改造社
- 樋口清之 1952「腕飾考—石器時代身体装飾品之研究 其六—」『上代文化』23, 9-19. 國學院大學考古学会
- 麻生 優 1952「加曾利貝塚発見の玉器」『上代文化』23, 37. 國學院大學考古学会
- 芹沢長介 1962「千葉県千葉市加曾利貝塚」『日本考古学年報』11, 73. 日本考古学協会
- 加曾利貝塚調査団1976『加曾利南貝塚』 中央公論美術出版

(2) 保存・整備に伴う発掘調査

昭和35(1960)年頃より加曾利貝塚所在地において宅地造成の計画が持ち上がり、貝塚が破壊の危機に直面した。そこで千葉市教育委員会が主催、千葉市文化会が調査担当となり、昭和37(1962)年、保存のための発掘調査が北貝塚の2か所において実施された(第1次調査第1地点(第5図No.1:『史跡加曾利貝塚総括報告書』(以下、『総括報告書』と言う)の調査地点No.に準拠)、同第2地点(同図No.2))。この調査では住居跡や埋葬人骨が検出され、大きな成果を上げ、市民をまきこんだ保存運動につながり、昭和39(1964)年、千葉市は北貝塚とその周辺の土地買収と陳列館の建設等を決定した。

しかしその買収範囲は北貝塚周辺に限られていたため、南貝塚の南側隣接地においては工場建物の建設が進んでいた。そこで昭和39年、千葉市は、工場建設に伴う記録保存調査及び保存のための調査を日本考古学協会加曾利貝塚調査団に委託して実施した(第2次調査)。この調査は南貝塚全体を対象とし、第1・2期では東西・南北方向に、互いに直交する幅2m、長さ170mの6本のトレンチ(I~VIトレンチ、同図No.3~8)を掘削するものであった。第3期はグリッド方式による平面発掘で、南貝塚中央部付近(『加曾利南貝塚』(以下、『報告Ⅱ』と言う)の11区)においてのみ実施された(同図No.9)。この調査は日本考古学協会による保存要望書や各種請願の提出、国会審議を経て、南貝塚買収につながり、調査の方も昭和40年補充調査実施後、終了となった。南貝塚の考古学的情報はこの調査に多くを拠っている。

第3・4次調査は北貝塚の野外建設に伴う整備目的の調査である。第3次調査は北貝塚住居跡群観覧施設建設に伴うもので、その第I住居跡群調査区(同図No.10)は、昭和40(1965)年、第1次調査第1地点(同図No.1)を包括するようにして調査された。また施設建設に伴い、隣接区(同図No.11)も昭和42(1967)年調査している。第II住居跡群調査区は新たに昭和40(1965)年に調査された所で、縄文時代中期の住居跡が検出されている(同図No.12)。第4次調査は北貝塚断面観覧施設建設に伴うものである。貝層断面を作出するための調査地点(同図No.15)と施設の土台を埋め込むための調査地点(同図13・14)からなっている。最厚2.5mの縄文時代中期の貝層堆積が確認されている。

第5次調査は野外観覧施設に電源を導入するための電線ケーブル埋設に伴い、昭和43(1968)年に実施された緊急調査である。北貝塚中央部に設定された同図No.17と北貝塚外縁部に設定された同図No.16・18からなる。No.17では土坑、No.16・No.18では縄文時代中期・後期の住居跡、土坑等が検出されている。

第6次調査は代官屋敷移築に伴い昭和43(1968)年実施された緊急調査で、東傾斜面北東部が調査された(同図No.19)。調査の結果、テラス状遺構が検出されている。

第7次調査は市立老人ホーム建設計画に伴う保存目的の調査(確認調査)で、昭和45(1970)～48(1973)年に東傾斜面東南部において実施された(同図No.20～23)。この調査により、東傾斜面において縄文時代早期・前期・中期・後期及び古墳時代～奈良時代の遺構の存在が明らかとなり、老人ホーム建設は中止となった。

第8次調査は防火水槽設置に伴う緊急調査(本調査)で、昭和48(1973)・49(1974)年に東傾斜面北東部で実施された(同図No.24)。縄文時代後期の112号住居跡(19×16m。遺構名は総括報告書に準拠。以下同様)が発掘されている。

第9次調査は史跡整備に伴い、昭和61・62(1986・1987)年に実施した予備調査(物理探査及び試掘)で、試掘トレンチは南貝塚及び東傾斜面を対象に10か所掘削された(同図No.25、a～j トレンチ)。試掘トレンチでは住居跡・土坑等が確認されている。

第10次調査は平成元・2(1989・1990)年に実施した史跡整備に関わる調査で、管理用道路建設・植栽工事計画に伴う確認調査(同図No.26)、南貝塚観覧施設整備に伴う確認調査(同図No.27)、復元住居整備に伴う確認調査(同図No.28)からなる。No.26・28は東傾斜面東南部に位置し、前者では住居跡や土坑、後者では縄文時代中期の住居跡が確認されている。No.27は南貝塚に位置し、第2次調査Ⅲトレンチ(同図No.5)を再調査したものである。

第11次調査は県営団地建設に伴う調査で、昭和59(1984)年、南外縁部にて実施された(同図No.29)。確認調査により調査区北西部において住居跡等が確認されたが、公園として保存された。本調査範囲では遺構は検出されなかった。

第12次調査は西外縁部で行われた調査である。No.30は昭和52(1977)年に実施した工事立会、同図No.31は昭和53(1978)年に実施したガス管理設工事に伴う工事立会である。No.32は昭和55(1980)年に実施した工事立会、No.33は平成元(1989)年に実施した排水溝設置に伴う工事立会である。縄文時代中期の住居が調査されている。この他にも西外縁部で実施した試掘・確認調査はあるが、調査次数は振っていない。

第13次調査は北外縁部で実施した試掘・確認調査である。同図No.34は昭和58(1983)年に実施した試掘調査範囲である。場所は平坦面にあたるが、試掘の結果、遺構は検出されず、現在宅地となっている。同図No.35は平成25年3月(平成24年度)、同図No.36は平成26年に実施した。場所は緩斜面から北東側低地にかけて位置するが、前者では縄文時代中期の住居跡、後者では住居跡や土坑が検出され、同地は平成29年に史跡に追加指定された。

第14次調査は平成29(2017)～令和元(2019)年に南貝塚で実施した縄文時代晩期の集落解明を目的とした調査で、縄文時代晩期の住居跡等を複数検出した。本報告書で報告するものである(同図37)。

第15次調査は令和2(2020)年に史跡整備に伴い実施した確認調査である(同図38)。同図38-1～50Tは園路や便益施設整備等に伴うもので、南貝塚周辺や東傾斜面東南部を中心に50ヶ所の調査坑を掘ったものである。貝層やピットを確認した。同図38-51～57Tは北貝塚住居跡群観覧施設耐震改修工事に伴うもので、住居跡群観覧施設の周囲に7ヶ所の調査坑を掘ったものである。貝層を確認した。同図38-58Tは園路の新設に伴うもので、東傾斜面東南部で実施した。遺物包含層を確認した。

第16次調査は令和2(2020)～4(2022)年に実施した南貝塚の中央窪地を目的とした調査(同図39)である。縄文時代後期の貝層や住居跡、縄文時代晩期の遺物包含層等を検出した。

第17次調査は令和3(2021)年に西外縁部で実施した確認調査である(同図40)。縄文時代の柱穴1基と古墳時代の可能性がある時期不詳の溝状遺構1条を確認した。(松田)

第3表 加曽利貝塚発掘調査歴

調査期間	調査組織	調査目的	調査区分名 〔『総括報告書』に準拠〕		旧報告書地名	面積	旧報告書	
昭和37(1962)年 昭和37年8月3日～8月15日	千葉市文化会 (責任者：武田宗久)	保存運動に伴う 保存目的の調査 (確認調査)	No.01	北貝塚	1-1区	第1地点	84.25㎡	武田他 1975
			No.02		1-2区	第2地点	25.5㎡	
昭和39・40(1964・1965)年 昭和39年8月1日～8月22日(第1期) 昭和39年8月24日～10月24日(第2期*) 昭和39年10月26日～昭和40年3月31日 (第3期) 昭和40年10月1日～12月末日(補充調査)	日本考古学協会 加曽利貝塚調査団(団長： 滝口宏)	保存運動に伴う 調査(確認調査)	No.03	南貝塚	I トレンチ	I トレンチ	1612.65 ㎡	加曽利貝塚調査団 1976
			No.04		II トレンチ	II トレンチ		
			No.05		III トレンチ	III トレンチ		
			No.06		IV トレンチ	IV トレンチ		
			No.07		V トレンチ	V トレンチ		
			No.08		VI トレンチ	VI トレンチ		
			No.09		11区	11区		
昭和40～42(1965～1967)年 昭和40年10月1日～11月29日(1-1区) 昭和42年11月11日～12月13日(1-1区 D トレンチ) 昭和40年10月23日～11月29日(2区)	加曽利貝塚調査団(団長： 滝口宏)	野外施設建設に伴う 整備目的の調査(確認調査)	No.10	北貝塚	1-1区	第I住居址 群調査区	200㎡	加曽利貝塚調査団 1977
			No.11		1-1区 D トレンチ	第I住居址 群調査区 D トレンチ	40㎡	
			No.12		2区	第II住居址 群調査区	224㎡	
昭和41・42(1966・1967)年 昭和41年6月1日～7月2日(C トレンチ) 昭和42年11月11日～12月13日(A トレンチ) 昭和42年11月21日～12月13日(B トレンチ)	加曽利貝塚調査団(団長： 滝口宏)	野外施設建設に伴う 整備目的の調査(確認調査)	No.13	北貝塚	3区A トレンチ	貝層堆積群 調査区A トレンチ	56㎡	加曽利貝塚調査団 1977
			No.14		3区B トレンチ	貝層堆積群 調査区B トレンチ	56㎡	
			No.15		3区C トレンチ	貝層堆積群 調査区C トレンチ	237.35㎡	
昭和43(1968)年 昭和43年8月16日～9月21日	加曽利貝塚調査団	ケーブル埋設に伴う 緊急調査(本調査)	No.16	北貝塚	4区I トレンチ	第4調査区I トレンチ	156.5㎡	加曽利貝塚調査団 1977
			No.17		3区II トレンチ a	第4調査区II トレンチ	33.4㎡	
			No.18		4区II トレンチ b	第4調査区II トレンチ	40㎡	
昭和43(1968)年 昭和43年11月9日～11月30日(調査日誌による)	加曽利貝塚調査団	代官屋敷移築に伴う 緊急調査(本調査)	No.19	東傾斜面	北東部1区 (東傾斜面 第1次)	第5調査区	364㎡	加曽利貝塚調査団 1977
昭和45～48(1970～1973)年 昭和45年8月1日～9月30日(2次) 昭和46年2月1日～3月31日(3次) 昭和46年6月1日～昭和47年3月31日 (4次) 昭和47年7月1日～昭和48年3月30日 (5次)	加曽利貝塚調査団	市立老人ホーム 建設計画に伴う 保存目的の調査 (確認調査)	No.20	東傾斜面	南東部 (東傾斜面 第2次)	第1次	432㎡	後藤他 1981a・ 1981b
			No.21		南東部 (東傾斜面 第3次)	第2次	2035.5㎡	
			No.22		南東部 (東傾斜面 第4次)	第3次	1803㎡	
			No.23		南東部 (東傾斜面 第5次)	第4次	1248.5㎡	
昭和48・49(1973・1974)年 昭和48年5月1日～昭和49年4月末日 (*)	加曽利貝塚調査団	防火水槽設置に伴う 緊急調査(本調査)	No.24	東傾斜面	北東部2区 (東傾斜面 第6次)	第5次	574.5㎡	後藤他 1982
昭和61～63(1986～1988)年 昭和61年11月1日～昭和62年2月24日 昭和63年2月1日～3月31日(物理探査)	千葉市教育委員会	史跡整備に伴う 予備調査(物理探査・試掘) 植栽予定箇所の試掘	No.25 a～j	南貝塚、 東傾斜面	a～j トレンチ		300㎡	千葉市教育委員会 文化課 1987・88
平成元・2(1989・1990)年 平成元年9月1日～10月31日(No.26) 平成元年9月25日～平成2年2月28日 (No.27) 平成元年11月8日～平成2年3月31日 (No.28)	財団法人千葉市文化財調査協会	管理用道路建設・植栽工事計画に伴う 確認調査(No.26)、南貝塚貝層 観覧施設整備に伴う確認調査 (No.27) 復元住居整備に伴う確認調査 (No.28)	No.26	南貝塚		第1調査区	353.25㎡	千葉市教育委員会 1990
			No.27			第2調査区	180㎡	
			No.28			第3調査区	433㎡	

調査期間	調査組織	調査目的	調査区分名 (『総括報告書』に準拠)			旧報告書地名	面積	旧報告書
昭和59(1984)年 昭和59年4月16日～6月30日(確認調査) 昭和59年10月1日～11月30日(本調査)	財団法人千葉 県文化財セン ター	県営桜木第二団 地建設に伴う緊 急調査	No.29	南外縁部 (一部は南 貝塚隣接 地遺跡)			1900㎡ (確認調査) 2200㎡ (本調査)	古内1986
昭和52・53・55・平成元 (1977・1978・1980・1989)年 昭和52年(1次) 昭和53年4月8日～5月3日(2次) 昭和55年12月23日～12月26日(3次) 平成元年2月1日～2月28日(4次)	千葉市教育委 員会	工事立会調査 ガス管理設 工事に伴う工事立会 調査 自動車置場整備 に伴う確認調査 排水溝工事に伴 う工事立会調査	No.30 No.31 No.32 No.33	西外縁部	1次 2次 3次 4次		- 4.8㎡ 100㎡ 30㎡	- 田中1996 千葉県 1982 田中1996
昭和58・平成25・26(1983・2013・2014)年 昭和58年6月30日～7月21日(試掘) 平成25年3月12日～3月26日(1次) 平成26年6月30日～7月28日(2次)	千葉市教育委 員会	宅地造成に伴 う確認調査 保存目的の範囲 確認調査	No.34 No.35 No.36	北外縁部	試掘 1次 2次		200㎡ 156㎡ 416㎡	- 千葉市教 育委員会 2015
平成29・30・令和元(2017～2019)年 平成29年9月26日～12月22日 平成30年7月30日～12月5日 令和元年6月5日～12月20日	千葉市埋蔵文 化財調査セン ター	保存目的の調査	No.37	南貝塚			700㎡	本報告
令和元・2(2019・2020)年 令和2年2月5日～3月31日(1～50トレンチ) 令和2年8月3日～8月7日(51～57トレンチ) 令和2年12月14日～12月22日(58トレンチ)	千葉市埋蔵文 化財調査セン ター	史跡整備に伴 う確認調査	No.38 1～50T	南貝塚、 東傾斜面 北貝塚 東傾斜面	1～50トレンチ 51～57ト レンチ 58トレンチ		503.7㎡ 8.2㎡ 21.1㎡	
令和2～4(2020～2022)年 令和2年9月15日～12月11日 令和3年7月12日～12月24日 令和4年6月20日～12月23日	千葉市埋蔵文 化財調査セン ター	保存目的の調査	No.39	南貝塚 東傾斜面 南貝塚	K17グ*リット* G14グ*リット* I10グ*リット*		1892㎡ 36㎡ 25㎡ 32㎡	
令和3(2021)年 令和3年6月3日～6月7日	千葉市埋蔵文 化財調査セン ター	個人住宅建設に 伴う確認・本調 査	No.40	西外縁部			12.4㎡ (対象面積 131㎡)	千葉市教 育委員会 2022

*調査日誌に基づく。

文献 発行年・五十音順

武田宗久他1975『加曽利貝塚Ⅰ』中央公論美術出版(『報告Ⅰ』)

加曽利貝塚調査団1976『加曽利南貝塚』中央公論美術出版(『報告Ⅱ』)

加曽利貝塚調査団1977『加曽利北貝塚』中央公論美術出版(『報告Ⅲ』)

加曽利貝塚調査団1977『加曽利貝塚Ⅳ』中央公論美術出版(『報告Ⅳ』)

後藤和民他1981a「昭和45・46年度加曽利貝塚東傾斜面遺跡限界確認調査概報」『貝塚博物館紀要』6 千葉市加曽利貝塚博物館

後藤和民他1981b「昭和47年度加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』7 千葉市加曽利貝塚博物館

後藤和民他1982「昭和48年度加曽利貝塚東傾斜面発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』8 千葉市加曽利貝塚博物館

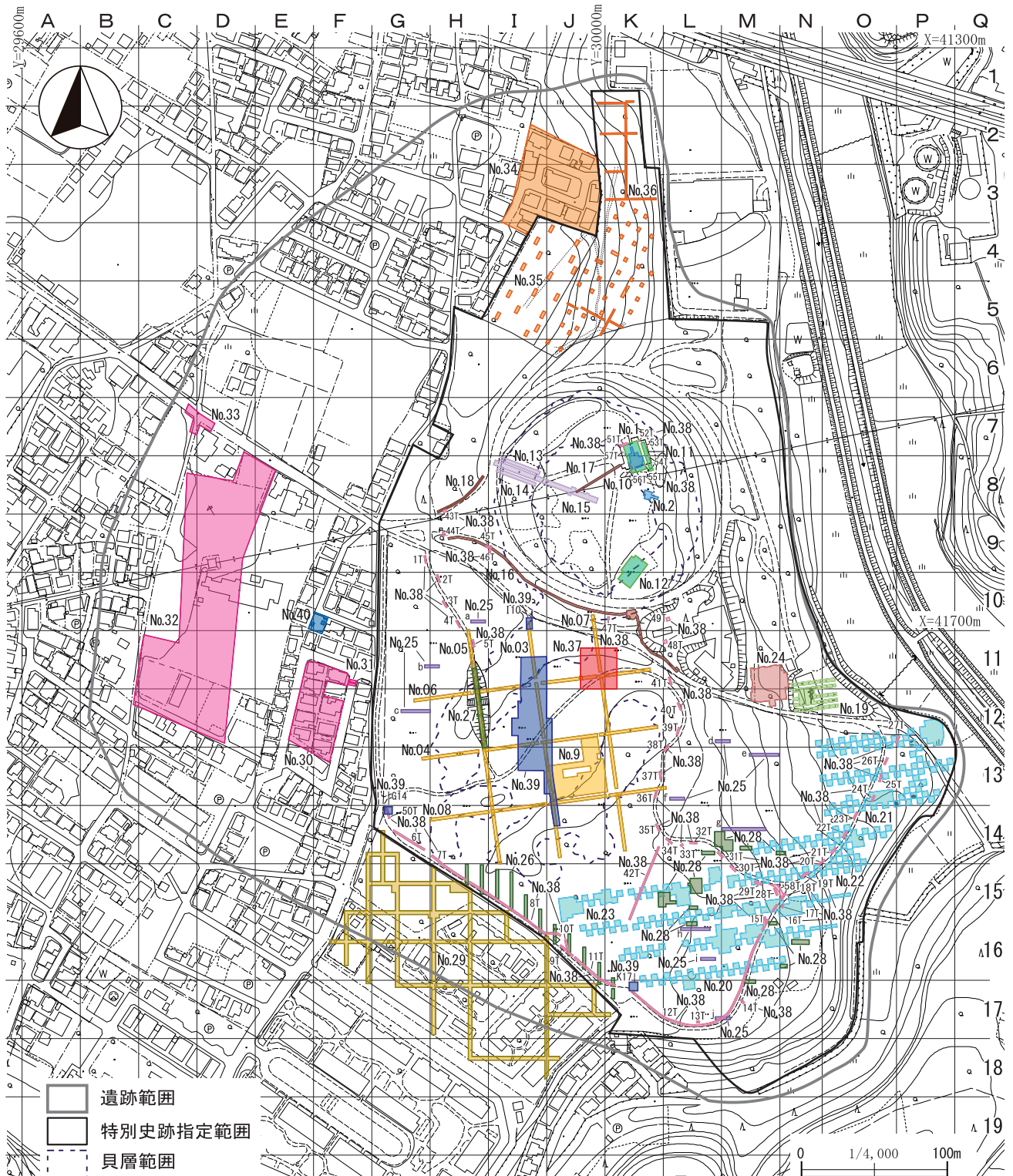
千葉県教育庁文化課1982『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報－昭和55年度』

古内 茂 1986『加曽利貝塚－県営桜木第二団地建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県文化財センター

千葉市教育委員会文化課1987『史跡加曽利南貝塚予備調査概報 昭和61年史跡整備に伴う物理探査および試掘調報告』

千葉市教育委員会文化課1988『昭和62年度史跡加曽利貝塚環境整備事前調査報告書』

(財)千葉市文化財調査協会1989「加曽利貝塚隣接地遺跡」『財団法人千葉市文化財調査協会年報』1(昭和60・61年度)



- 遺跡範囲
- 特別史跡指定範囲
- 貝層範囲

- | | | |
|---|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 第1次調査区 No1・2 第2次調査区 No3～9 第3次調査区 No10～12 第4次調査区 No13～15 第5次調査区 No16～18 第6次調査区 No19 | <ul style="list-style-type: none"> 第7次調査区 No20～23 第8次調査区 No24 第9次調査区 No25 第10次調査区 No26～28 第11次調査区 No29 第12次調査区 No30～33 | <ul style="list-style-type: none"> 第13次調査区 No34～36 第14次調査区 No37 第15次調査区 No38 第16次調査区 No39 第17次調査区 No40 |
|---|--|---|

第5図 調査地点位置図

千葉市教育委員会文化課1990『平成元年度 史跡加曽利貝塚環境整備に伴う事前調査概報』

田中英世 1996「加曽利西貝塚の調査－昭和53年・平成元年の立会い調査資料から」『貝塚博物館紀要』23 千葉市加曽利貝塚博物館

千葉市教育委員会2015『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書－平成26年度』

千葉市教育委員会2022『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書－令和3年度』

※『総括報告書』での記載に倣い、第1・3～5次調査の報告も以下本文中で『報告Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ』と略して表示する。

2 調査の経緯

調査に至る経緯

加曽利貝塚は平成29（2017）年10月13日に貝塚として初めて特別史跡に指定された。千葉市では指定を目指すにあたり、史跡の将来的な保存と活用の方針を示した『史跡加曽利貝塚保存活用計画書（千葉市教育委員会2017＝以下『保存活用計画書』と記載する）』を平成29（2017）年1月に刊行するとともに、加曽利貝塚に関して今まで把握できている情報をまとめ、調査成果を見直して考察を加えた『総括報告書』（『史跡加曽利貝塚総括報告書（千葉市教育委員会 2017）』）を平成29（2017）年3月に刊行した。

このうち『保存活用計画書』では、加曽利貝塚の実像の解明に向け、計画的・継続的な発掘調査を進めていく方針を示し、平成29（2017）年6月に千葉市史跡保存整備委員会の部会として発掘調査計画の審議と現地での調査指導を行う加曽利貝塚調査研究部会を設置した。

また『総括報告書』では、報告書をまとめる作業の過程で見えてきた新たな課題をまとめ、発掘を含めた今後の調査・研究の方針を示した。その中で、まず着手すべき事項として地形測量と過去の調査地点の明確化を掲げ、平成29（2017）年度にレーザー測量を用いた精度の高い測量図を作成するとともに、地中レーダー探査による貝層・遺構、過去のトレンチ等の把握に着手した。さらには、旧調査地点の再調査と計画的発掘調査の実施にも着手することとし、中長期的な発掘調査計画の検討を進めるとともに、旧調査地点を含む平面的な発掘調査を平成29（2017）年秋から開始することとした。

第4表 発掘調査に係る申請等の文書

文書内容	文書番号	日付	発信者	受信者	備考
1 現状変更					
平成29(2017)年度					
現状変更許可申請	29千教埋セ第169号	平成29年8月22日	市長	文化庁長官	
現状変更許可通知	29受庁財第964号	平成29年9月15日	文化庁長官	市長	
現状変更終了報告	29千教埋セ第314号	平成30年2月19日	市長	文化庁長官	
平成30(2018)年度					
現状変更許可申請	30千教埋セ第46号	平成30年5月11日	市教育長	文化庁長官	
現状変更許可通知	30受庁財第311号	平成30年6月15日	文化庁長官	市教育長	
現状変更終了報告	30千教埋セ第378号	平成31年2月8日	市教育長	文化庁長官	
令和元・平成31年度					
現状変更許可申請	31千教埋セ第385号	平成31年3月6日	市教育長	文化庁長官	
現状変更許可通知	元受庁財第65号	平成31年4月19日	文化庁長官	市教育長	
現状変更終了報告	31千教埋セ第449号	令和2年3月17日	市教育長	文化庁長官	
2 出土品の手続き					
平成29(2017)年度					
文化財発見通知	29千教埋セ第286号	平成29年12月25日	市教育長	千葉東警察署長	
文化財保管証	29千教埋セ第286号	平成29年12月25日	市教育長	県教育長	
平成30(2018)年度					
文化財発見通知	30千教埋セ第324号	平成30年12月11日	市教育長	千葉東警察署長	
文化財保管証	30千教埋セ第324号	平成30年12月11日	市教育長	県教育長	
令和元・平成31年度					
文化財発見通知	31千教埋セ第475号	令和2年3月30日	市教育長	千葉東警察署長	
文化財保管証	31千教埋セ第475号	令和2年3月30日	市教育長	県教育長	

発掘調査は千葉市埋蔵文化財調査センターが担当することとし、3か年で1つの地点を調査する方針を定め、文化庁及び千葉県教育委員会との協議、千葉市史跡保存整備委員会での承認を経て、平成29(2017)年8月22日付けで文化庁長官に対して「史跡加曽利貝塚の現状変更(発掘調査について)」を提出し、平成29(2017)年9月15日付けで文化庁長官の現状変更の許可を受け、平成29(2017)年9月26日から発掘調査の準備に着手した。発掘調査の回数については、『総括報告書』で千葉市教育委員会による過去の発掘調査を第1次から第13次までとしたこと、今後も継続的に発掘調査を実施していくことを踏まえ、第14次調査とした。なお調査に関連して、その後に提出した申請とそれに係わる文書も付記しておく(第4表)。(森本)

3 調査の目的

調査区設定の目的

加曽利貝塚の遺跡としての範囲は今後も様々な考えがありうるが、『総括報告書』では従来別遺跡と扱っていた範囲も含めて整理し、隣接遺跡も含めて同書35・36頁掲載の加曽利貝塚調査地点位置図(『総括報告書』1-8図)に示した。加曽利貝塚の貝層が環状の北貝塚と馬蹄形(対弧状)の南貝塚の複合であることは昭和11(1936)年の史前学会による発掘調査の際に認識され、昭和12(1937)年刊行の大山史前学研究所の報告によって周知された(菅谷2021)。昭和30年代の北貝塚・南貝塚、昭和40年代の北貝塚・南東部・東傾斜面の調査、昭和50年代の西外縁部・南外縁部、昭和60年代から平成にかけての南貝塚、平成26(2013)年の北周縁部の確認調査をへて、現在15.1haが国特別史跡の指定を受けている。

『総括報告書』は、「全体像を把握する取り組みがなされないまま」であった調査成果を見直し、「残されている記録類に基づいて現時点での加曽利貝塚の全資料を取りまとめ」「価値を整理し、今後解明すべき課題を明らかにする」ことを第一の目的、「今後の整備・活用の方向性を検討するための基礎資料」とすることを第二の目的として編集・刊行した。土層断面図・平面図の原図や調査日誌といった一次資料の突合を重ねた編集過程では、既存の報告書などでの図示・記述との不一致も少なからず確認したが、国土座標系の導入以前に行われた調査区域の把握が一番の問題であった。しかし既に埋め戻した調査区域は再発掘以外に確定する術がなく、先述した調査地点位置図での調査区域は、既存報告を現状と比較して位置を当てはめたに過ぎない。

昭和39(1964)年の南貝塚を対象とした第2次調査の調査区域は、昭和63(1986)年に国土座標系を導入した第9次調査に際した測量の結果、(加曽利貝塚調査団1976)掲載のトレンチ配置が方位と交差角度共に実態に即さないと判明した。残存していたグリッド杭4本の測量に基づき修正した配置図を村田(1999)が示し、この成果を利用して調査地点位置図や『総括報告書』p.161・162掲載の南貝塚トレンチ配置(『総括報告書』3-72図)を作成したが、土層断面図と平面図の原図をグリッド表記に従って配列したところなお矛盾が生じており、VトレンチとII・IV・VIトレンチの交点に顕著に現れている。従って修正した南貝塚のトレンチ配置も未だ正確ではなく、第2次調査のグリッドに従って設定している第6次から第8次の南外縁部・東傾斜面の調査区も、『総括報告書』を含めて従来示されてきた位置は不正確なのであるから、特別史跡加曽利貝塚の今後の活用・整備を図るうえで、第2次調査区域の正確な把握は最も優先して取りまねばならない課題であろう。第14次調査区を南貝塚の範囲に設定する最も大きな理由である。(加曽利貝塚調査団1976)掲載の住居跡の中には調査原図で存在を裏付けられないものがある。一方で原図を検討して何らかの遺構と考えられるのに報告されていないもの(『総括報告書』ではそのうち確実性が高いと考えたいくつかを「未報告遺構」と呼んで言及している)も見出された。加曽利貝塚を集落遺跡として評価する上で放置できない問題であり、従来の調査成果の中で確認を要する課題は南貝塚に特に集中している。

第二の理由である。

『総括報告書』第7章において、「中期の北貝塚・後期の南貝塚」という従来の認識に加え「晩期前半においても東京湾東岸地域を代表する遺跡である」としたが、土器など晩期の遺物は圧倒的に南貝塚に多く、晩期集落の主体は南貝塚にあると予想できる。この点の確認は、長期にわたって集落を営んだ遺跡としての加曽利貝塚の価値を裏付けるものである。第三の理由である。

以上により第14次調査区を南貝塚に設けることとし、具体的な調査地点候補を複数抽出して検討を開始した。調査指導委員会との協議・指導を経て、第2次調査ⅣトレンチとⅤトレンチの交点・85号住居跡・未報告遺構5・6の確認と調査が可能な範囲(25×25m=625㎡、平成31(2019)年度より南側を3m拡張して最終的には25×28m=700㎡)を調査範囲として設定した。

トレンチ交点の確認は、現在の座標系によって設定したグリッドの中で確認し、想定されてきた位置と実際のトレンチのずれの程度を測って調査区域を修正するデータとするためである。

85号住居跡に関しては、細密沈線文で装飾した小形の椀形土器が完形で出土したことから晩期前半の「安行3b式」期と予測されたが、調査日誌に「安行2式」(当時の晩期縄文土器の一般的認識では、今日の安行3a式・安行3b式の特定の類型を安行2式とすることが普通だった)の完形になりそうな土器を取り上げずに埋め戻した旨の記述があったためこれを確認して時期を確実なものとする・床面に埋葬人骨を検出して時期は晩期とされたがこれが正しいか確認すること・土層断面図では住居跡らしく見えるが平面図に明確な範囲が示されておらず、住居跡であるかに若干の疑念があったためこれを確認することを、事前の目標として定めた。

未報告遺構5・6に関しては、『総括報告書』で想定したように縄文時代晩期の大規模な住居跡であるかどうかと、その帰属時期の確定が当初の目標となった。他にも土坑と思われる未報告遺構3・4に覆土が残っていた場合は時期を確定する遺物を得ることを期待し、第2次調査トレンチ範囲外の遺物や遺構の分布状況を把握して、加曽利貝塚の集落を復元するための知見をできる限り積み上げることを第14次調査の目的として設定した。

奥東京湾から東京湾東岸の縄文時代後期に形成されたと想定される馬蹄形貝塚は、開口部(貝層の切れ間)を谷に面した側に持つことが一般的で、周囲より低く谷へ下りやすい地形となることが通例であるから、貝塚内部と外部との出入口にあたると思われる。加曽利貝塚南貝塚の場合、貝層の切れ間が南と北にある対弧状を呈している。北側は40m程度と間隔が広く坂月川まで200m弱と近いものの標高は堤状貝層の高まりに比べてわずかに低い程度である。一方南側は北西貝層・南西貝層と東南貝層の間は20m弱と狭いがこの付近の堤状貝層の高まりに比べて顕著に低く開口部にふさわしく思えるものの、坂月川から西に貫入する支谷までは300m程の距離がある。南北いずれの切れ間も開口部とみなすには一長一短があり、全体的な地形からすれば南側の可能性が高いと思えるものの現状では決め手に欠ける。第14次調査区は北側の切れ間に近接するので、開口部を確定するための何らかの知見を得ることも期待した。(菅谷)

文献 発行年・五十音順

加曽利貝塚調査団1976『加曽利南貝塚』中央公論美術出版

村田二郎太1999「調査データの修正と補足」『貝層の研究Ⅰ』168-171. 千葉市立加曽利貝塚博物館

菅谷通保 2021「加曽利貝塚B地点の位置と1922年の測量について」『貝塚博物館紀要』47, 1-28. 千葉市立加曽利貝塚博物館

第3節 調査体制と調査方法・調査経過

1 調査体制

(1) 調査の実施体制

発掘調査は平成29年度～令和元年度（平成31年度）、出土品整理は令和2～4年度、報告書刊行は令和5年度に実施した。

調査体制は事務局である千葉市教育委員会生涯学習部文化財課、調査主体である千葉市埋蔵文化財調査センターからなり、発掘調査時は公開業務を千葉市立加曽利貝塚博物館が担当した（第5表）。

第5表 調査体制表

平成29(2017)年度 発掘調査

教育委員会事務局			
教育長 磯野和美	教育次長 神崎広史	生涯学習部長 大崎賢一	
文化財課長 志保澤 剛	特別史跡推進担当課長 滝田希成	課長補佐 芦田伸一	
特別史跡推進班主査 森本 剛	主任主事 大内祐也	主任主事 須賀真弓	
主任主事 西田 聡			
文化財保護班 主任主事 飛田正美(再任用)	主任主事 長南 基	主任主事 武田芳雅	
主事 八木澤美有			
埋蔵文化財調査センター			
所長 西野雅人(囑託)			
主査 石橋一恵	主任主事 長原 亘	主任主事 松田光太郎(担当者)	
囑託 菅谷通保(担当者)	囑託 尾崎沙羅	囑託 石渡麻希	
囑託 難波美由紀			
加曽利貝塚博物館			
館長 高梨俊夫	副館長 植草文江		
主査 山下亮介	主任主事 佐藤 洋	主任主事 木口裕史	
主任主事 米倉貴之	囑託 戸村正己		
主任主事 小川真貴	主事 鶴沢昌弘		

平成30(2018)年度 発掘調査

教育委員会事務局			
教育長 磯野和美	教育次長 神崎広史	生涯学習部長 潮見尚宏	
文化財課長 稲葉健一	特別史跡推進担当課長 滝田希成	課長補佐 児玉隆一	
特別史跡推進班主査 森本 剛	主任主事 大内祐也	主任主事 須賀真弓	
主任主事 森山夏希			
文化財保護班 主査 西田 聡	主任主事 八木澤美有	主任主事 武田芳雅	
主事 井上 早季			
埋蔵文化財調査センター			
所長 西野雅人(囑託)			
主査 白根義久	主任主事 長原 亘	主任主事 松田光太郎(担当者)	
主事 山口祥子	囑託 菅谷通保(担当者)	囑託 香川一步	
囑託 戸村正己	囑託 石渡麻希	囑託 難波美由紀	
加曽利貝塚博物館			
館長 高梨俊夫	副館長 植草文江		
主査 山下亮介	主任主事 佐藤 洋	主任主事 米倉貴之	
主任主事 長南 基	主事 鶴沢昌弘		

令和元・平成31(2019)年度 発掘調査

教育委員会事務局			
教育長 磯野和美	教育次長 神崎広史	生涯学習部長 潮見尚宏	
文化財課長 滝田希成	課長補佐 児玉隆一		
主査 森本 剛	主任主事 石井健一	主任主事 須賀真弓	
主任主事 森山夏希			
主査 西田 聡	主任主事 武田芳雅	主任主事 八木澤美有	
主事 青笹早季			

埋蔵文化財調査センター		
所長 西野雅人(嘱託)		
主査 白根義久	主任主事 松田光太郎(担当者)	主任主事 山下亮介(再任用)
主事 井出祥子	嘱託 菅谷通保(担当者)	嘱託 香川一步
嘱託 戸村正己	嘱託 石渡麻希	嘱託 難波美由紀
加曾利貝塚博物館		
館長 加納 実	副館長 植草文江	
主査 長原 亘	主任主事 佐藤 洋	主任主事 米倉貴之
主任主事 長南 基	主事 江口泰智	

令和2(2020)年度 出土品整理

教育委員会事務局		
教育長 磯野和美	教育次長 大野和広	生涯学習部長 佐々木敏春
文化財課長 佐久間仁央	課長補佐 児玉隆一	
特別史跡推進班主査 森本 剛	主任主事 須賀真弓	主事 青笹早季
文化財保護班 主査 西田 聡	主任主事 佐藤 洋	主任主事 森山夏希
主事 千葉南菜子		
埋蔵文化財調査センター		
所長 西野雅人		
主査 白根義久	主任主事 松田光太郎(担当者)	主任主事 山下亮介(再任用)
主事 井出祥子	会任 菅谷通保(担当者)	会任 岸本高充
会任 戸村正己	会任 石渡麻希	会任 難波美由紀

令和3(2021)年度 出土品整理

教育委員会事務局		
教育長 磯野和美	教育次長 宮本寿正	生涯学習部長 佐々木敏春
文化財課長 佐久間仁央	課長補佐 児玉隆一	
特別史跡推進班主査 森本 剛	主任主事 須賀真弓	主任主事 米倉貴之
文化財保護班 主査 中尾麻子	主任主事 佐藤 洋	主事 菊地彩香
主事 千葉南菜子		
埋蔵文化財調査センター		
所長 西野雅人		
主査 白根義久	主任主事 木口裕史	主任主事 松田光太郎(担当者)
主任主事 山下亮介(再任用)	会任 菅谷通保(担当者)	会任 岸本高充
会任 戸村正己	会任 石渡麻希	会任 難波美由紀

令和4(2022)年度 出土品整理

教育委員会事務局		
教育長 磯野和美	教育次長 宮本寿正	生涯学習部長 佐々木敏春
文化財課長 佐久間仁央	課長補佐 横山清次	
特別史跡推進班主査 森本 剛	主任主事 服部智至	主事 石川 茜
新博物館整備室長(担当課長) 蚊谷友浩	主任主事 武田 芳雅	主任技師 永井明男
文化財保護班 主査 中尾麻子	主任主事 佐藤 洋	主事 菊地彩香
主事 千葉南菜子		
埋蔵文化財調査センター		
所長 西野雅人		
主査 白根義久	主任主事 木口裕史	主任主事 松田光太郎(担当者)
主任主事 山下亮介(再任用)	主任主事 廣澤文彦(再任用)	会任 岸本高充
会任 濱 秀輝(担当者)	会任 戸村正己	会任 石渡麻希
会任 難波美由紀		

令和5(2023)年度 報告書刊行

教育委員会事務局		
教育長 鶴岡克彦	教育次長 秋幡浩明	生涯学習部長 齋木久美子
文化財課長 君塚常行	課長補佐 横山清次	
特別史跡推進班主査 森本 剛	主任主事 服部智至	主任主事 西田真由子
新博物館整備室長(担当課長) 蚊谷友浩	主任主事 武田芳雅	主任技師 永井明男
文化財保護班 主査 中尾麻子	主任主事 佐藤 洋	主事 千葉南菜子
主事 石川 茜		

※会任は会計年度任用職員をさす。

埋蔵文化財調査センター		
所長 西野雅人		
主査 白根義久	主任主事 木口裕史	主任主事 松田光太郎(担当者)
主任主事 山下亮介(再任用)	主任主事 廣澤文彦(再任用)	会任 岸本高充
会任 濱 秀輝	会任 戸村正己	会任 石渡麻希
会任 難波美由紀		

(2) 加曽利貝塚調査研究部会

平成29年度、事業に着手するにあたり、千葉市史跡保存整備委員会内の組織であった史跡加曽利貝塚総括報告書編集部会を加曽利貝塚調査研究部会として再組織した(第6・7表)。部会は各年度数回開催し、加曽利貝塚発掘調査について、指導・助言を求めた(第8表)。(松田)

第6表 千葉市史跡保存整備委員会の構成

第2期 任期：平成29(2017)年5月1日～平成31(2019)年4月30日		
委員長	岡本東三(千葉大学名誉教授)	考古学
副委員長	青木繁夫(東京芸術大学客員教授)	保存科学
委員	赤坂 信(千葉大学名誉教授)	造園学
	高橋龍三郎(早稲田大学教授)	考古学
	竹内恵智郎(千葉市中心市街地まちづくり協議会会長)	集客観光
	中村俊彦(日本自然保護協会参与)	自然環境
事務局	千葉市教育委員会生涯学習部文化財課	
第3期 任期：平成31(2019)年5月1日～令和3(2021)年4月30日		
委員長	青木繁夫(東京芸術大学客員教授)	保存科学
副委員長	設楽博己(東京大学教授)	考古学
委員	赤坂 信(千葉大学名誉教授)	造園学
	高橋龍三郎(早稲田大学教授)	考古学
	谷口康浩(國學院大學教授)	考古学
	竹内恵智郎(千葉市中心市街地まちづくり協議会会長)	集客観光
	中村俊彦(日本自然保護協会参与)	自然環境
事務局	千葉市教育委員会生涯学習部文化財課	
第4期 任期：令和3(2021)年5月1日～令和5(2023)年4月30日		
委員長	青木繁夫(東京芸術大学客員教授)	保存科学
副委員長	設楽博己(東京大学名誉教授)	考古学
委員	赤坂 信(千葉大学名誉教授)	造園学
	今村まゆみ(観光まちづくりカウンセラー)	集客観光
	高橋龍三郎(早稲田大学教授)(令和4年3月31日まで)	考古学
	佐々木由香(金沢大学特任准教授)(令和4年4月1日から)	植物考古学
	谷口康浩(國學院大學教授)	考古学
	中村俊彦(放送大学客員教授)	自然環境
事務局	千葉市教育委員会生涯学習部文化財課	
第5期 任期：令和5(2023)年5月1日～令和7(2025)年4月30日		
委員長	青木繁夫(東京芸術大学客員教授)	保存科学
副委員長	設楽博己(東京大学名誉教授)	考古学
委員	赤坂 信(千葉大学名誉教授)	造園学
	設楽博己(東京大学教授)	考古学
	今村まゆみ(観光まちづくりカウンセラー)	集客観光
	佐々木由香(金沢大学特任准教授)	植物考古学
	谷口康浩(國學院大學教授)	考古学
	中村俊彦(放送大学客員教授)	自然環境
事務局	千葉市教育委員会生涯学習部文化財課	

第7表 特別史跡加曾利貝塚調査研究部会の構成

第1期 任期：平成29(2017)年6月1日～令和元(2019)年5月31日		
部会長	高橋龍三郎(早稲田大学教授) 平成30(2018)年2月27日～	考古学
副部会長	谷口康浩(國學院大學教授) 平成30(2018)年2月27日～	考古学
委員	岡本東三(千葉大学名誉教授)	考古学
	設楽博己(東京大学教授)平成30年(2018)6月1日～	考古学
事務局	千葉市教育委員会生涯学習部文化財課	
第2期 任期：令和元(2019)年6月1日～令和3(2021)年5月31日		
部会長	高橋龍三郎(早稲田大学教授) 令和元(2019)年8月16日～	考古学
副部会長	谷口康浩(國學院大學教授) 令和元(2019)年8月16日～	考古学
委員	設楽博己(東京大学教授)	考古学
事務局	千葉市教育委員会生涯学習部文化財課	
第3期 任期：令和3(2021)年6月1日～令和5(2023)年5月31日		
部会長	高橋龍三郎(早稲田大学教授) 令和3(2021)年10月8日～ 令和4(2022)年3月31日	考古学
	谷口康浩(國學院大學教授) 令和4(2022)年11月7日～	考古学
副部会長	谷口康浩(國學院大學教授) 令和3(2021)年10月8日～ 令和4(2022)年11月6日	考古学
	佐々木由香(金沢大学特任准教授) 令和4(2022)年11月7日～	植物考古学
委員	設楽博己(東京大学名誉教授)	考古学
事務局	千葉市教育委員会生涯学習部文化財課	
令和5(2023)年度		
部会長	谷口康浩(國學院大學教授)	考古学
副部会長	佐々木由香(金沢大学特任准教授)	植物考古学
委員	設楽博己(東京大学名誉教授)	考古学
事務局	千葉市教育委員会生涯学習部文化財課	

指導・助言機関

文化庁	水ノ江和同(記念物課 文化財調査官)	平成29(2017)年度
	森先一貴(記念物課 文部科学技官)	平成29(2017)年度～ 令和元(2019)年度
	齋藤慶史(文化財第二課 文化財調査官)	令和2(2020)年度～ 令和4(2022)年度
千葉県教育庁	牧武 尊(文化財課埋蔵文化財班文化財主事)	平成29(2017)年度
	吉野健一(文化財課指定文化財班主任上席文化財主事)	平成29(2017)年度～ 令和2(2022)年度
	館 祐樹(文化財課埋蔵文化財班文化財主事)	平成30(2018)年度～ 令和元(2019)年度
	武田芳雅(文化財課埋蔵文化財班文化財主事)	令和2(2020)年度
	大内千年(文化財課指定文化財班長)	令和3(2021)年度
	黒沢 崇(文化財課指定文化財班主任上席文化財主事)	令和3(2021)年度
	岡山亮子(文化財課埋蔵文化財班文化財主事)	令和3(2021)年度～ 令和4(2022)年度
	松浦 誠(文化財課指定文化財班文化財主事)	令和4(2022)年度

第8表 特別史跡加曾利貝塚調査研究部会の開催(1)

平成29(2017)年度	
第1回 加曾利貝塚調査研究部会	
日時	平成30(2018)年2月27日(火) 場所 千葉市立加曾利貝塚博物館
主な議題	①平成30年度以降の発掘調査計画について
平成30(2018)年度	
第1回 加曾利貝塚調査研究部会	
日時	平成30(2018)年6月22日(金) 場所 千葉市東京事務所
主な議題	①平成30年度発掘調査計画について
第2回 加曾利貝塚調査研究部会	
日時	平成30(2018)年11月18日(日) 場所 千葉市立加曾利貝塚・桜木公民館
主な議題	①今後の発掘調査について
第3回 加曾利貝塚調査研究部会	
日時	平成31(2019)年3月5日(火) 場所 千葉市教育委員会 教育委員会室
主な議題	①平成31年度以降の発掘調査計画について

第8表 特別史跡加曽利貝塚調査研究部会の開催（2）

令和元・平成31(2019)年度	
第1回 加曽利貝塚調査研究部会	
日時	令和元(2019)年8月16日(金) 場所 千葉市立加曽利貝塚博物館 多目的室
主な議題	①部会長及び副部会長の選任について ②今後の調査研究体制について
第2回 加曽利貝塚調査研究部会	
日時	令和2(2020)年2月6日(木) 場所 千葉市立加曽利貝塚博物館 多目的室
主な議題	①次年度の発掘調査計画について ②新博物館（管理運営計画・事業活動計画）について
令和2(2020)年度	
第1回 加曽利貝塚調査研究部会	
日時	令和3(2021)年3月8日(月) 場所 千葉市教育委員会 第二会議室（zoom開催）
主な議題	①令和3年度以降の発掘調査計画について
令和3(2021)年度	
第1回 加曽利貝塚調査研究部会	
日時	令和3(2021)年10月8日(金) 場所 千葉市立加曽利貝塚博物館
主な議題	①部会長及び副部会長の選任について
第2回 加曽利貝塚調査研究部会	
日時	令和4(2022)年3月17日(木) 場所 千葉市教育委員会 602会議室（zoom開催）
主な議題	①令和4年度以降の発掘調査計画について
令和4(2022)年度	
第1回 加曽利貝塚調査研究部会	
日時	令和4(2022)年11月7日(月) 場所 千葉市立加曽利貝塚博物館 多目的室
主な議題	①部会長及び副部会長の選任について
第2回 加曽利貝塚調査研究部会	
日時	令和5(2023)年2月8日(水) 場所 千葉市立加曽利貝塚博物館 多目的室
主な議題	①令和5年度以降の発掘調査計画について

2 調査方法

(1) 調査区の設定と調査の方法

グリッド・調査区の設定

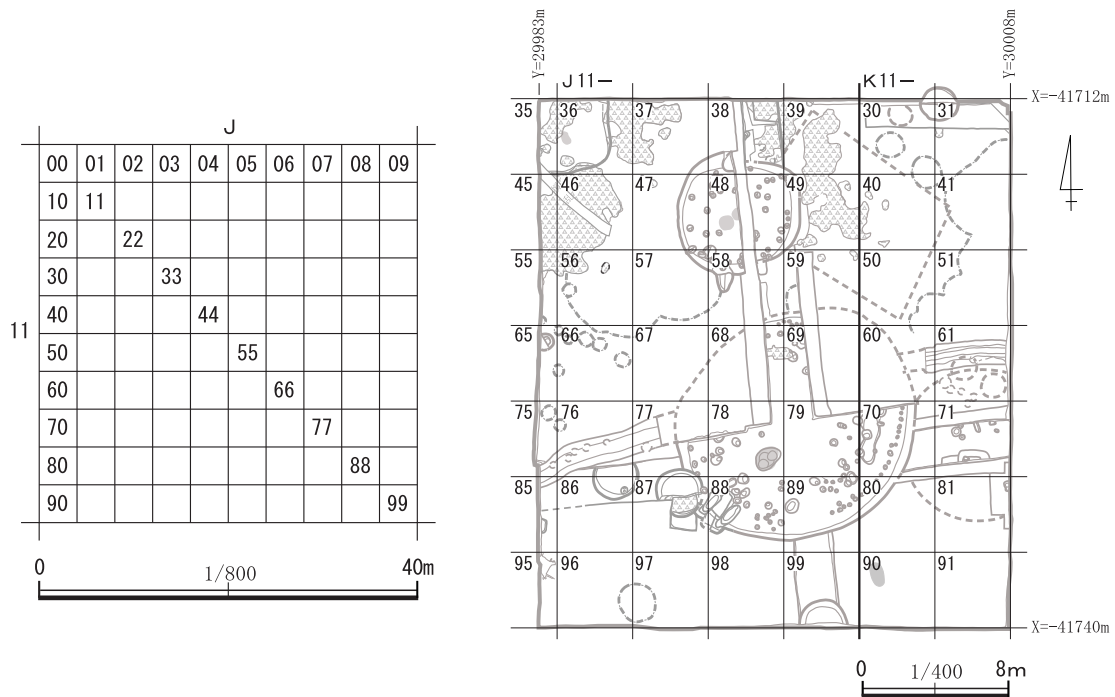
今回調査開始にあたり、特別史跡の範囲のみならず、現在の加曽利貝塚の埋蔵文化財包蔵地範囲全域を包括するように、公共座標第Ⅸ系 $X=-41300\text{m}$ 、 $Y=29600\text{m}$ （世界測地系）を北西隅の原点とし、40m四方の大グリッド（方眼）を設定した。そして東西方向にアルファベット（A, B, C…）、南北方向に数字（1, 2, 3, …）を割振り、大グリッドの名称はアルファベットと数字を組合せ、A1, A2…のように定めた（第6図）。さらに大グリッド内を4m四方の100区画の小グリッドに分け、北西隅が0、南東隅が99になるように番号を振った（第6図）。

調査区は $X=-41712\text{m}$ 、 $Y=29983\text{m}$ の座標を北西端とし、座標軸に合わせ、東西長25m、南北25mの正方形の範囲と当初設定した（平成29年度）。面積625㎡。これは調査区の目的に掲げた第2次調査ⅣトレンチとⅤトレンチの交点および85号住居跡・未報告遺構5と6の確認・調査が可能な範囲とした。しかし平成27年度に遺構確認したところ、未報告遺構5（本報告でいう140号住居跡）は調査範囲よりはみ出すことが判明したため、平成28年度に調査区を南側に3m拡張し、東西長25m、南北長28m、面積700㎡の長方形の範囲を調査区として再設定した。

調査区および作業範囲、発掘で発生する排土置場（現状変更範囲）は、安全のため、ブタピンおよびネットフェンスによる安全柵を圍繞した。

表土除去

調査区内の樹木は事前に根を残して伐採した。地表面直下の表土については重機により除去した。表土掘削およびその後の人力掘削で発生する排土はクローラーで運搬し、調査区付近の排土置場に仮置きした。



第6図 グリッド配置図

表土下部はその直下の遺物包含層との区別が難しい部分があったので、そうした部分は人力で掘削した。

第2次調査トレンチの調査

表土直下には黒色土からなる遺物包含層があり、遺物包含層上面でジョレンと移植ごてを用いた遺構確認を行った。南貝塚には井桁状に配された幅2m・長さ約170mの第2次調査トレンチが存在するため、遺物包含層上面で第2次調査のⅣ・Ⅴトレンチ（以下、旧Ⅳ・Ⅴトレンチと言う）と焼土が確認された。旧トレンチ内の埋土は人力で除去した。埋土に貝殻が入っている場合は、貝殻を含む排土を電動篩にかけて選別し、微細遺物や動物遺存体を回収した。焼土は遺構として調査した。（調査の過程で遺物包含層上面の焼土は表土中にあると捉えられたため、本報告には掲載していない。）旧トレンチは遺構と同様の方法で平面位置を記録した。

遺物包含層の調査

遺物包含層は、表土直下の黒色土（基本層序のⅡa層）と黒色土下の暗褐色・褐色土（基本層序のⅡb層）からなる。旧トレンチの壁面で土層を観察・分層した後、まず黒色土を移植ごてで水平に掘り下げた。そして黒色土の掘り下げがある程度進むと、その下は次第に暗褐色や褐色土に移行し、暗褐色・暗褐色土も一部掘り下げた。

遺物包含層掘削過程で遺物が出土したが、遺物は微細なものを除き土柱上に残し、遺物出土状況の写真を撮影した。その後、5cm以上の遺物および重要性の高い遺物に関し、遺物番号（DD番号）を付け、出土位置・層位を記録した後、個々にビニール袋に入れて取り上げた。出土位置の記録はTOPCON社製LN-100を使用した。遺物番号を付けなかった遺物は、小グリッド毎に回収した。遺物包含層の中でも黒色土は遺物が非常に多く含まれ、遺構確認のため黒色土の掘り下げを進めたため、今回の調査の遺物包含層出土遺物の大半は黒色土から出土したものとなった。

遺構の調査

遺物包含層のうち黒色土は調査区全域に存在し、黒色土中での遺構の確認は困難であった。黒色土上面

においては黄褐色土を覆土にもつ遺構がほんやりと確認できたにすぎない。黒色土を掘削し、その下の暗褐色・褐色土が現れてようやく遺構確認を行うことができた。この暗褐色・褐色土は関東ローム層よりは上位に位置するが、暗褐色・褐色土上面が今回の調査の縄文時代後期～晩期の遺構確認面となった。この暗褐色・褐色土上面においてできる限りの遺構平面形確認を行った。

遺構確認後、本調査の目的を達成するため、晩期の遺物を出土する遺構を調査対象遺構と定め、掘削を行った。本遺跡は特別史跡であるため、掘削は部分的なものに留め、移植ごてを用いて行った。大きい遺構については平面形に対し、十字にベルトを残し、掘削面をほぼ水平に保ちながら、下底面まで掘削を進めた。小さい遺構については半裁して掘削を行った。遺物の取り上げは遺物包含層と同様の方法をとったが、覆土の変化に応じて、土層を分層しながら、層位を記録しながら行った。掘削終了後、平面および土層断面の写真撮影および図面作成を行った。断面図作成はレベル・メジャー・コンベックスを用いた手実測で行った。平面図作成は以下の3種類の方法を用いた。①メジャー・コンベックスを用いた手実測、②TOPCON社製LN-100を使用した三次元測量、③デジタルカメラを用いた写真測量である。写真測量は、長さ約5mの棒の先端に取り付けたニコン社製1眼レフデジタルカメラ(D5600)を用いてリモート撮影により、座標値のわかる測点を含む俯瞰写真を撮り、撮影した写真からフォトスキャンを用いてオルソ写真を合成し、QGISに取り込むという方法である。多くの遺構は③写真測量で平面図を作成したが、調査の早期段階で確認された黒色土上面の焼土の記録を中心に、①・②の方法を採用した。

自然科学分析のためのサンプリング

本調査ではローム層の観察を行うため、2×2mのマス掘りを行い、ロームの分層・観察を実施した。そして土壌や火山灰の分析を行うために、マス掘り断面や旧トレンチ壁面等において土壌の柱状サンプルを採取した。また土壌中の植物遺存体を調べるため、住居跡の土層観察用ベルトや旧トレンチの壁面において土壌サンプリングを行った。貝層については住居跡内や土坑内、遺構外の貝層について、柱状サンプルを採取し、一部剥ぎ取りを実施した。

発掘調査における市民参加・普及活動

発掘調査における遺物の回収と発掘調査への市民の参加の機会を設けるため、発掘調査で発生する排土(旧トレンチ埋土および遺構覆土)に対して、ボランティアによる篩がけ遺物選別と毎週土曜日の篩がけ体験を実施した。また発掘調査の人力掘削の一部(表土下層)について発掘体験を実施した。また調査の内容については、現地における発掘調査現地解説(毎日開催)および発掘調査現地説明会、加曽利貝塚博物館ホームページの発掘調査日誌で公表した。

埋戻し

発掘調査の記録作業終了後、遺構内および遺構確認面の上面に山砂を薄く敷き、その後、遺構内は人力、遺構外は重機により埋め戻しを行った。その後、安全柵を撤去し、元の状態に復旧した。(松田)

3 調査経過

平成29(2017)年度

平成29年9月26日、機材搬入。調査区一帯の草刈りと安全柵設置を実施し、調査区の杭打ちを行った。9月29日、重機による表土掘削を開始した(10月6日まで実施)。10月4日より遺構確認を進め、旧トレンチ(第2次調査トレンチ)を確認した。なお旧トレンチ検出の際、トレンチの脇において、トレンチに沿う硬化面を確認した。これはトレンチに平行することから、第2次調査埋戻しの際のダンプの轍と考え

られた。10月12日、旧Vトレンチ埋土の掘削および排土の篩がけ作業を開始した。旧Vトレンチ埋土掘削の過程で、旧Vトレンチ4区にて人骨(人骨92〔報告Ⅱ〕31号人骨)と85号住居跡の存在を確認した。旧トレンチの配置とその1～4区の区分は『総括報告書』3-72図参照。11月7日より黒色土(遺物包含層)掘削を開始し、黒色土下において85号住居跡の平面形を確認した。11月24日より旧Vトレンチ以東の85号住居跡覆土の掘削および床・壁の検出を行った。12月2日、現地説明会を開催し、550名が参加した。12月5日より断面図作成等の記録作業を実施した。12月8日に全景写真を撮影した。12月9日より人力と重機による埋戻し作業を行い、12月20日に終了し、12月22日に機材を撤収した。

平成30(2018)年度

平成30年7月30日、機材搬入。草刈りと安全柵設置を実施した。調査区は平成29年度より南側に3m拡張した範囲とし、8月1日、重機による表土掘削および平成29年度の埋戻し土除去を開始した(8月18日まで実施)。調査区内には東西に走る電源ケーブルが存在したが、それは残したまま表土を除去した。8月21日、遺構確認を行い、旧Vトレンチおよび旧IVトレンチ3区の埋土掘削および排土の篩がけ作業に着手した。9月5日～9月13日、早稲田大学文学部考古学研究室の考古学実習生による発掘の協力を得た。9月22日より黒色土(遺物包含層)の掘削に着手し、10月4日より旧Vトレンチ以西の85号住居跡の掘削、11月15日より旧IVトレンチ4区内の140号住居跡の掘削を行った。11月21日、調査区の全景写真撮影、11月24日、現地説明会を実施し、550名が参加した。11月26日より人力と重機による埋戻し作業を行い、12月7日に終了し、12月10日に機材を撤収した。

令和元・平成31(2019)年度

令和元年6月3日に調査区一帯の草刈り、6月4日に調査区設定、6月5日に機材搬入と安全柵設置を実施した。6月7日より重機による表土掘削を、6月13日より調査区内の電源ケーブルの撤去を行い、6月21日に終了した。6月25日より7月9日まで、旧IVトレンチ(3・4区)の埋土の掘削および排土の篩がけ作業を行った。7月10日より7月13日まで遺構確認を行い、7月17日より140号住居跡、7月20日より6号溝状遺構をはじめとする遺構の掘削、7月24日より黒色土(遺物包含層)の掘削を開始した。8月2日より旧Vトレンチ4区の142号住居跡覆土上位の貝層の確認作業に着手した。8月31日～9月12日、早稲田大学文学部考古学研究室の考古学実習生による発掘の協力を得た。10月26日、集中豪雨で中止。雨水が調査区内に大量に流入し、170号土坑が陥没した。10月5日・6日、加曽利貝塚博物館の秋まつりに合わせて発掘体験を実施。11月7日、140号住居跡の覆土上やその他に存在する貝層のブロックのサンプリングを実施した。11月16日、K11-91グリッドにマス掘りを掘削し、11月21日に断面土層の分層、図化、土壌サンプリングを行った。11月20日、142号住居跡床面上の埋葬人骨(人骨92)を取り上げた。11月30日、現地説明会を実施し、800名が参加した。12月4日ドローンによる調査区全景を撮影した。12月5日より9日まで記録作業を行う共に、遺構確認面と遺構底面に山砂を敷いた。12月9日より人力と重機による埋戻し作業を行い、12月19日に終了し、12月20日に機材を撤収した。

調査の概要報告

調査実施年度中に、千葉市遺跡発表会等で以下のような概要報告を公表した。なお調査内容については、発掘調査終了後から開始した出土品整理の過程で検討し、本発掘調査報告書を刊行している。その調査の報告は本書をもって正式なものとする。(松田)

文献 発行年・五十音順

菅谷通保・松田光太郎2018「縄文時代晩期集落の解明へ向けて－千葉県千葉市加曽利貝塚」『季刊考古学』144, 89・90。

雄山閣

松田光太郎2018「特別史跡加曾利貝塚発掘調査速報」『平成29年度千葉市遺跡発表会 発表要旨』10～13. 千葉市教育委員会・千葉市埋蔵文化財調査センター

松田光太郎・菅谷通保2019「特別史跡加曾利貝塚発掘調査速報－平成30年度調査」『平成30年度千葉市遺跡発表会要旨』6～8. 千葉市教育委員会・千葉市埋蔵文化財調査センター

松田光太郎・菅谷通保2020「特別史跡加曾利貝塚発掘調査速報－平成29～令和元年度調査」『令和元年度千葉市遺跡発表会要旨』8～11. 千葉市教育委員会・千葉市埋蔵文化財調査センター

第2章 遺構と遺物の調査

第1節 調査の概要

1 概要

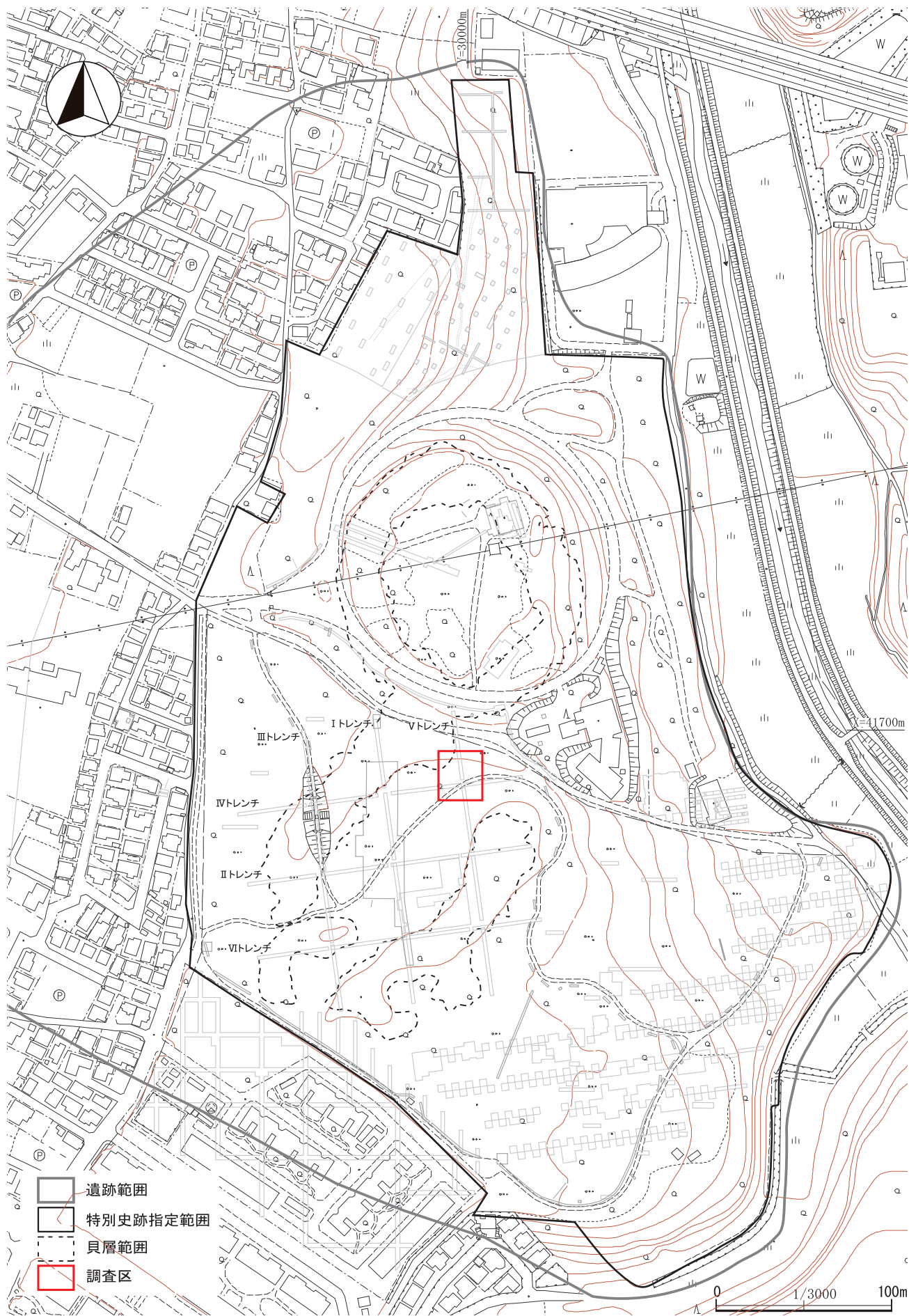
調査区は南貝塚の北東部に位置する。第7図は『総括報告書』の調査地点位置図に今回の調査区を表示したものである。今回の調査区は、調査の目的を達成するため、第2次調査ⅣトレンチとⅤトレンチの想定される交点が入るように設定した(第7図)。南貝塚は北東部と南西部に開口部をもつ長径約190mの馬蹄形貝塚であり、今回の調査区は北東部の開口部にあたる(同図)。したがって調査区内においては、調査区北西側に貝層が存在するが、それ以外の場所には貝層は存在しない。

調査区は地表面標高30m付近に位置する。第7図の調査区の北側に東西に走る等高線が30.0mに相当し、標高は北側が高く、南西側が低く、北側から南西側に向かって傾斜している。南貝塚は中央に窪地(中央窪地)をもっており、本調査区の南西側の標高が低い部分は、中央窪地に繋がるものといえる。

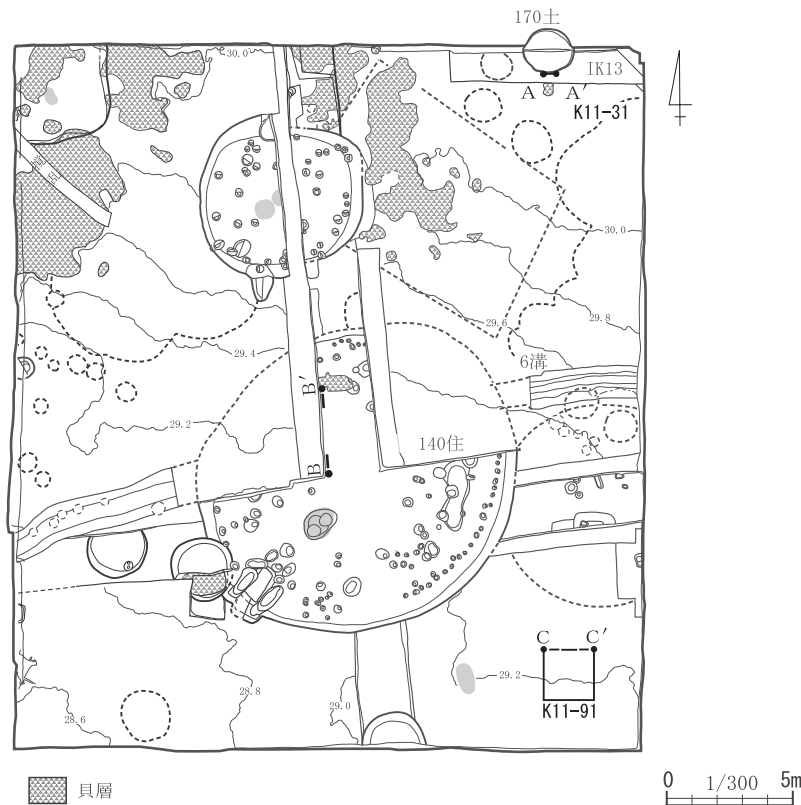
北側の標高が高いことに関して、北側は貝層があるために、標高が高くなっていると言える。しかし北東側は貝層がないにもかかわらず、標高が高い。基本層序の項でも述べるが、北東側は褐色・暗褐色土がやや厚く堆積していることが看取された。またローム層上面の標高も、北側のK11-31グリッドのローム層上面標高は南側のK11-91グリッドのローム層上面標高より約50cm高かった。調査区内のローム層上面標高の高低の成因を明らかにするため、K11-91グリッドにマス掘りを設定し、土壌サンプリングを実施した(第8図)。またK11-31グリッド-170号土坑南壁にてローム層が確認できたので、サンプリングを行なった(同図)。これらの土壌サンプルについて自然科学分析を実施し、調査区内の標高の高低の解明に取り組んだ(第3章第4節1)。また北東部に褐色・暗褐色土がやや厚く存在していることについては、褐色・暗褐色土が遺物を含む土であるため、盛土が存在する可能性も考えられる。

次に遺構と貝層、遺物包含層について。本調査で見つかったものは近現代のものを除けば、遺構は縄文時代のものと時期不明のものに限定される。遺構は掘削調査したものに限るが、住居跡5軒、溝状遺構1条、土坑5基、性格不明遺構(本書でIKと表記している遺構)6基の存在が確認された。今回の調査は縄文時代晩期の解明を目的とした調査であるため、調査は後期から晩期の遺物を包含する黒色土を除去し、黒色土直下で遺構確認を行った。黒色土直下には褐色・暗褐色土が存在する場所とローム層(主に調査区南側)が存在する場所がある。黒色土直下に褐色・暗褐色土が存在する場所は褐色・暗褐色土上面、ローム層がある場所はローム層上面を確認面として遺構確認を行い、晩期と思われる遺構、およびそれと重複した一部の遺構を掘削調査した。本遺跡は遺構の重複が多く、確認面下には未確認の遺構が多数存在すると推測される。また遺構外貝層および一部の遺構内には貝層が存在した。さらに次に述べるⅡa層：黒色土と、Ⅱb層：褐色・暗褐色土は遺物を多く含む遺物包含層をなしていた。

遺物も縄文時代のものに限定され、人工遺物としては縄文土器、土製品、石器・石製品、骨角貝歯牙製品、自然遺物としては動物遺存体(貝殻、人骨、獣骨、魚骨)、植物遺存体(炭化材、炭化種子等)からなっていた。人工遺物はテン箱(150×440×600mm)約180箱出土した。(松田)



第7図 調査区位置図



第8図 土壌サンプル採取位置図(1)

2 基本層序

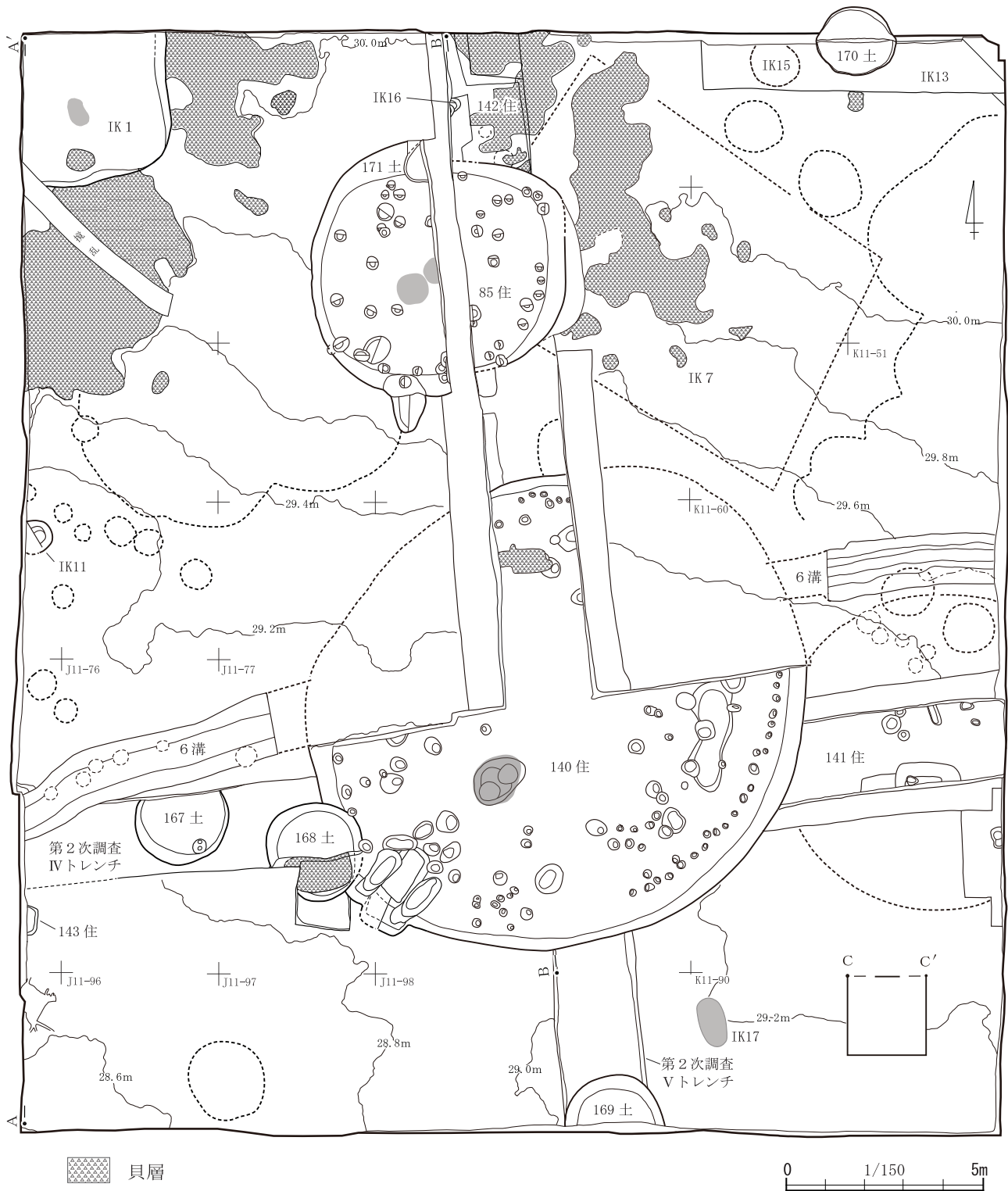
本貝塚全体に関する基本層序はまだ確立していないが、本調査区内の層序を示すため、調査区西壁断面図(第10図)、第2次調査Vトレンチ西壁土層断面(第11図)、K11-91グリッドマス掘り土層断面図(第12図)を図示した。断面図のセクションポイント位置は第9図に示した。

本調査区の土層の中で、全体的に存在する土層を記述すれば、以下のようになる。加曽利貝塚全体に通用する基本土層は確立していないため、本次調査限定の層として説明することにする。

I層：表土 攪乱を含む。本層は調査区中央部のJ11-69・79グリッド付近で最も厚く、旧Vトレンチ西壁においては、本層中に宝永スコリアの存在が認められた(上杉 陽氏の御教示による)。また本層下部-黒色土上面に焼土ブロックが存在した。焼土は調査区中央付近にやや目立って存在し、斜面の傾斜に沿って東西方向に並ぶような分布を示しているようにも見受けられた。その一部は過去の速報(菅谷・松田2018)に掲載したこともあるが、最終的には表土中に存在するものと判断されたため、本報告では掲載していない。

IIa層：黒色土(黒色土ないしは黒褐色土) 調査区全域に存在した。層厚は20~40cm。黒みが特に濃い「漆黒」色と呼ぶべき黒色土は141号住居跡覆土中等、部分的に存在したにとどまる。本層は縄文時代後期後葉および晩期前葉・中葉の遺物を主体的に包含する遺物包含層であった。縄文時代晩期前葉・中葉の遺構(85・140号住居跡)の覆土上層に存在する一方(第11図)、後期後葉以降の所産であるIK7の覆土にもなっていたため(第10図)、縄文時代後期後葉~晩期中葉に堆積したと考えられる。IIa層は上部が黒色、下部へいくほど黒褐色を呈する傾向があり、一様ではなかったが、黒色土と黒褐色土は明瞭に分けることはできなかったため、分別はしなかった。

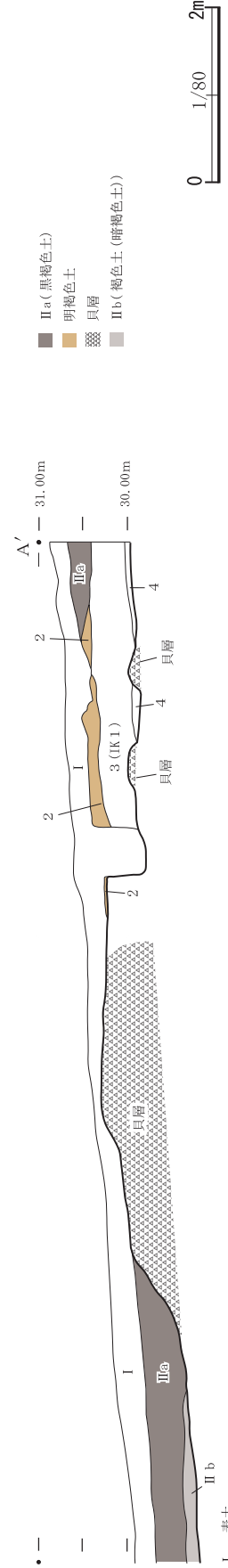
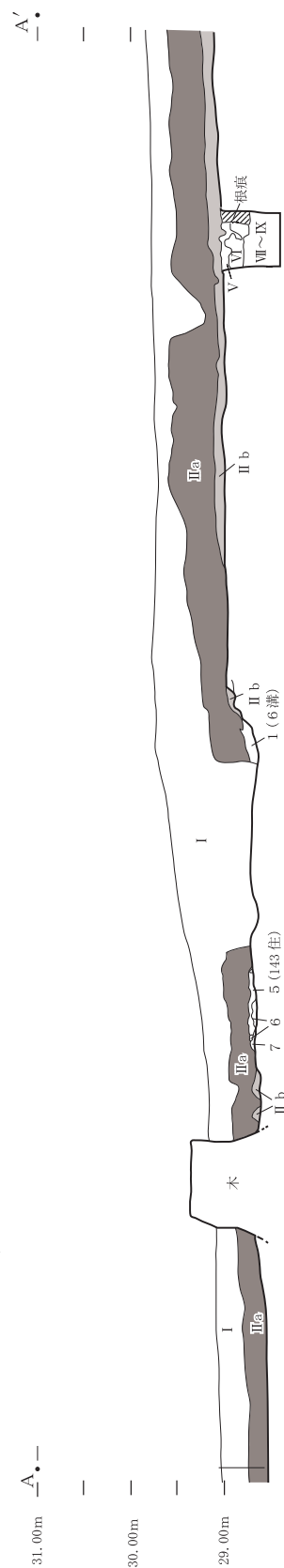
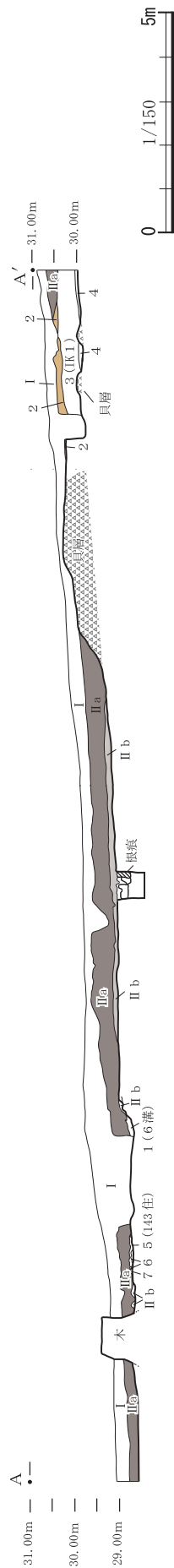
本層の黒色土は6号溝状遺構の覆土にも存在し、6号溝状遺構覆土(黒色土)中に明赤褐色土が存在し



第9図 調査区断面位置図

た(第11図、第39図)。この明赤褐色土については火山灰(アカスナ)の可能性が指摘された(上杉 陽氏 御教示)。この明赤褐色土直上の土層(第173図試料No.1)と直下の土層(同図試料No.5)については放射性炭素年代測定を実施している(第3章第5節2)。¹⁴C年代は前者が638-666calAD(83.97%)、後者が198-89calBC(79.02%)(2σ)を示しており、本土層の堆積下限を考える上で、参考になる(第3章5節2)。なお貝層は黒色土下において検出されている(第10・11図)。

また調査区全域には存在しないので基本層序にはならないが、本層に覆われるようにして、黄褐色土な

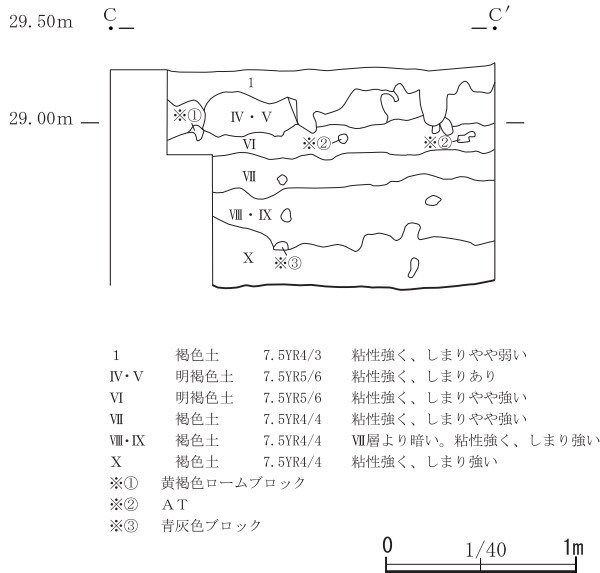


- I 表土
- IIa 黒褐色土
- IIb 褐色土
- V~IX ローム
- 1 黒色土
- 2 明褐色土
- 3 褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 明褐色土
- 6 暗赤褐色土
- 7 暗褐色土
- 7.5YR3/2 赤褐色粒子・ローム土を少し含む。粘性弱く、しまり強い。6溝覆土
- 7.5YR4/3 粘性やや強く、しまりやや弱い
- 10YR2/1 赤褐色粒子・ローム土を少し含む。粘性弱く、しまり強い。IK1覆土
- 7.5YR5/8 1~2mm焼土ブロックを僅かに含む。粘性やや弱く、しまり強い。IK1覆土
- 10YR4/4 1~2mm褐色ブロック・粒子をやや多く、1mm焼土ブロックを少し含む。粘性やや弱く、しまりやや弱い。IK1覆土
- 7.5YR4/6 1mm褐色粒子を僅かに含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。IK1覆土
- 10YR2/2 焼土粒を含む。粘性あり、しまりやや強い。143住覆土
- 5YR2/2 焼土粒、焼土ブロックを多く含む。粘性やや強く、しまりあり。143住覆土
- 7.5YR3/3 2mm褐色粒子を含む。粘性やや強く、しまりあり。148住覆土

第10図 調査区西壁土層断面図



第11図 第2次調査Vトレンチ西壁土層断面図



第12図 K11-91グリッドマス掘り土層断面図

本層は一部を除き基本的には掘削していない。調査区南側にあるK11-91グリッドマス掘りや169号土坑付近の褐色土(第12図1層、第77図3層)を掘削した限りでは縄文時代晚期土器が出土し、該期の遺物包含層であることがわかった。一方で本層は調査区北側にも存在し、後期後葉以降の所産であるIK7の地山になっていたため、本層は縄文時代後期に属する。本層の形成には時間幅を有していたと考えられる。また本層の層厚は調査区南側(K11-91グリッドマス掘り)(第12図)では約30cmであるのに対し、調査区北東側(K11-31グリッド・IK13付近)では50cm程度(第86図IK13覆土と同程度の層厚)とやや厚くなる傾向があり、北東側が盛土となる可能性がある。

ローム層 武蔵野台地の遺跡群のローム層層序に準拠した分層を行った。しかし調査区内ではローム層の最上層(Ⅲ・Ⅳ層)は確認できず、調査区南東部(K11-91グリッド)ではⅡb層の下にはⅤ層～Ⅸ層が存在していた(第12図)。Ⅲ・Ⅳ層が無い場合、A T(始良丹沢火山灰)が顕著に含まれるⅥ層はⅡb層下の比較的浅い所で検出された。

発掘調査期間中には明確なⅢ・Ⅳ層は確認できなかったが、本調査区の北側(K11-31グリッド)の170号土坑南壁においてIK13の床面直下にローム層を確認できたので、土壌サンプルを採取し、土壌分析・鉍物分析により遺跡内のローム層層序の対比を行った(第3章第4節1)。目的は調査区内の北側のローム層上面標高が南側のローム層上面標高より高いという、調査区内のローム上面標高の高低の成因を明らかにするためである。

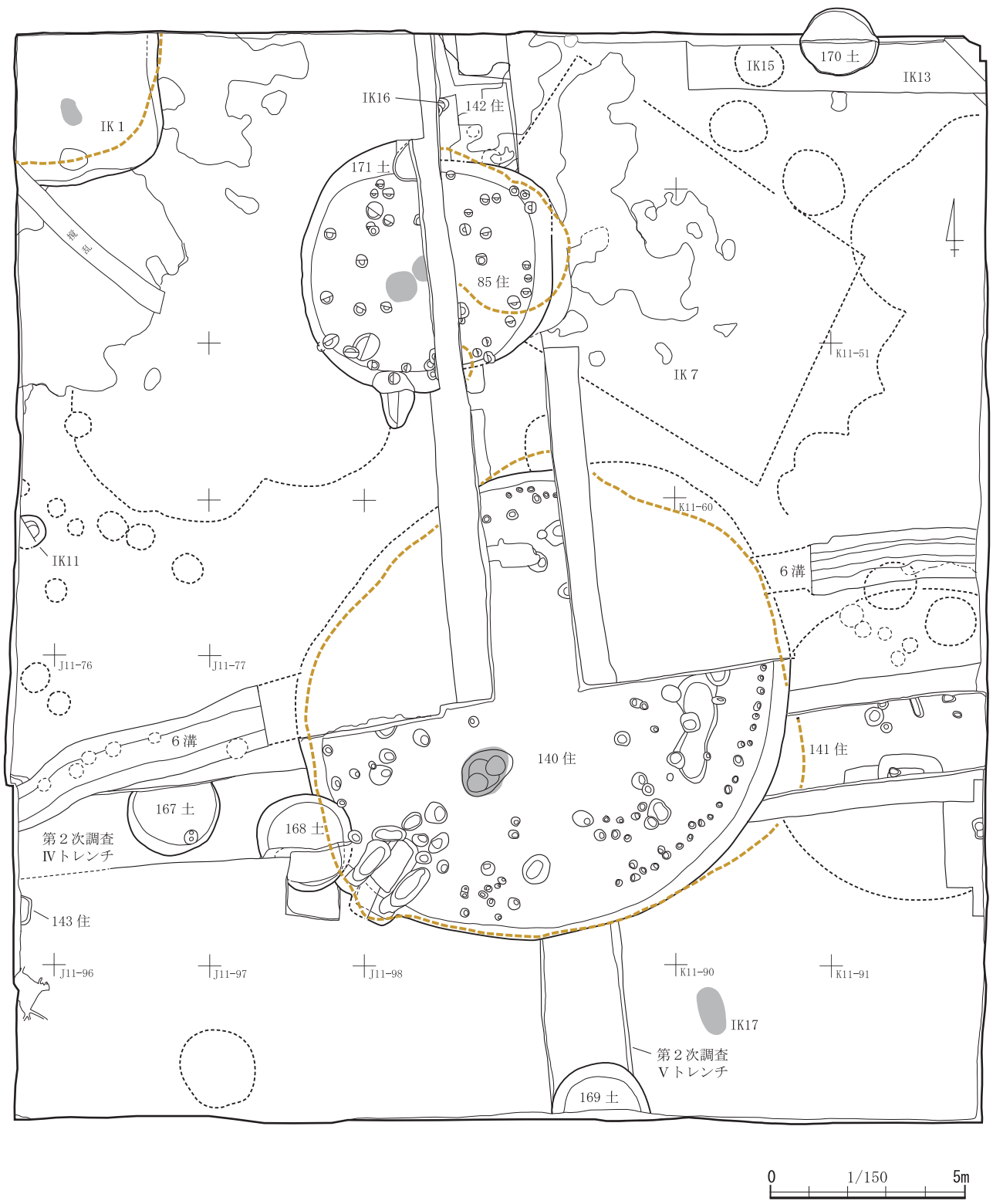
また比較のため第16次調査(令和2年度)にてK17グリッド(東傾斜面東南部)にマス掘りを掘削し(第3章4節1 第172図)、Ⅲ層の存在を確認することができた(第173図D-D')。これにより南貝塚内側は、その外側とは異なり、ローム層上部が欠落していることが明確に捉えられた。(松田)

参考文献

菅谷通保・松田光太郎2018「縄文時代晚期集落の解明へ向けて—千葉県千葉市加曽利貝塚」『季刊考古学』144, 89・



第13図 黄褐色土・明褐色土分布状況（上位面）



第14図 黄褐色土・明褐色土分布状況（下位面）

第2節 遺構と出土土器

本調査で見つかった遺構は近現代のものを除けば、縄文時代のものと時期不明のものに限定される。今回の調査は縄文時代晩期の解明を目的とした調査であるため、掘削調査したものは晩期と思われる遺構、およびそれと重複した一部の遺構に限るが、住居跡5軒、溝状遺構1条、土坑5基、性格不明遺構（本書でIKと表記している遺構）7基からなる（第15図）。所属時期別の内訳は以下の通りである。

- 住居跡5軒 ：中期2軒（142号・143号住居跡）
 晩期3軒（85号・140号・141号住居跡）
- 溝状遺構1条 ：時期不明（6号溝状遺構）
- 土坑5基 ：中期～後期初頭4基（168号・169号土坑）
 後期～晩期1基（170号土坑）
 時期不明2基（167・171号土坑）
- 性格不明遺構6基：中期1基（IK15）
 後期4基（IK1・IK7・IK13・IK16）
 不明1基（IK11・IK17）

本調査では遺構の調査は必要最低限に留めており、晩期以前の遺構はごく一部しか掘っていないので、性格把握が難しい。本報告で住居跡としたものは硬化面や炉体土器の存在から床面が明確に捉えられたものに限定している。底面に平坦面をもつ掘り込みを有しても、明確に硬化した床面や炉体土器がない遺構は住居跡の条件を十分には満たしていないため、性格不明遺構（IK）として扱った。IKはIKO（イコウ：遺構）を意味し、第14次調査で初めて使用したものである。第15図の遺構の実線は掘削で確認した遺構の境界線であり、点線は遺構確認で確認したのみの境界線である。遺構はいずれも完掘はしていないので、遺構の境界線の一部は必ず点線となる。また掘削せず、遺構確認のみで留まったものは第15図中には点線のみで示しており、それらについて遺構扱いはしていない。遺構の番号は『総括報告書』の遺構番号を踏襲し、命名の遺構には『総括報告書』の続き番号を付与した。

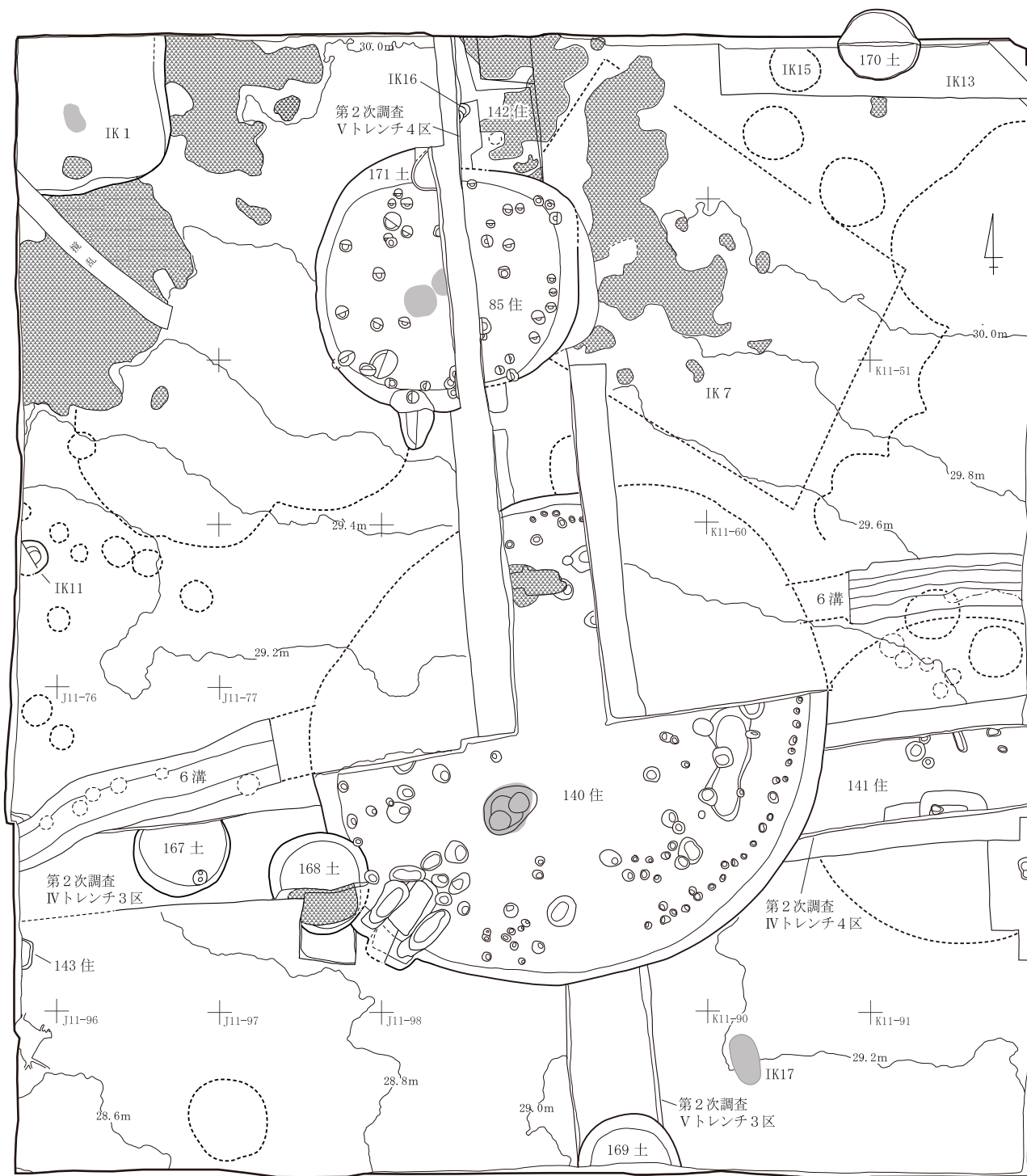
調査区内の標高を見ると、標高は北側が高く、南西側が低く、北側から南西側に向かって傾斜しており（同図）、南西側の標高が低い部分は、中央窪地に繋がるものと考えられる。遺構は調査区全体に存在しているが、遺構を帰属時期別に見ると、分布に傾向が見られる。中期の土坑や住居跡は標高が低い南西側にも存在するが、後・晩期の遺構は標高が最も低い部分にはなく、標高がやや上がりかける変化点付近およびそれより上位に存在する。この標高が高くなる部分は遺構の重複が多く、確認面下には未確認の遺構が多数存在すると推測される。（松田）

1 住居跡

142号住居跡（第16～18図、図版2-1～3）

概要

J11-38グリッドに位置する。第2次調査Vトレンチの旧13・14グリッドに存在するが、遺構としては認識されていなかった。南側を85号住居跡に切られ、中央にはIK16の柱穴が穿たれていた。覆土の上にはIK7が存在したはずであるが、IK7は第2次調査時に覆土の一部（貝層は除く）は掘削されており、旧Vトレンチ東壁で両者の関係が確認されたに過ぎない。本住居跡として確認したのは旧Vトレンチ内の南北2.8



第15図 遺構配置図

m、東西1.9mの範囲だけである(第16・17図)。北東側には貝層、東側にはIK 7とその覆土中の貝層が存在していたため調査できず、西側はトレンチのベルトとして保存し、南側は85号住居跡に切られて消失していたためである。北端は異なる覆土(第17図7・8層)の掘り込みが見られ、別遺構が重複している可能性があり、本遺構の北側の範囲を明確に捉えることはできなかった。北側では壁面は検出されていない。

また本住居跡床面少し上から埋葬人骨が出土した。第2次調査ではVトレンチ4区旧14-66グリッドの住居跡床面出土の人骨（『総括報告書』人骨92・『報告Ⅱ』31号人骨）は未発掘のまま再埋置されたと記載されているので（『報告Ⅱ』）、本人骨がそれに該当すると思われる。本埋葬人骨は『報告Ⅱ』では晩期の人骨として報告されたが、縄文時代晩期の85号住居跡に切られていたものであり、縄文時代中期に属することが判明した。なお同調査Vトレンチ4区旧20-66グリッドの黒褐色土層出土の人骨（『総括報告書』人骨91・『報告Ⅱ』29号人骨）は見つからなかった。

床面・柱穴

本住居跡として確認した範囲にはロームを地山とした硬くしまった床面を確認することができた。ただし西側に所在する旧Vトレンチのベルト直下（東側）はサブトレンチが掘られ、床面はなくなっていた。

床面上には柱穴が確認できた。床面中央では縄文時代後期の柱穴（IK16）が重複していた。85号住居跡北壁付近で確認したものは本住居に伴うと思われるもので、径50cmを測る。後述する人骨や礫が直上にあるため、人骨埋葬時には埋没していたようである。柱穴は調査していないので、深度は不明である。

覆土

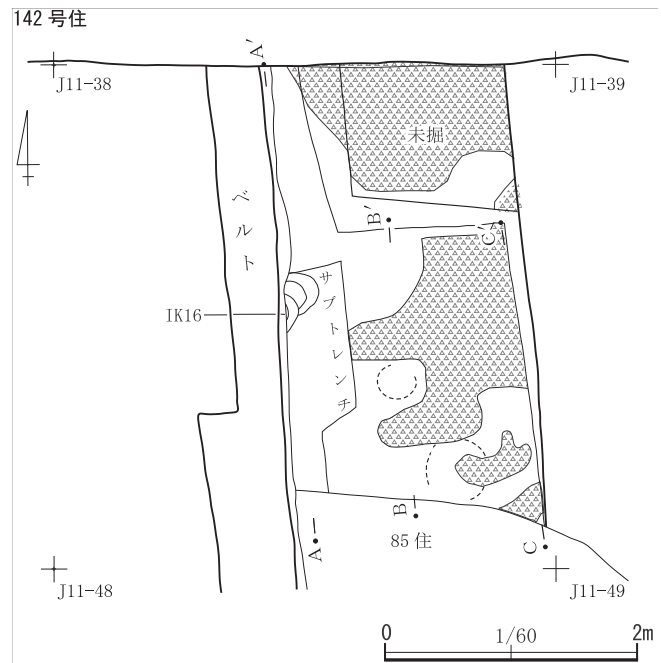
黒褐色土（第17図 4層）を覆土にもつ。西寄りの覆土には貝殻は混じらないが、中央の土層断面B-B'の1層および東寄りの土層断面C-C'の6層には破碎貝が少し含まれていた。そしてB-B'の1層より上とC-C'の2・3層には混土貝層が存在していた（第17図、第106図）。この貝層は出土遺物から本住居よりも新しい時期の所産と判断し、第2章第3節の遺構外貝層の項で報告する。C-C'の5層（混土貝層）は本住居跡の覆土であるのか、その上の貝層に伴うものであるのかは判断が難しかったが、本住居跡の覆土の上部はその後の縄文時代の攪拌の影響を受けていたと判断し、本書では遺構外貝層に含めて扱った。なおB-B'の1層および土層断面C-C'の6層の破碎貝は上位の貝層から混入したものか、本住居跡の覆土に本来的に入っていたものかは判断がつかなかった。

人骨（人骨92）（第18図）

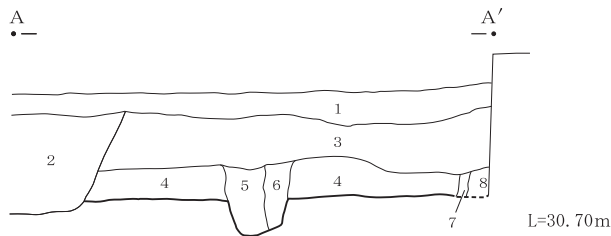
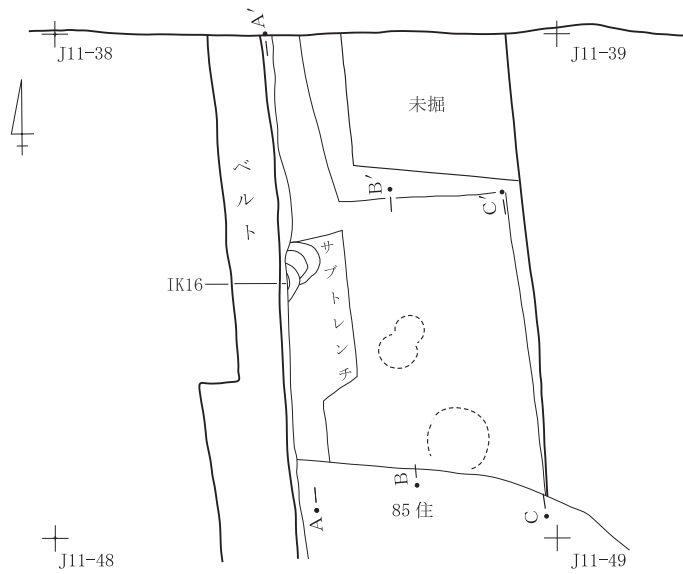
人骨は本住居跡の床面直上のものや、床面より4～5cm上位のものがあつた。床面直上の黒褐色土内に含まれていた。人骨は遺存状態不良であつた。かろうじて頭骨などが確認できた。人骨の東側の床面直上には礫が1個存在した。『総括報告書』人骨92（『報告Ⅱ』31号人骨）に相当することは前述した。（松田）

人骨の保存状態は不良で、すべて破片で出土した。部位同定が可能だったのは頭蓋骨、手骨、足骨、歯牙のみである。

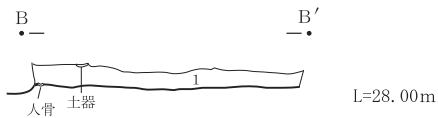
頭蓋骨は、大破片2点と錐体Rである。大破片は、頭蓋冠と頭頂骨から後頭部にかけての破片で、部位が重複しており2個体分の頭蓋骨片が確認された。出土状態から頭蓋冠が人骨92と推測される。錐体Rは、保存状態から頭蓋冠と同一個体と判断できる。人骨92の眉間隆起はやや強く、前頭隆起が弱い。男性的な特徴を有する。冠状縫合と矢状



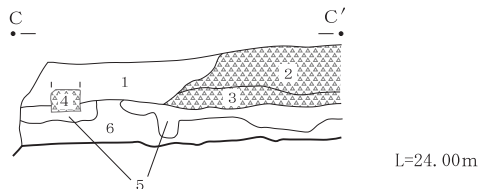
第16図 142号住居跡 貝層被覆状況



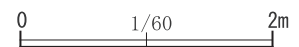
- 1 黒色土
- 2 にぶい褐色土 7.5YR5/4 1~2mm明褐色ブロック・粒子を多く、1mm赤褐色ブロック・粒子を少し含む。
粘性弱く、しまり弱い。85住覆土
- 3 黒褐色土 7.5YR3/2 赤褐色、黄褐色土ブロックを含む
- 4 黒褐色土 7.5YR3/2 赤褐色粒子、ロームブロックを含む。粘性あり、しまりやや弱い。142住覆土
- 5 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム土を少し含む。粘性あり、しまり弱い。IK16覆土
- 6 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム土をやや多く含む。粘性あり、しまりやや弱い。IK16覆土
- 7 黒褐色土 7.5YR3/2 粘性あり、しまりやや弱い
- 8 褐色土 7.5YR3/2 粘性やや強く、しまりあり。



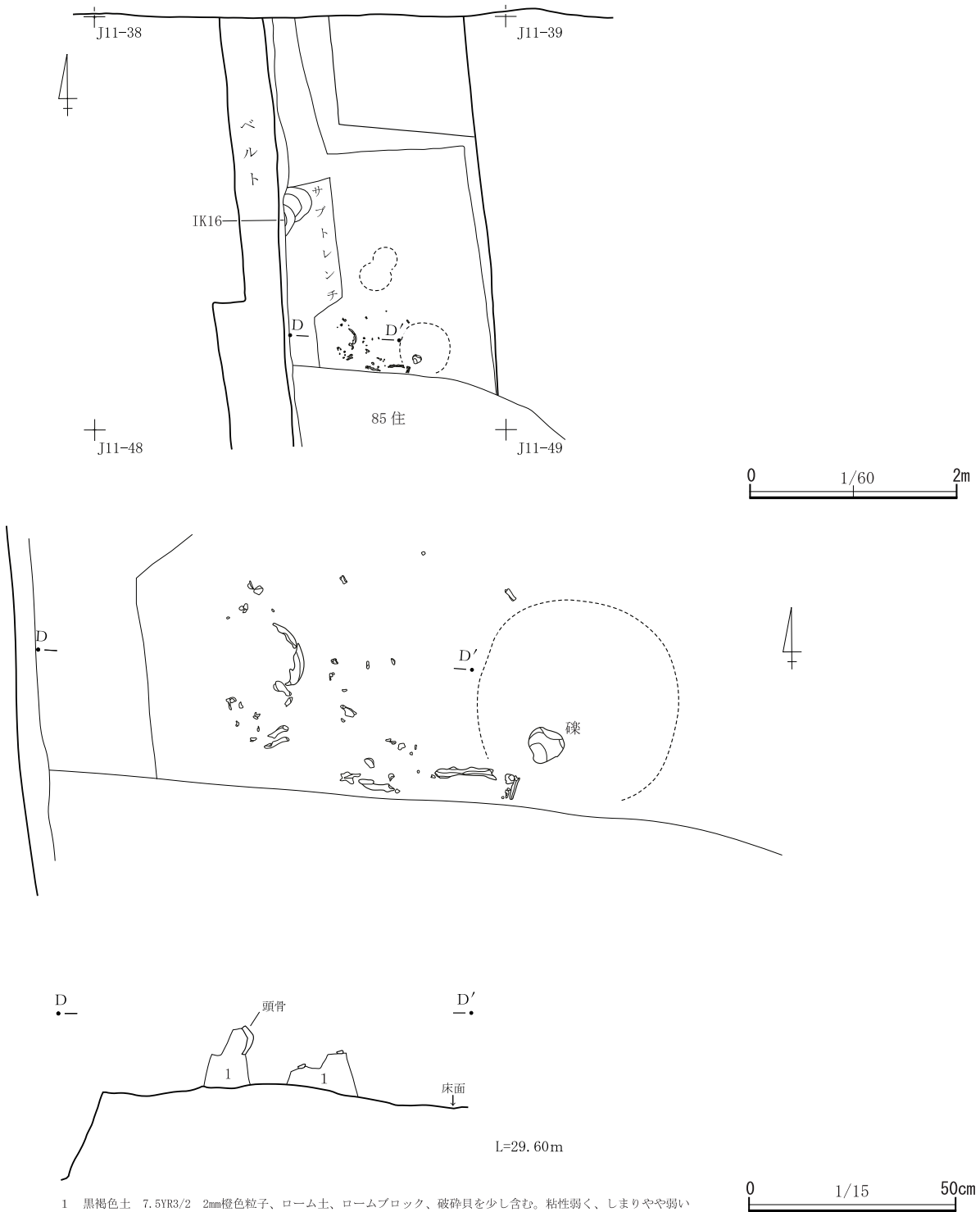
- 1 黒褐色土 7.5YR3/2 2mm橙色粒子、ローム土、ロームブロック、破砕貝を少し含む。粘性弱く、しまりやや弱い。142住覆土



- 1 黒色土 7.5YR2/1 赤褐色（橙色）粒子を少し含む。粘性やや弱く、しまり弱い。IK7覆土
- 2 混土貝層 二枚貝、イボキサゴの破砕貝を多く含む。粘性弱く、しまり弱い。IK7覆土
- 3 混土貝層 二枚貝を多く含む。粘性弱く、しまり弱い。IK7覆土
- 4 純貝層 上部にイボキサゴ、下部に二枚貝を多く含む
- 5 混貝土層 破砕貝を少し含む。粘性弱い・しまり弱い
- 6 黒褐色土 7.5YR3/2 破砕貝を少し含む。粘性あり、しまりあり。142住覆土



第17図 142号住居跡



第18図 142号住居跡 人骨出土状況

縫合は内板、外板ともに閉鎖している。頭頂部内板では、矢状縫合を挟んで左右に凹凸が確認された。凹凸の大きさは、矢状縫合に向かって右側で直径7.7mm、深さ1.9mm、左側で直径9.5mm、深さ1.3mmを測る。凹凸の形成原因は不明である。

手骨は2点で、第3基節骨Rと第3中節骨である。足骨は1点で、第1末節骨である。基節骨との関節面に骨増殖が確認された。歯牙は永久歯上顎骨1点、永久歯下顎骨1点、乳歯1点の計3点である。永久歯上顎骨はP2Rである。永久歯下顎骨は、咬耗で歯冠がほとんど消失しており同定不能だった。(千葉)

出土土器 (第80図30)

30は深鉢形土器の頸部付近の破片である。横走る沈線三本で体部と区画し、頸部は無文・体部には縄文を施文する。加曽利EⅡ式であろう。(菅谷)

143号住居跡 (第19図、図版2-4・5)

概要

J11-85グリッドに位置する。東半は調査区西壁にかかっている。炉および炉体土器のみ確認された。壁、床面、柱穴は確認できなかった。覆土の直上には縄文時代晩期の遺物を含む黒色土(遺物包含層)が存在しており、黒色土直下の本住居跡周囲の地山には漸移層・Ⅲ層(ソフトローム)はなかった。晩期の遺物包含層形成時かそれに先立つ時期に、削平を受けたものと考えられる。

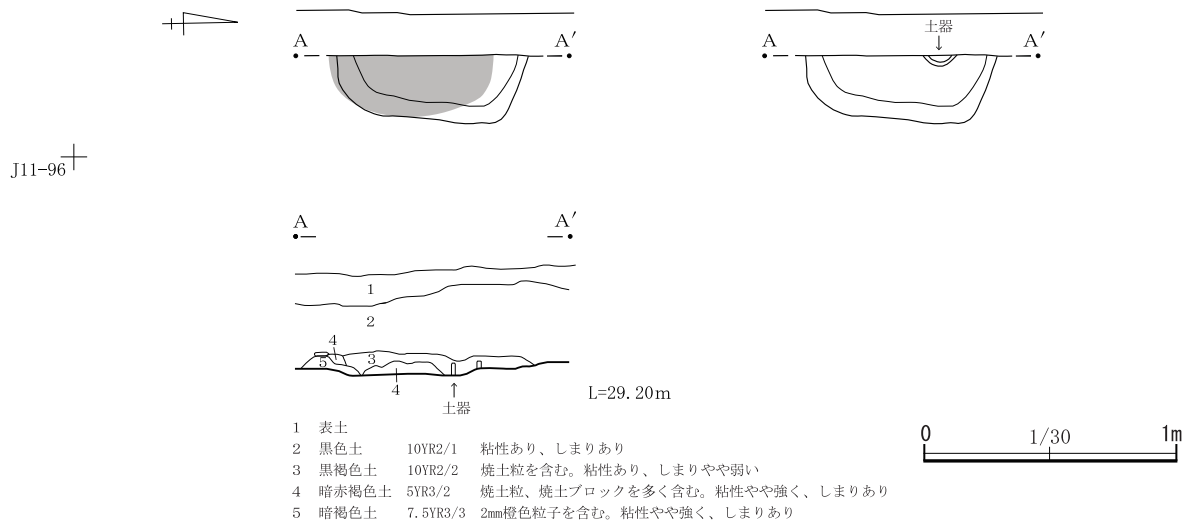
炉跡

長軸77cm、幅27cmが調査区内に存在していた。隅丸長方形ないし楕円形をなすと思われる。炉の覆土は上部が黒褐色、下部が焼土を含み、暗赤褐色を呈していた。炉跡の掘り込みの北寄りの位置に、底部を欠く炉体土器が正位に埋設されていた。(松田)

出土土器 (第79図19)

深鉢形土器の体上部付近の破片である。半截した管状施文具を用いた並行沈線を縦位に密に施文し、横走る沈線二本の間に挟りとしたような円形刺突文を充填している。いわゆる連弧文土器であり、加曽利EⅡ式~加曽利EⅢ式期といった編年的位置で考えられる。(菅谷)

143号住居 炉



第19図 143号住居跡 炉

141号住居跡（第20・21図、図版3）

概要

K11-60・61、K11-70・71、K11-80・81グリッドに位置する。西端は140号住居跡に切られ、東側は調査区東壁より外に出ている。第2次調査のIVトレンチ4区の平面図の表現によると、住居跡の可能性があるため、『総括報告書』では未報告遺構6として記載している。本住居跡は黒色土下部まで確認面を下げた段階でプランの確認はできたが、壁は明瞭ではなく、プランはわかりにくかった。直径8mほどの円形プランを想定している。壁は不明瞭であったため、覆土の掘削は南東部の調査区壁際に幅1mのサブトレンチを掘るに留めた。

壁・床面・柱穴

壁は不明瞭であった。床面は南東部のサブトレンチ内において確認した硬化面が該当すると思われる。確認面から床面までの深さは約20cmである。旧Vトレンチ4区内も掘削下底面は硬くなっていたが、第2次調査時に踏み固められた可能性があり、床面の硬化面とは断定できなかった。柱穴はサブトレンチ内で2個掘削した。直径は径30cm程であった。この他柱穴は第2次調査時にIVトレンチ4区において掘削されていた。本住居跡のプラン内の北側（K11-61・71グリッド）に柱穴や土坑状の掘り込みが確認されたが、これらは本住居跡よりも新しいものである。

炉跡

住居跡の中央付近、旧IVトレンチ内に長方形の掘り込みがある。炉跡の可能性も考えたが、焼土は検出されず、炉跡は確認できなかった。

覆土

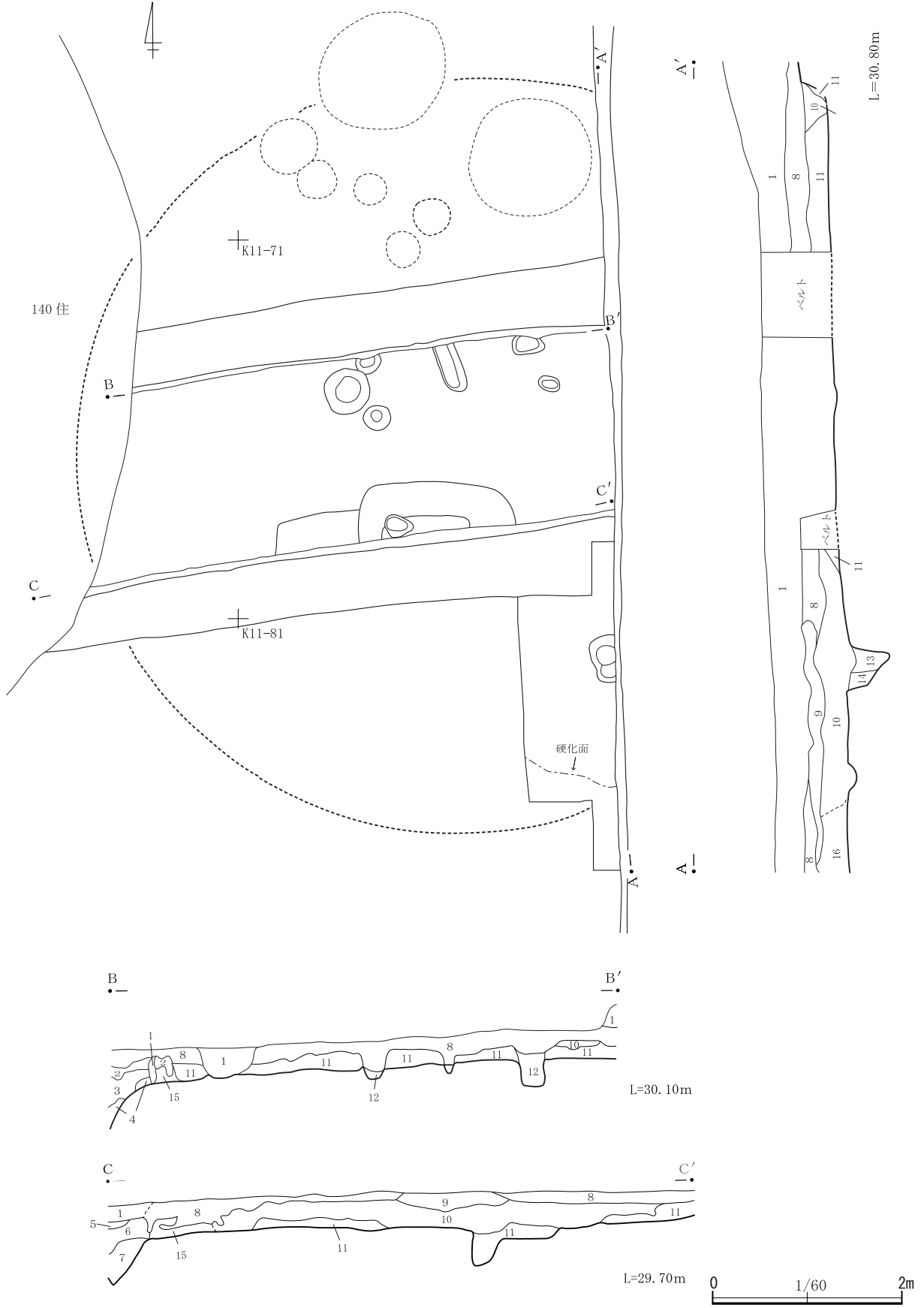
覆土上層にぶい黄褐色土が存在し、その範囲は表土直下でも確認された（第13図 黄褐色土上位面）。それ以外の部分は基本的には黒色土からなっていた。また一部漆黒色をなす部分も存在した。（松田）

出土土器（第79図1～12）

1～5は包含層の遺物として取り上げたが本跡範囲と確認できたもの。6～12は遺構として調査した範囲で出土したものである。点数が少ないため個別の記載にとどめる。

1は台付の坏状の土器で、坏部の1/2が遺存する。内面に口唇と同じ高さの稜が全周し、間に隆線で縁取った渦巻文が、外面は口縁下に全周する沈線から垂下するように渦巻文があって、遺存状態から判断して四単位配置されるのだろう。口唇上には細かな刻文が全周するようだ。側面の渦巻文の間と内面の稜と口唇の間に焼成前の穿孔があり、おそらくそれぞれ二単位を向かい合わせに配列したと推定する。2は口唇上に二個一対の突起をつける鉢形の土器で、右下がりの平行沈線を全体に浅く施文した上に互連弧文を雑に描いている。なお断面に表現できていないが、突起間の口縁からやや下に円孔がある。3は平縁の深鉢形で、口頸部に横連弧線文と互連弧文をめぐらせた充填縄文がある。4は低平な突起を持つ鉢形土器で、突起から垂下する隆帯が頸部で左右に分かれ、指幅ほどの挟りを加えている。口頸部に三叉文と弧状の沈線文があり縄文を充填する。5は体上部が内湾する器形で広口壺となりそうだ。充填縄文の間に三叉文がある。6はやや深めの鉢形だろうか。7は口縁が内傾する深鉢形土器。8は無文の深鉢形土器で、口縁部の薄さは製塩土器を思わせる。9は大波状口縁深鉢形土器で口縁部の隆起帯縄文が平坦だが、直下の無文部との段差が明確である。破片右端に三角形の端のような沈線文様の一部が見えるが、どのような文様となるか判断できない。10は深鉢もしくは鉢形の土器か。内面を見る限り破片下側ですぐ屈曲することはないようだ。11は平縁の鉢形土器で口縁下に直線的な三叉文があり薄い器壁だが、装飾は沈線のみで縄文を使用しない。12は口縁が外反する平縁の深鉢形土器と思われるが全体の構成はよくわからない。

141号住



第 20 図 141 号住居跡 (1)

141 号住

1	表土、根痕		
2	黒黄中間層		焼土粒子を僅かに含む。粘性やや弱く、しまりやや強い
3	黄褐色土		1mm前後炭化物粒子を少し、焼土粒子を僅かに含む。粘性やや弱く、しまり強い(140住覆土)
4	暗褐色土		粘性あり、しまりあり (140住覆土)
5	黒褐色土	7.5YR3/1	1~2mm焼土ブロック、褐色土ブロックを疎らに含む。粘性やや弱く、しまりややあり (140住覆土)
6	黄褐色土	10YR8/8	1mm前後焼土、ローム粒子を疎らに含む。粘性やや弱く、しまり強い (140住覆土)
7	黒褐色土	10YR3/2	1~3mm焼土粒子、1~2mmローム粒子を含む。粘性やや弱く、しまり強い (140住覆土)
8	黒色土	10YR2/1	粘性あり、しまりあり
9	にぶい黄褐色土	10YR4/3~10YR3/3	粘性あり、しまりあり
10	暗褐色土	7.5YR3/3	粘性やや強く、しまりあり
11	暗褐色土	7.5YR3/4	ローム土、ロームブロックをやや多く含む。粘性あり、しまり強い
12	黒褐色土	7.5YR3/2	ローム土を含む。粘性やや強く、しまりやや弱い
13	黒褐色土	7.5YR3/2	ローム土を少し含む。粘性やや強く、しまりやや弱い
14	暗褐色土	7.5YR3/3	ロームブロックを少し含む。粘性あり、しまりやや弱い
15	褐色土~暗褐色土	10YR4/4~10YR3/4	粘性あり、しまりやや強い
16	褐色土	7.5YR4/3~7.5YR3/3	粘性やや強く、しまり弱い

第21図 141号住居跡(2)

7が85号住居跡や140号住居跡覆土下層の第6類に類似するが、口縁部が肥厚せず外面の装飾も条線とは言い難い。10は同じく第2類に類似するが、時期を限定するのは難しい。8・12も時期判断が困難であるし、1も時期比定に用いるには特異な土器である。2・3の崩れた互連弧文の土器と4・5・11の三叉文を持つ土器を、時期を考える材料と限定したうえで、本跡は安行3a式期に廃絶したと結論する。(菅谷)

85号住居跡(第22~26図、図版4・5)

概要

J11-37~39・47~49・57~58グリッドにかけて位置する。142号住居跡・171号土坑・IK7と重複し、周囲には他の遺構もしくは縄文時代の盛土の可能性のある土層堆積があり、そのすべてを切っている。140号住居跡とはおよそ3m離れている。北東から南西への長軸7m×短軸6.3m、確認面から床面まで80cmの規模を持ち、炉跡は2基確認した。調査時の名称はIK2で遺物への注記も同様である。

第2次調査時の経緯・所見と第14次調査に先立つ課題

85号住居跡は第2次調査Vトレンチの旧14-66グリッド(以下旧Vトレンチの旧グリッドは南北座標のみ表記する)南半~旧17グリッド北半にかけて検出していた。第2次調査の班長日誌(以下日誌と記述する)によれば、昭和39(1964)年9月8日・9日に早稲田大学班が表土除去を行い、同10月16日~24日にかけて調査している。85号住居跡の覆土上部と思える「暗褐色土」が旧14グリッドでかなり厚く堆積しているとの記述や、「14グリッドからの傾斜面」に対して遺構と疑う所見や、旧17グリッドで「暗褐色土」が「黒褐色土」に落ち込む様子を遺構と疑う所見があるが、各所見を総合して一つの住居跡とする理解には至っていないように読み取れる。第2次調査ではトレンチ内を2m四方のグリッドごとに掘り下げ、間に土層観察用ベルトを残した状態で調査を進めており、トレンチ壁面を通した観察が困難であったことが一因だろう。第2次調査の土層断面図は調査の担当者ではなく断面図担当の班が作成したもので、土層注記の不備なものが大半であった(当時はすべての土層断面図作成後に突合・照合をへて統一した土層注記を作成するという方法が一般的であったとの教示を受けたことがある)。旧Vトレンチの断面図にも土層の注記は無く、調査日誌にある土層の違いや落ち込みなどの記述が、土層断面図とどう対応するか正確には判らない。遺物に関して、旧16・17グリッドの「黒褐色土」から大洞B-C式1片が出土したこと、旧17グリッドの表土下75cmで「安行Ⅱ式と思われる完形土器」が押しつぶされた状態で出土し「スケッチ図を実測しただけで、土をかぶせてある」との記述があるものの、件のスケッチ図・土器共に『総括報告書』作成の過程では確認できなかった。

土層断面図原図に付された記述から細密沈線文で装飾した完形の小形椀形土器(『総括報告書』3-165図

238、本書第33図115に再掲)が本跡出土と確認でき、「姥山Ⅱ式」期と想定したが、調査日誌には先述した完形土器を含め安行2式や安行3a式が出土している記述が多い。第2次調査の行われた1960年台前半頃は、現在では安行3a式や3b式と扱っている三角形区画文を有する大波状口縁深鉢形土器を安行2式とする認識が一般的であったので、実際にどのような安行系土器が出土するのか・大洞B-C式は伴出と捉えられるかの確認が、本跡調査に際して事前に設定した主要な目的である。加えて加曽利貝塚では数少ない縄文時代晩期の竪穴住居跡の可能性が極めて高いと思われたことから、住居跡としての時期の確定と、いかなる形状の住居跡であるかの確認も目的として調査に臨んだ。

調査経過

平成29(2017)年10月12日、調査区内の旧Vトレンチ4区の調査を開始。貝殻を多く含んだ埋戻し土を20cm前後除去した段階で、貝殻を含まず攪乱を受けていない暗褐色土や黄褐色土を確認し、このトレンチの大半では今回の表土除去面から20~40cm程しか掘り下げていないこと、第2次調査の土層断面はトレンチ西壁に幅50cm程のサブトレンチを深掘りして作成したこと、グリッド間の土層観察用ベルトの多くを崩さないまま埋め戻したことを確認した。旧グリッド15・16間のベルトがもっとも遺存が良く、85号住居跡の中央付近に当たるので、延長して東西方向の土層断面C-C'に、Vトレンチ西壁を南北方向の土層断面A-A'として利用することにし、両断面で住居跡全体を四分割して北東側起点に1~4区に区画して調査を進めることにした。

85号住居跡付近のトレンチ掘削は東が高く西が低い掘りかけの状態、未掘の土層上面も多少凹凸があって露出するには注意を要した。C-C'に利用した以外のグリッド間ベルトは上部が崩落していたので、調査の進展に従って除去した。

以下のグリッド表記は新グリッドのものである。J11-38グリッド北半では貝層を露出した状態で掘削を止めているのでJ11-48グリッド以南に比べてもトレンチ底面は更に20cmほど高い位置であり、第2次調査時に取り上げを行わなかった人骨頭骨が残されていた。85号住居跡に伴う晩期人骨とされていたが、住居跡に伴うか疑問を感じる位置関係であったためいったん養生し、住居跡北壁の確定を優先した。第2次調査のサブトレンチは、南北とも本跡の壁を掘り抜いていて、南側では壁の立ち上がりをはっきりと判断できたが、北側は明瞭でなく別遺構(後述の142号住居跡)との重複も懸念されたためである。また、旧Vトレンチの西側に範囲が広がることが確実であったため、周囲の包含層の調査も同時に進行して本跡の平面確認可能な面を追求した。平成29(2017)年度は1区・2区の壁と床面をほぼ露出し、3区・4区のプランが凡そ把握できた状況で終了し、調査面を養生した上で一旦埋め戻した。平成30(2018)年度早々に、旧Vトレンチ西側の本跡範囲は色調の明るい覆土3層・4層の広がりによっておおよその範囲を捉えられたが、3区・4区の大半で今回調査を実施しなかった暗褐色を基調とする土層範囲と重複していることから、壁際に覆土を厚く残すよう心掛け、床面付近での壁の立ち上がり、B-B'・C-C'断面で壁を把握することを試みながら、3区・4区の調査を進めた。

壁・床面・炉跡・柱穴・出入口

壁 先述のように壁外土層の大半が遺構覆土か盛土であったので、ローム層の壁を確認できたのは南壁の一部に過ぎない。壁際の覆土に本跡が切った遺構や盛土からの崩落土が多く含まれたためか覆土と壁の区別は土色では解りづらくしまりと固さを頼りにした。特に東側のIK7覆土もしまりが弱いと検出は困難で、C-C'セクションに見るように壁の立ち上がりもなだらかであるから、本跡埋没の過程で本来の壁面の崩落があったと思われる。

床面 覆土に比べてわずかに固い程度の範囲が大半で、踏みしまりは顕著でない。土層断面の21層は比

較的強く締まっていたので貼床と思われるが、面的な広がり把握できなかったため、東側は旧サブトレンチの範囲・西側は保存したセクションベルトの範囲に収まるのだろう。

炉跡 中央南西寄りに近接した2基を検出したが、切開しておらず構築の前後は確認していない。

柱穴 多数検出しているが、半截にとどめているため深さが確実なのはA-A'セクションにかかる2本のみ。このうちP11は床面から80cm程の深さがあり、主柱穴の可能性はある。

出入口 平面図で3区南壁から突出するよう表現している部分は、壁面と外側に広がる暗褐色の土壌を認めた範囲で出入口の可能性を考え半截したが、底面に踏みしまりは無く平坦でもないため小規模な風倒木痕の可能性が高いと判断した。炉跡の偏りと房総地域の縄文時代晩期住居跡の類例からすれば、南西から南側の壁際に出入口施設が存在する可能性が高いが、土層断面の保存を優先したため追及は不十分で、確定にいたらなかった。

覆土の特徴と遺物の出土状況

覆土は三つの観察面(A・B面は同じベルトの表裏でB面は反転表示)で38の層に分層した。床面を覆う15~21層・26層・35層・36層はほぼ水平な堆積で薄く床面を覆い、焼土や炭化物が目立ち全体に粘性が強くしまりのない堆積である。南壁から炉跡付近まで斜めに堆積する9~13層以上は、南から北に傾斜した堆積を示している。

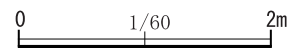
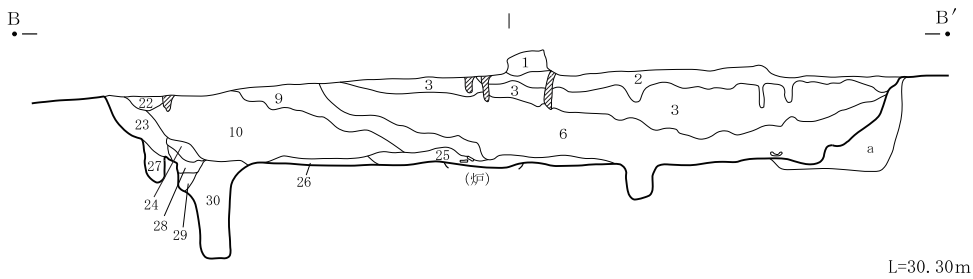
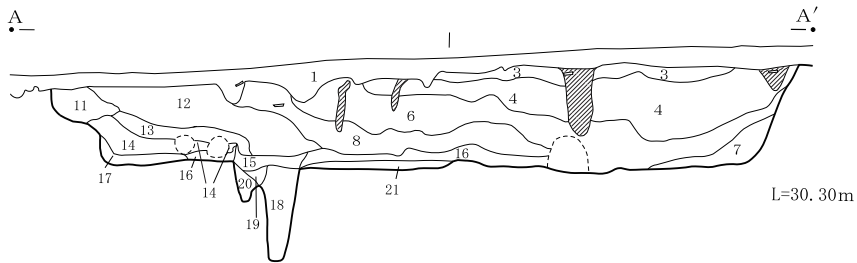
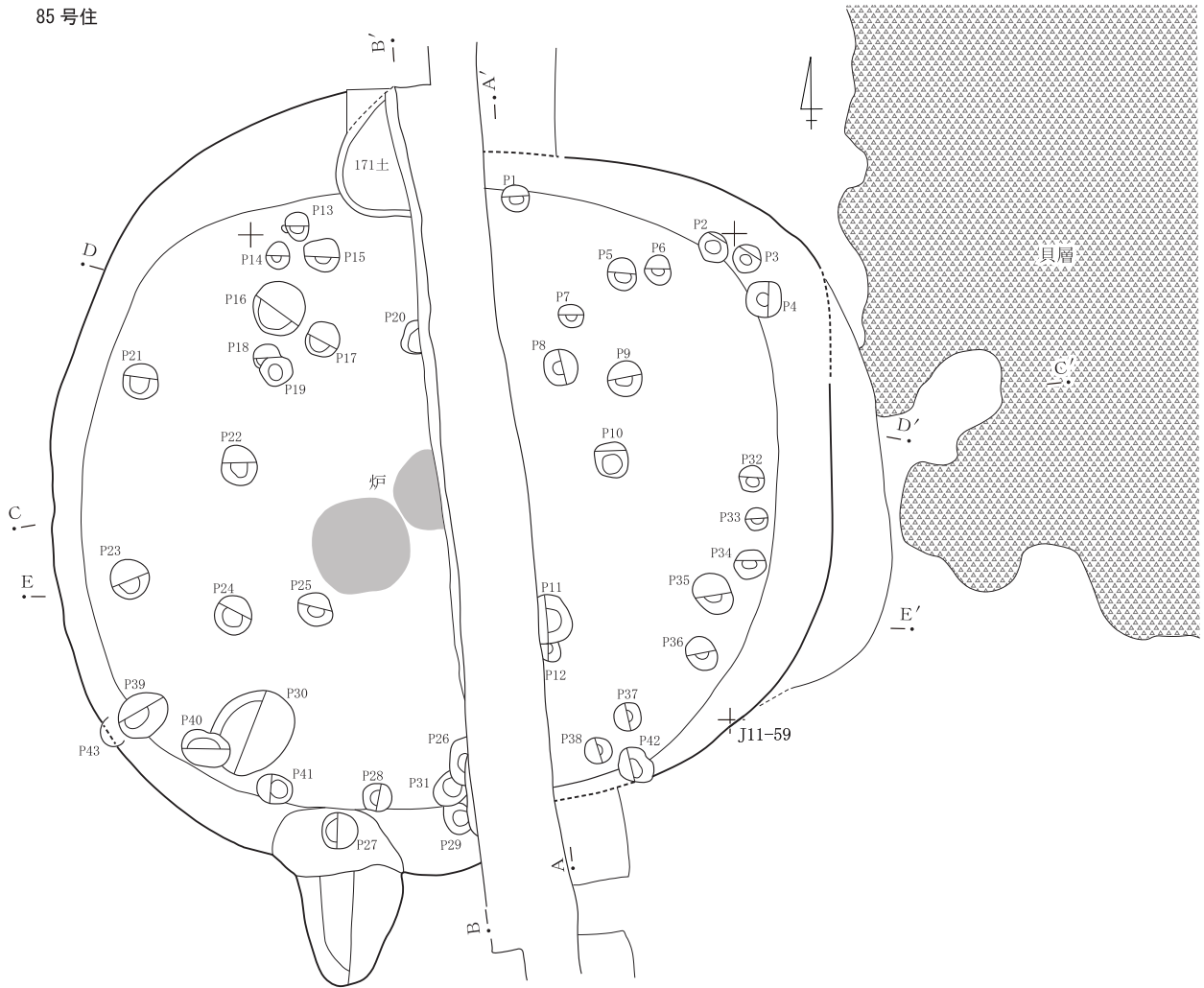
1区・4区北壁際の覆土では焼獣骨が多く含まれ、3区下層の南壁際にも若干見られた。1区・2区の東壁際には黒褐色のしまりのない土(37層)が西に傾斜して堆積していて、ここでは小片だが安行1式土器の出土が目立っていた。後述のようにこの付近の壁はIK7覆土を切って構築しており、37層は東壁からの崩落土が主体と思われる。

第33図115に掲載した完形の細密沈線文土器は第2次調査で出土したもので、『報告Ⅱ』では出土地点や層位・帰属遺構についての記載に混乱が見られるが、調査日誌の記述と旧土層断面のメモから本跡出土で、A-A'セクションに破線で示した三ヶ所の断面の挟りの内、14層にかかる小規模な二つのうちどちらかが出土位置である。もう一方は無文の小形土器とのことだが個体を特定できなかった。調査日誌に土を被せて埋め戻したと記述された「安行Ⅱ式」はサブトレンチ底面で黒褐色土を被せた状態で検出した第27図12が該当すると思われるが、完形ではなかった。A-A'セクション22層に乗った状態でサブトレンチ内に検出し、上に被った貝殻小片混じりの土のしまりは弱かった。第29図42は2次被熱が著しく脆い状態になった土器で、作図を見送り写真提示に止めた(図版33-216)は、表面が発砲し変形している。共に1区の4層から出土している。第37図209の注口土器はB-B'セクションの中程、9層・10層付近に接して出土した。第36図193の「姥山Ⅱ式」はB-B'のセクション面を調整する際に3区の1層から検出した。なおB-B'セクションは表土下層と判明した1層除去後に作成したため、C-C'セクションとの交点を除いて1層を表現していない。190~192は本跡範囲を確認中に黒色土包含層出土として取り上げたが念のため本跡出土土器に含めて掲示したもの。194は3区の確認面から30cmほど下の覆土中での出土である。他の土器は覆土上層から下層にかけて出土したが、特に集中する層・地点を指摘できる状況ではなかった。ただし器形復元・実測に至った個体は、6層~9層にかけて出土したものが多い。

土器以外の遺物としては、透かし状の彫去を施した耳飾1点(第131図6)が3区南壁からわずかに離れた覆土中で出土した。第14次調査で出土した同様の完形耳飾はもう1点(同図5)あり、こちらは本跡3・4区の平面確認に先行した黒色土包含層の除去中の検出だが、4区北壁直近の位置である。(菅谷)

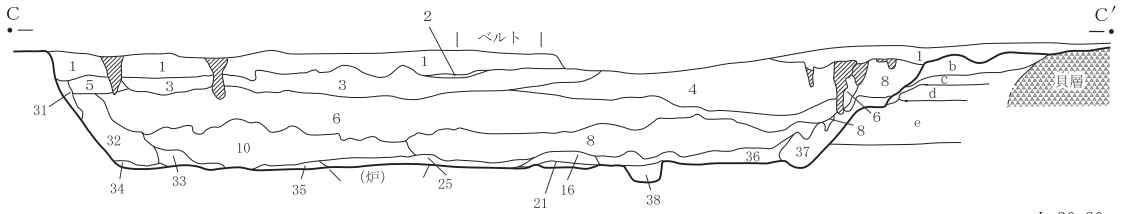
床面に近い覆土下部では、3区壁際において、炭化材がやや傾斜気味に直立して出土した(第24・25図)。壁際の柱穴(P40)の上位から出土したため、柱穴壁際の構築物としての意味をもつ可能性がある。炭化材

85 号住



第 22 图 85 号住居跡 (1)

85号住



85号住居跡

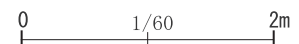
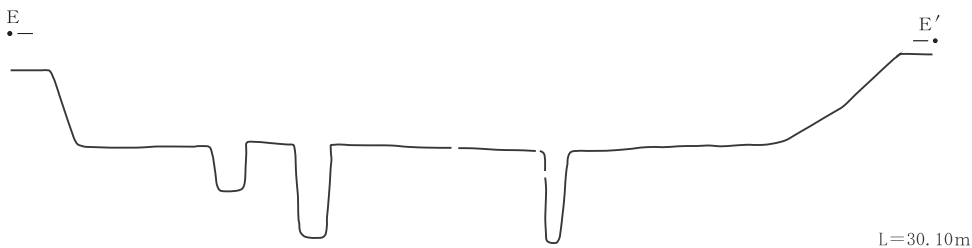
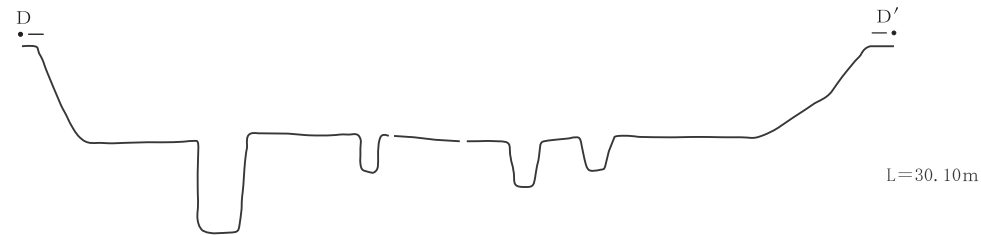
1	黒色土	10YR2/1	褐色土・焼土の小ブロック・粒子を少量含む。粘性弱く、しまりなし。表土下層
2	暗褐色土	10YR3/4	黄褐色土小ブロック・焼土小ブロック・焼獣骨を含む
3	暗褐色土	10YR3/3	焼土小ブロック・褐色土小ブロック・褐色土粒子を少量含む。粘性弱く、しまりややあり
4	明黄褐色土	10YR6/6	明黄褐色土小ブロック・焼土小ブロック・焼獣骨を含む。粘性弱く、しまりややあり
5	暗褐色土	10YR3/4	黄褐色土小ブロック・焼土小ブロックを含む
6	暗褐色土	7.5YR5/4	焼土中ブロック・黄褐色土小ブロックと粒子を含む。粘性弱く、しまりややなし
7	暗褐色土	7.5YR5/4	焼獣骨を多量、ロームブロックと粒子・赤褐色ブロックと粒子を含む。粘性弱く、しまりややなし
8	褐色土	7.5YR4/3	焼土小ブロック・黄褐色土小ブロックを多く、黄褐色土粒子をわずかに含む。しまりややあり
9	暗褐色土	10YR3/4	黄褐色土小ブロック・焼土小ブロック・焼獣骨を含む。黄褐色土粒子を少量含む
10	黄褐色土	10YR4/3	焼土小ブロック・暗褐色土粒子・炭化物粒子を含む
11	黄褐色土	10YR4/3	黄褐色土小ブロックを少量含む。粘性やや弱く、しまりややあり
12	褐色土	10YR4/4	赤褐色小ブロック・黄褐色土小ブロックを含む。炭化物粒子を少量含む
13	黄褐色土	10YR4/3	黄褐色土小ブロックをやや多く含む。粘性やや弱く、しまりややあり
14	黒褐色土	10YR2/2	
15	黒色土	10YR2/1	黄褐色土小ブロックを含む。粘性強く、しまりなし
16	黒色土	10YR1.7/1	黄褐色土小ブロックを多く含む。粘性強く、しまりなし
17	暗褐色土	10YR3/4	ロームブロック・粒子を多く含む。粘性強く、しまりあり
18	褐色土	10YR4/4	
19	褐色土	10YR4/4	ロームブロックをやや多く含む。粘性強く、しまりなし
20	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒子を含む。粘性強く、しまりなし
21	ローム	7.5YR3/2	ブロック状 黒色土を含む
22	黒褐色土		焼獣骨を含む。
23	暗褐色土		黄褐色土中ブロック・同小ブロック・焼獣骨を含む。焼土小ブロックを少量含む
24	暗褐色土		焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を多く含む。焼獣骨を含む
25	黒褐色土		焼土小ブロックを多く含む。焼獣骨を含む
26	暗褐色土		黄褐色土小ブロック・粒子を多く含む
27	暗褐色土		黄褐色土粒子を微量含む
28	暗褐色土		焼土小ブロック・炭化物小ブロックを含む
29	暗褐色土		黄褐色土小ブロック・粒子を含む
30	暗褐色土		黄褐色土小ブロック・焼土小ブロックを含む
31	暗褐色土		黄褐色土粒子を多く含む
32	黒褐色土		焼土小ブロック・黄褐色土小ブロックを含む。しまりあり
33	暗褐色土		ローム中ブロック・ローム粒子・焼土小ブロックを多く、炭化物を僅かに含む。粘性やや弱く、しまりややあり
34	暗褐色土		焼土小ブロック・粒子を多量、ローム小ブロックを少量含む。しまりややあり
35	暗褐色土		黄褐色土小ブロックを含む
36	暗褐色土		焼土小ブロック・黄褐色土小ブロックを含む。しまりややあり
37	黒褐色土	10YR3/4	ローム中ブロック・ローム粒子・焼土小ブロックを多く、炭化物を僅かに含む。粘性やや弱く、しまりややあり
38	褐色土	10YR1.7/1 7.5YR4/4	焼土小ブロック・焼土粒子・黄褐色土粒子を多く含む。褐色土粒子をマールクーキ状に含む。粘性やや強く、しまりあり 赤褐色粒子・ローム粒子を含む。粘性強く、しまりあり

171号土坑

a 暗褐色土 しまりややあり

IK7

b	褐色土	7.5YR4/3	焼土粒子をわずかに含む
c	暗褐色土	7.5YR3/3	
d	混土貝層		黒色土 (10YR2/1)
e	黒色土	10YR2/1	焼土ブロック (1~2mm) を少し含む。粘性やや弱く、しまりややなし



第23図 85号住居跡(2)

第9表 85号住居跡柱穴観察表

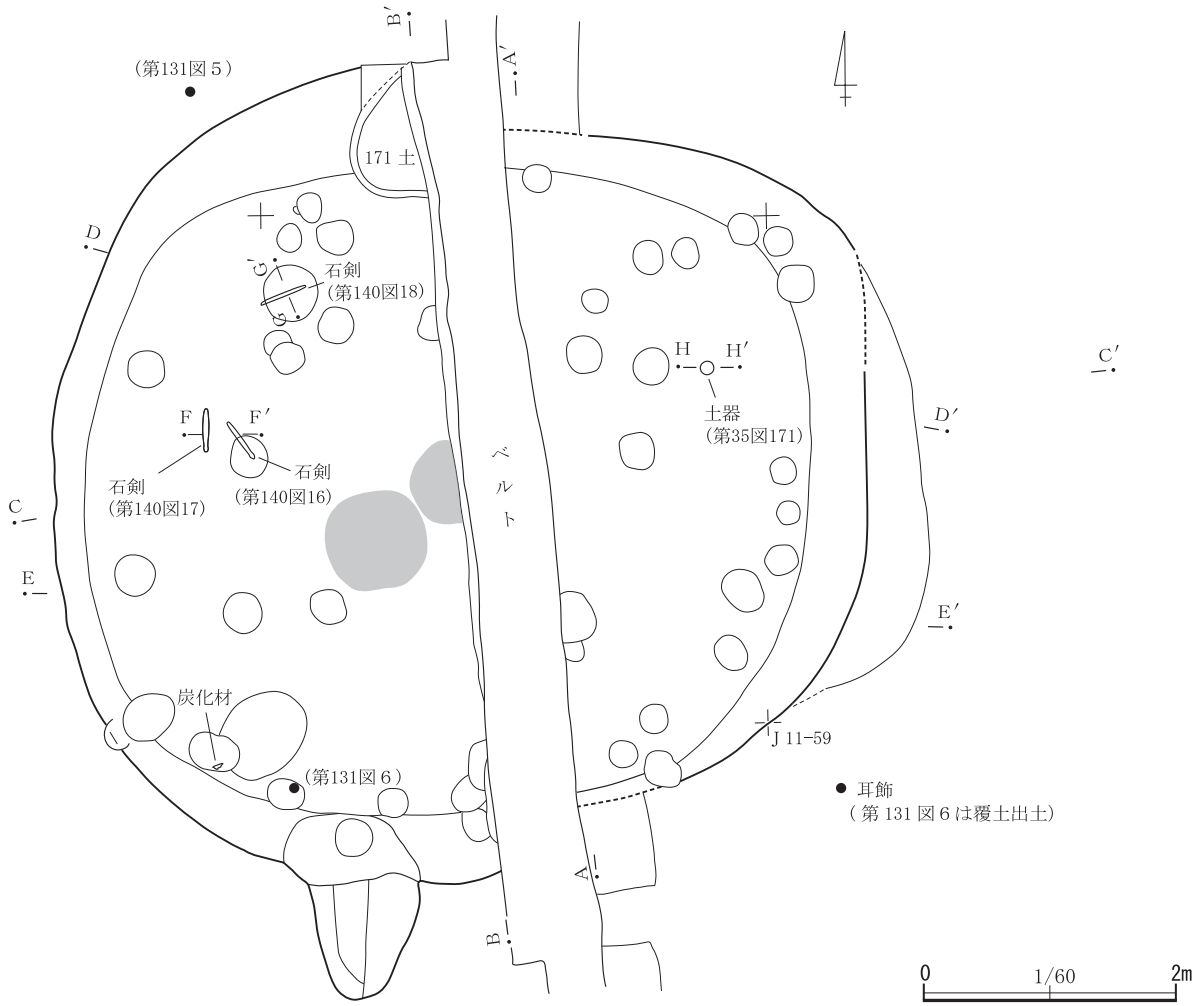
	長径	短径	深さ	覆土		備考
P 1	23	22	27	暗褐色土	7.5YR3/4	1～2mm赤褐色粒子を少し含む。粘性あり、しまりあり。
P 2	25	24	10	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム土、貝殻を少し含む。粘性あり、しまり弱い。
P 3	24	24	44	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム土、貝殻を少し含む。粘性あり、しまり弱い。
P 4	29	30	21	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム土、貝殻を少し含む。粘性あり、しまり弱い。
P 5	27	24	18	暗褐色土	7.5YR3/4	1～2mm赤褐色粒子を少し含む。ローム土を少し含む。粘性あり、しまりあり。
P 6	25	22	17	暗褐色土	7.5YR3/4	1～2mm赤褐色粒子を少し含む。ローム土を少し含む。粘性あり、しまりあり。
P 7	22	20	19	暗褐色土	7.5YR3/4	ローム土を少し含む。粘性あり、しまり弱い。
P 8	30	28	55	暗褐色土	7.5YR3/4	ローム土を含む。粘性あり、しまりあり。
P 9	30	29	26	暗褐色土	7.5YR3/4	ローム土を少し含む。粘性あり、しまりやや弱い。
P10	32	30	15	褐色土	7.5YR4/4	1～2mm赤褐色粒子を含む。粘性あり、しまりあり。
P11	41	-	73	褐色土	10YR4/4	6層に類似するが赤褐色粒子、炭化物を含まない
P12	19	-	30	暗褐色土	10YR3/4	ローム土、ロームブロックを含む。粘性あり、しまり弱い。
P13	24	19	20	褐色土	7.5YR4/3	ローム土を含む。粘性あり、しまりあり。
P14	23	20	26	褐色土	7.5YR4/3	ローム土を含む。粘性あり、しまりあり。
P15	31	29	44	暗褐色土	7.5YR3/4	粘性あり、しまりやや弱い。
P16	46	43	74	暗褐色土	7.5YR3/4	ローム土、ロームブロックを少し含む。粘性あり、しまりあり。
P17	31	28	30	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム土を少し含む。粘性あり、しまりあり。
P18	23	-	22	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム土を少し含む。粘性あり、しまりあり。
P19	28	25	31	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム土を少し含む。粘性あり、しまりあり。
P20	28	-	29	暗褐色土	7.5YR3/4	1～2mm黄褐色土ブロック・粒子、1～2mm焼土ブロックを多く含む。50mm前後ロームブロックを僅かに、5mm前後炭化物、焼獣骨を含む
P21	31	30	29	暗褐色土	7.5YR3/4	ローム土を含む。粘性あり、しまりやや強い。
P22	34	31	67	暗褐色土	7.5YR3/3	1～2mm赤褐色粒子を微量含む。ローム土少し、骨片少し含む。粘性あり、しまり弱い。
P23	33	33	49	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム土少し、炭化物微量含む。粘性あり、しまりやや弱い。
P24	33	31	60	暗褐色土	7.5YR3/3	1～2mm赤褐色粒子を微量含む。ローム土、ロームブロックを少し含む。
P25	32	28	73	暗褐色土	7.5YR3/3	1～2mm赤褐色粒子を微量含む。ローム土、ロームブロックを少し含む。
P26	40	-	65	暗褐色土	7.5YR3/3	1～2mm黄褐色土ブロック、2～4mm焼土ブロックを含む
P27	31	30	26	暗褐色土	7.5YR3/3	1～2mm赤褐色粒子を微量含む。ローム土を少し含む。粘性あり、しまりやや弱い。
P28	26	25	27	暗褐色土	10YR3/3	1～2mm赤褐色粒子を少し含む。ローム土を少し含む。粘性あり、しまり弱い。
P29	29	24	40	暗褐色土	10YR3/4	黄褐色粒子を疎らに含む
P30	75	61	19	暗褐色土	10YR3/4	粘性あり、しまりあり。
P31	29	-	19	暗褐色土	7.5YR3/3	1～2mm黄褐色土ブロック・粒子を含む
P32	22	22	21	暗褐色土	7.5YR3/4	ローム土を含む。粘性あり、しまりやや弱い。
P33	20	19	19	暗褐色土	7.5YR3/4	ローム土を含む。粘性あり、しまりやや弱い。
P34	27	24	48	暗褐色土	7.5YR3/4	ローム土を含む。粘性あり、しまりやや弱い。
P35	38	30	24	褐色土	7.5YR4/4	ローム土をやや多く含む。粘性あり、しまりあり。
P36	30	24	38	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム土を少し含む。粘性あり、しまりやや弱い。
P37	25	24	15	褐色土	7.5YR4/3	ローム土を含む。粘性あり、しまりあり。
P38	23	22	19	褐色土	7.5YR4/3	ローム土を含む。粘性あり、しまりあり。
P39	44	35	23	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム土、ロームブロックをやや多く含む。粘性あり、しまりあり。
P40	41	29	27	暗褐色土	7.5YR3/4	ロームブロックを少し含む。粘性あり、しまりやや弱い。
P41	30	25	42	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム土を少し含む。粘性あり、しまりあり。
P42	34	26	48	暗褐色土	7.5YR3/4	ローム土を含む。粘性あり、しまりあり。
P43	23	-	79	暗褐色土	7.5YR3/3	ローム土を微量含む。粘性あり、しまりあり。

の樹種は第3章第2節3、放射性炭素年代測定結果は同章第5節1に記してある。

1区の調査ベルト内、床面直上3cmの所で、無文の鉢形土器が正位の状態出土した(第26図右下)。土器の中には繊維状の白色物質を含む土壌が入っていた。蛍光X線分析および植物珪酸体分析を実施した結果、植物の灰と判明した。詳細は第3章第2節1・2に掲載した。

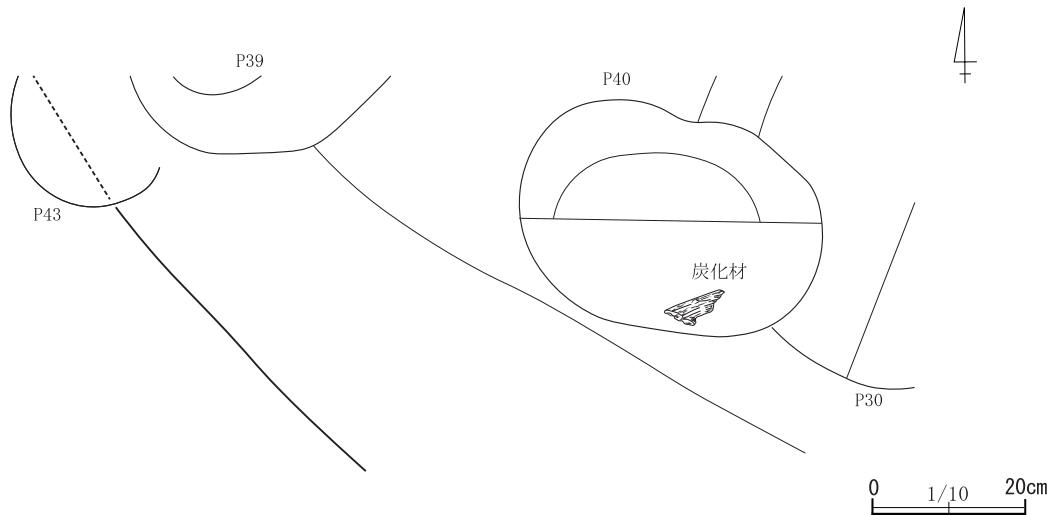
さらに4区において、床面に接するか床面直上7cmまでの間の土から、ほぼ完形の石剣3点出土した(第24・26図)。緑色片岩製の石剣2本は近接していて、頭部を共に南に向けた状態で出土した。石剣は被熱が認められる。石剣の南西隣には発泡物質がまとまって出土した(第26図上)。一方頁岩製の石剣1本は約1.1m北東から出土した。床面直上約5cmの所に存在した。3本の石剣と発泡物質を含む範囲の土壌には焼土が含まれていた。(松田)

85号住



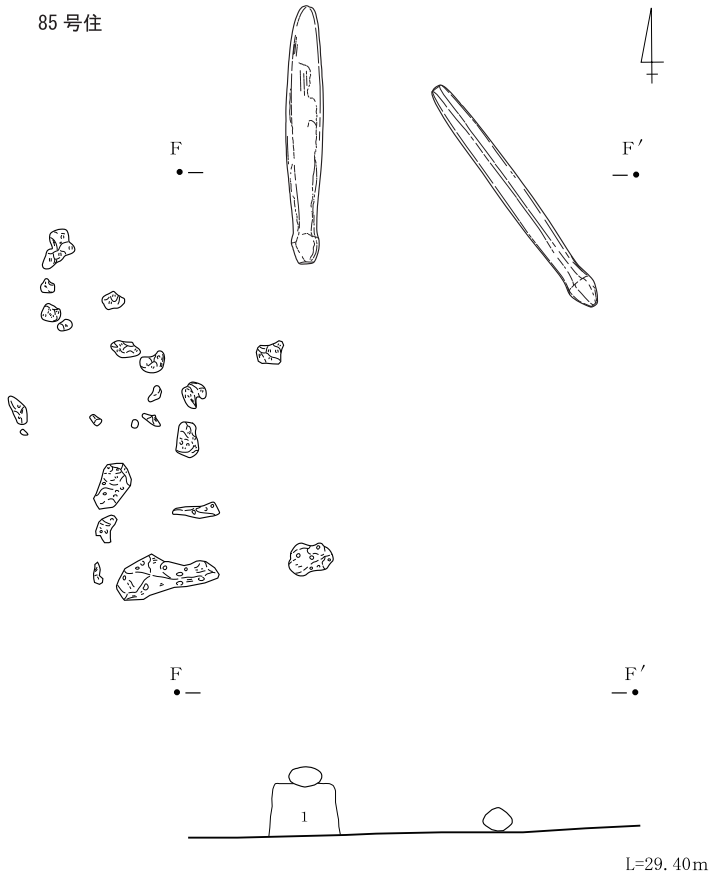
第24図 85号住居跡 遺物出土状況(1)

85号住

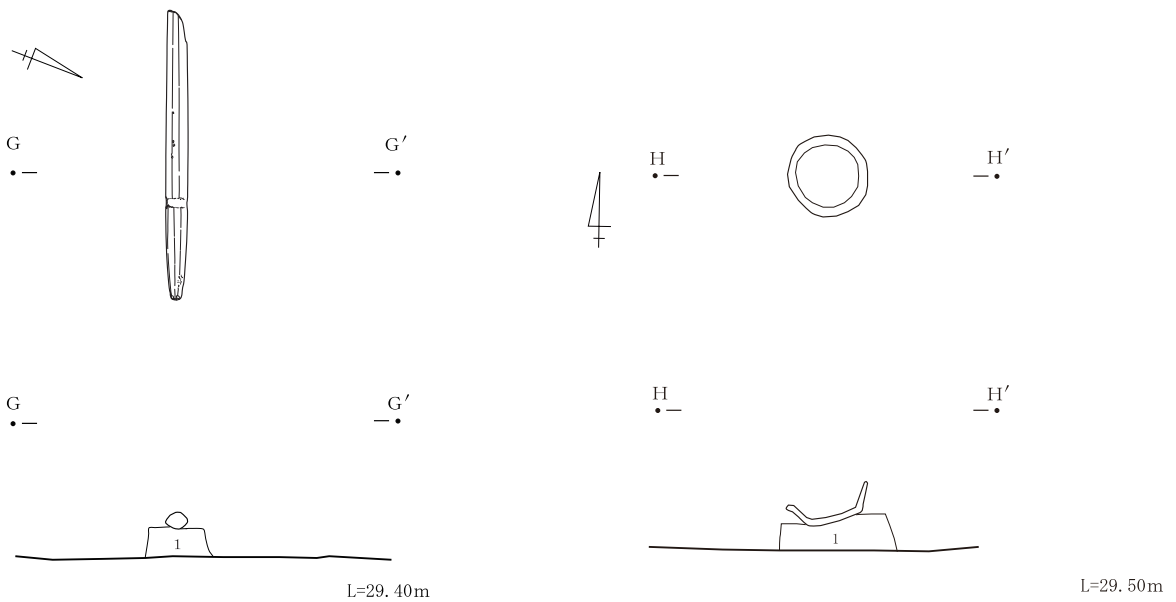


第25図 85号住居跡 遺物出土状況(2)

85号住

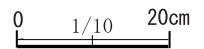


1 黒褐色土 1~2mm焼土ブロック、2~3mm黄褐色土ブロックを含む。しまり強い



1 黒褐色土 1~2mm焼土ブロック、2~3mm黄褐色土ブロックを含む。しまり強い

1 暗褐色土 1~2mm焼土ブロック・粒子を多く、3~10mmロームブロックを少し含む。しまりやや強い



第26図 85号住居跡 遺物出土状況(3)

出土土器（第27～37図、図版20・33）

85号住居跡の出土土器は、「安行3b式」を主体的に出土したと評価する研究者が多い埼玉県さいたま市東北原遺跡2号住居跡出土土器群（山形他1985）と類似した内容である。後述の140号住居跡覆土下層出土土器は山武姥山貝塚第5層の出土土器（鈴木1963・1964）に近い内容と判断でき、安行3c式に相当するものが少なからず伴う。今回加曾利貝塚で近接して検出した85号住居跡と140号住居跡から出土した土器群の内容は、これまでの当該土器群の編年的位置づけを再検討するの必要を示すと考えるため、両住居跡出土土器群を対比しやすい分類により提示する。

第1類（第27図1～20）

充填縄文手法によって装飾を行う精製深鉢形土器で、小径な底部の砲弾形の体部を有すると想定される。口縁部・頸部・体部に三分節するA種、口頸部・体部に二分節するB種、口縁部から底部まで明確な分節がないC種、の3種に区分した。

1類A種（1）平口縁が強く外屈し、頸部は直線的に内傾、体上部は丸みを帯びて内湾する。（鈴木1964）分類の「姥山Ⅱ式h類」同様の器形である。口縁部は全面に縄文施文し、小突起の貼付の有無は判断できない。頸部は並行沈線区画内に連鎖S字入組文を描いてその上側のみ縄文充填する。

1類B種（2～8）ほぼ全体を窺える個体は三角形区画文を持つ大波状口縁の4のみだが、別に低波状口縁と思われる2があり、前者は体部上端が縮約して内湾するのに対し、後者は体部上端が内湾せずに頸部に接続する。頸部や体部の3・5～8の破片にも両者が存在するので、更に二分する。

1)(2・3・5)体上部が直立に近く外傾する頸部を接続する。3の体部装飾は互連弧充填縄文を描く上で弧線の割り付けを失敗した部分と見え、2は口縁部の弧線区画内を無文とし、胴部は横走する沈線区画がある。頸部装飾は2には無く、3は弧状の充填縄文と横走する沈線、5は連鎖S字入組文の上側に縄文施文する。部分的な情報に限られ、全体の構成は不明確である。

2)(4・6～8)突起を付した五単位の大波状口縁で頸部に三角形区画文を持つ深鉢形土器。体部の装飾は最大径付近に横帯区画を基本に充填縄文手法で施すものと推測できる。4の口頸部はほぼ直立するが、波底部は僅かに内傾・波頂部は外傾気味である。断面図に表現しきれていないが、頸部中程の内面にわずかに稜があり全周している。口縁外側は区画線が深く幅広いため明瞭ではないが、平坦面を作出した隆起帯縄文であり、頸部の三角形区画文の縄文帯もわずかに隆起している。波頂部上端は中央を窪ませて両端が尖る頭巾状で、この端部に短い粘土紐を内側から、波頂部基部は外側から巻き付けている。波頂部正面に上下二連に匙状の貼付文を加えるが、窪んだ部分に後述C種に見られるような短い抉りは無い。体部最大径付近に長円形文と横長貼付文を交互に五単位配置し、下側に横位区画線を巡らせて長円形文との間に縄文を充填する。更に間を開けてもう一本区画線を配置し、この間はミガキを加えて光沢を持つが、区画線より下は磨かずに調整痕を残している。

1類C種（9～20）分節の無い砲弾形の器形で、五単位大波状口縁の三角形区画文深鉢形土器である。突起の概形が判る資料では、上端が直線的で両端が角状になる9・11・12と、上端が曲線的で扇状の13・14の違いが際立つ。ただし9と12は同一個体の可能性が高く、13・14は明らかに同一個体である。また10の上端が遺存するのは断面に表現した狭い範囲のみで上端の左右は欠損している。誤解の無いよう付記しておく。15～20は本種の頸部から体部上半にかけての破片と考えられる。17・18・20は装飾が異なり別類型の可能性も高いが便宜的に一括した。12と13・14は波頂部以外にも異なる点がある。12の波頂部下大型貼付文はB種1)の4同様二連の匙状だが、対になる縦の抉りを加えている。13・14は半球状でこれを分割する様に縦位の沈線を加えるものである。12の三角形区画文には波頂部大型貼付文直下と要所に豚鼻貼

付文を加えるが、13・14には付していない。

第2類 (第28図21～36・39)

短い口縁部と上部が内湾する体部に分節する深鉢形土器で、広口壺状の器形である。区画内に縄文を充填する装飾を原則とする。口縁部は外傾するものから内傾するものまであり、口端に二つの小粘土塊を接して貼付した小突起を持つ例が多い。平口縁を基本とするようだが、小さな波状を呈する35もある。色調は暗赤褐色から飴色を呈し、胎土は緻密である。無文部に強いミガキを加えて光沢を持つ。(鈴木1964) 分類の「姥山Ⅱ式h類」に相当する。口縁部を厚く形成する傾向が顕著で、全体を縄文帯とするものが多いが、J字状や弧状・三叉状の沈線文様を配して部分的に縄文充填する25・32と、口縁部が隆起帯縄文化している23がある。主な装飾は体部上半に展開する。21・22は大型貼付文と長円形文を体部最大径付近に展開し21は十単位・22は五単位と復元できる。長円形文より上部の体部装飾は、21は中央が窪んだ大ぶりのボタン状貼付文と上下対向する弧線文を組み合わせるようだが、遺存範囲が少なく全体の構成が不確実である。22は連鎖S字入組文の下に弧線を三叉状に組み合わせ、上に横に長い弧線を配置すると想定するが縄文充填は無い。以下は長円形文の有無は不明だが体上部装飾に用いた文様を概観しておく。23は玉抱きの連鎖S字入組文と思われるが、遺存が少なく不明確。24は弧線を添えたステッキ状沈線文。27は丸みを帯びた三角形の区画中に三叉状の文様がある。39は三叉状沈線文を組み合わせ入組文風とするが、下側をステッキ状に長く伸ばし上方に斜沈線を補い縄文充填範囲を区画する。三叉状沈線文の入組部下には中央を窪ませた横長の大型貼付文を配し縄文を施文している。

第3類 (第36図194)

体上部に最大径を持ち内傾する口頸部を持つ平縁深鉢形土器で、口頸部の沈線区画内に刺突を充填する装飾を持つ。一点のみの出土で混入の可能性も考慮しなければならないが、140号住居跡下層のものとは充填する刺突や体上部に水平に近い斜線を連続させる点に差異がある。

第4類 (第29図42～44・46～52)

体上部に最大径を持ち、内湾もしくは内傾する口頸部を持つ砲弾形の器形の精製平縁深鉢形土器である。口頸部と体部は、器形・装飾共に区別できる一方で、内外面に明確な稜線や屈折をみせない。口縁部を安行1式以来の幅の広い隆起帯縄文、頸部に幅の狭い隆起帯縄文を横走させ、口縁部と頸部中程の間に長円形沈線文を配して一段の杵状文を構成する。頸部と体部の境界は、42は上下を区画した縄文帯、51・52は下側の区画の無い縄文帯で、体部は右下がりの弧状沈線を施文する。長円形文の隣接する口縁部に横になぞった短沈線を複数加える縦長の大型貼付文、頸部の縄文帯には扁平な豚鼻貼付文を加える。ただし44・48には加飾の無い小ぶりの貼付文を用いる。尚、46は杵状文を構成せず貼付文も異なるほか、体部は擦痕を残して弧状沈線の施文が無く、口唇部内面が肥厚するなど本類に類似しながらも異なる特徴がまとまっている。本跡が壊しているIK7覆土から混入したと思われる安行1式である。44・47も同様の疑いが残る。

第5類 (第29図53～第31図81)

口縁部が内湾・内傾する深鉢形土器で、口縁部外面に粘土紐を貼付するもの。いわゆる紐線文土器である。粘土紐は比較的厚く貼付し、下端近くに幅広の指頭押捺を連続して加えることで三角形に近い断面を示すA種が大半だが、他に紐線文の作出が異なる多様な変異を示すものがある。後者は先行する時期の同類土器の混入の可能性が高いものだが、主体となる時期の変異の可能性も否定できないことからB種として一括し提示しておく。

5類A種 (63～79・81) 弧状沈線を口縁部から体部最大径付近にかけては横に、最大径以下は斜めに施文したのちに紐線文を貼付する。体部の紐線文は比較的薄く、押捺は指を横にして粘土紐を器体に押し

付けるよう加えるので扁平な断面形状である。口縁部の紐線文が剥離した71・72を観察すると、口唇部を包むように貼付しているが、口唇中程から外にかけての貼付と見えるものもある。指頭押捺は粘土紐の下端を潰すように加えている。体部大破片の81は、沈線の施文が後述する6類B種の94に類似し、本種としては異質なものである。

尚、66は器形復元可能な大きな破片だが、紐線文の貼付や器面への条線施文は63などと異なっており、おそらく混入した安行2式であろう。体部破片の78・79なども同様に混入の可能性はある。

5類B種(53～62・80) 副文様帯を持つ粗製土器で、従来安行2式・安行3a式の紐線文系粗製土器とされてきたものである。ほとんど接合せず、80を除き大形の破片も見られない。

第6類(第31図83～第32図100)

紐線文を持たない粗製土器を一括する。器形は体上部が内傾・内湾する砲弾形で、分節なく口縁に到るのが多いが、直立に近いものもある。

6類A種(83～95) (鈴木1963・1964)分類の「姥山Ⅱ式e類」に相当する。浅い弧状沈線を最大径の上下で方向を変えて施文するものが多いが、斜沈線を乱雑に施文し特に方向を変える意識を感じない94の例もある。

6類B種(96～100) (鈴木1963・1964)分類で「築地遺跡J類」とされた無文粗製土器に相当する可能性もあるが、量も少なく器形・調整も一様ではない。

第7類(第33図106～136)

直線及び弧線を用いて区画した幾何学的な文様図形を描き、細密沈線文の充填で陰影を表出する土器。分節の無い砲弾形の器形のA種が主体である。一方で充填縄文での装飾が一般的な他の種類の、縄文を細密沈線文に置き換えたと思えるものが少数ある。本来は器形に応じた各種類の細分として示すべきだが、煩雑を避けるため便宜的に一括し個別に説明する。

7類A種(108～134) 砲弾形の器形を呈する土器で、他遺跡の事例からも規格性の高い類型と考えられるが、本跡では全体の構成を把握できる個体に恵まれていない。横走して器面を全周する沈線により口縁部・体上部・体下部の三つの施文域に区画することが本類の基本構成と考えられ、各施文域の間に帯状の無文帯を配置するのが通例であろう。体下半施文域は縦位の沈線を並行して施文するが、細い丸棒状の施文具の側面を軽く当てたように観察される。区画線や文様描線の沈線と比べ幅狭だが、同一施文具の可能性は否定できない。体上部の施文域には、縦位に区画する並行沈線を確認できる109・110・114・121・130・131・133がある一方で、115に縦位区画は無い。口縁部施文域は細密沈線文帯とするが、108のみ無文で他例が無文帯とする体上部施文域との間を細密沈線文帯にしている。器形が異なるものの第2次調査出土の115は本種の構成をよく示していると考えられるため、140号住居跡の略完形品(第58図209)とも対照しつつ概観しておく。口唇部三か所を三角形の切欠きが連続する部分とし、これに対応する位置の体上部施文域の横走沈線上に薄い粘土紐を貼付して細密沈線文と同様の施文具による細かな刻文を加える(以下「縦簾貼付文」と呼称する)。縦簾貼付文は114・130・131にも認められ、縦位沈線区画に対応している。116・117・122・132には薄く小さな豚鼻貼付文が細密沈線文帯中にある。117の拓本では解りづらいが、116同様貼付文上の口唇には刻文がある。例数が少ないが、縦位平行沈線・縦簾貼付文・豚鼻貼付文はいずれも器体全周上の位置が口唇の刻文に対応して単位性を持ち、横位区画沈線上には縦簾貼付文、細密沈線文帯中には豚鼻貼付文を用いるという使い分けを想定できる。

尚、本種には体上部と体下部の間が膨満して独立した装飾帯となる類型が存在する。加曾利貝塚の今次調査においても遺構外包含層に概形の窺える第116図92がある。体下半まで含めた構成が判明する例は管

見にないが、127・128はそうした類型の膨満部破片の可能性はある。

7類B種(106・107・135・136) 106は副文様帯系の土器のモチーフに縄文や列点文に代えて細密沈線文を用いたと思われる。口縁部の細密沈線文帯下端の沈線の下に豚鼻貼付文がある。107は1類A種の外傾する口縁部の縄文を置き換えたと思われ、補修孔を持つ。136は破片下側の内面がなぞったように窪んでおり、すぐに径の大きな底部につながると思われる。口唇に二個一対の小突起を持つが相互の間隔が不規則で単位数がはっきりしない。遺存状態を勘案すれば八あるいは十単位であろうか。円圏文・円文と弧線を組み合わせた内面文様があるが、小突起の脇から伸びた弧線の先に円圏文を配置するという規則性は窺えるものの、突起間の文様の配置の規則性を考えるには遺存部が少ない。外面底部直上には帯状区画内に互連弧文をやや雑に描いている。135は浅鉢か台付浅鉢であろう。

第8類(第32図101~105)

無文で小形の深鉢形土器。実際には単一の類型にまとめるのは困難だが、数が少ないため便宜的に一括する。101は口縁が外反、104は内傾する。105はいわゆる製塩土器に近いが色調は明褐色である。

第9類(第33図137~第35図176)

鉢形・浅鉢形の土器を一括した。台の付く可能性のある個体もあるが含めている。以下には口縁部から底部にかけての分節の有無と装飾に基づき分類し、台部は別に第10類に一括して説明する。器体の形成・装飾の有無と手法の点で変化に富んでおり、全形の判る例も限られるため、おおよその分類である点を断っておく。尚、165~169・172~176は9類の体下部から底部である。165はA種と判明するが他は不確実。168・169と底面に装飾をもつものがあると知れる。

9類A種(148~164) 体部と口縁部を分節する鉢・浅鉢形土器で、充填縄文で装飾する。外反する口縁部に沈線で文様を描き縄文を充填する148・149・151と、口縁部全面に縄文施文する150・152~162、口縁部と体部間の沈線区画がはっきりしない163・164がある。151は小突起貼付と口端の窪みで正面観を表現していると思われる。体部の装飾域の沈線文様は、雑に描いた長円形・長方形中に横走る沈線を加えたとも見えるが、中央を除く左右は弧線とステッキ状沈線の組み合わせの変形とも解釈できる。148・149は斜線かステッキ状沈線或いは弧線での区画で、縄文部と無文部の対比を見せるが、破片が小さく全体の構成は不明。150・152~162・165の体部施文域は幅の狭い縄文帯が主体だが、153は弧線区画の無文部があり、154は破片左下に弧状とステッキ状沈線と見える部分・二重弧線の端部とも見える部分がある。159は口唇にやや幅のある小突起を貼付する。163・164は同一個体であろう。外反する口縁部は曲率の緩い弧線で区画し、以下二重弧線内に縄文充填するとも思えるが、163左端の状況からより複雑な構成が予想できる。器体・装飾共に分節が不明確である。

9類B種(137~147・170・171) 底部から口縁まで分節が無いと思われるもの。基本的に平口縁だが、小突起を持つ中には波状を疑われるものがある。装飾の有無と手法で更に四分できる。

1) 充填縄文による装飾を主とするもの(140~142・144~146)

口縁部を帯状に区画し縄文を充填するが、140・141は口端との間に狭い無文部を挟む。142は円形刺突を中心とした連鎖S字入組文の連鎖部描線を三叉状とし、下側のみ縄文を充填する。144も円形刺突を中心とした連鎖S字入組文だが縄文を充填した二重線で構成し、連鎖部外側に独立した三叉文を配している。口縁内面に沈線を巡らせ、沈線と口唇の間は肥厚気味で、横に長い窪みを複数配置する。小突起の右側口唇部は欠損しており、内面に三叉文の一部とみられる描線があるから、小突起を挟んだ左右で内面装飾は異なるらしく、両端に突起を配した横幅のある波頂部があった可能性がある。145は浅い皿形の器形で小突起を持つ。口唇と直下の区画線の間隔は破片左側が広く小突起に向かって狭くなる。破片右側の縄文帯

中には円形の刺突文があり、これを巻き込むように上側沈線から続く弧線文があるが、破片左端の弧線は異なる文様になりそうである。146の破片右端には縦長の貼付文の痕跡があり、口唇の小突起はこれを挟んで対になるかもしれない。縄文帯下の弧線も貼付文を起点にしている。

2) 沈線文による装飾を持つもの (143・147)

143の表面はわずかにナデを加えた程度で成形時の凹凸が残っている。口縁下の沈線はわずかに弧を帯び、縦長の貼付文の後に施文している。色調は暗褐色。147はミガキを施しわずかに光沢を帯びる。上側の沈線は直線的だが、下側は緩い弧線を連ねたようにも見える。色調は黒褐色である。

3) 無文のもの (170・171)

170は同一個体と認めた接合しない底部と口縁部破片から想定して図上復元した。色調は暗黄褐色から暗褐色を呈し、胎土に砂粒が目立つ。内面は横方向のミガキを施しわずかに光沢があるが、二次的被熱を受けたようで砂粒が表面に突出する部分が多い。外面はケズリ調整に伴う砂粒の移動痕が顕著で、その上からナデ程度の調整は加えているようである。外面口縁下の縦長の浅い窪みの連なりが拓本から判るだろうが、窪みの中にはナデは及んでいない。口唇内面に施文具側面で丁寧に施した刻文がある。171は橙色に近い褐色で一見土師器かと思われ、疑う完形品である。床面近くで灰が主体と思われる土壌を山盛りにしたような状態で、正位で検出した。二次被熱のためか砂粒を感じる触感となっており、内外面とも光沢のあるミガキ調整を施したようだが、観察できるのは器面がわずかにくぼんだ部分に限られる。

4) 隆起帯縄文で装飾するもの (137～139)

137は口唇上に小突起を持ち、十単位と想定できる。縄文施文は突起の外面に及ぶ。部分的に顕著な二次被熱がある。138・139は口縁部の隆起帯縄文上に豚鼻貼付文がある。

第10類 台付土器台部 (第35図177～179)

全形の判明するものはない。形状は裾部が分節して末広がりとなるものに限られ、裾部は全体に縄文施文する。3点とも同一個体の可能性がある。透かしの形状を確定できる部分はないが、三叉状または「X」字状・楕円を思わせる孔縁が認められる。

第11類 異系統土器 (第37図196～215)

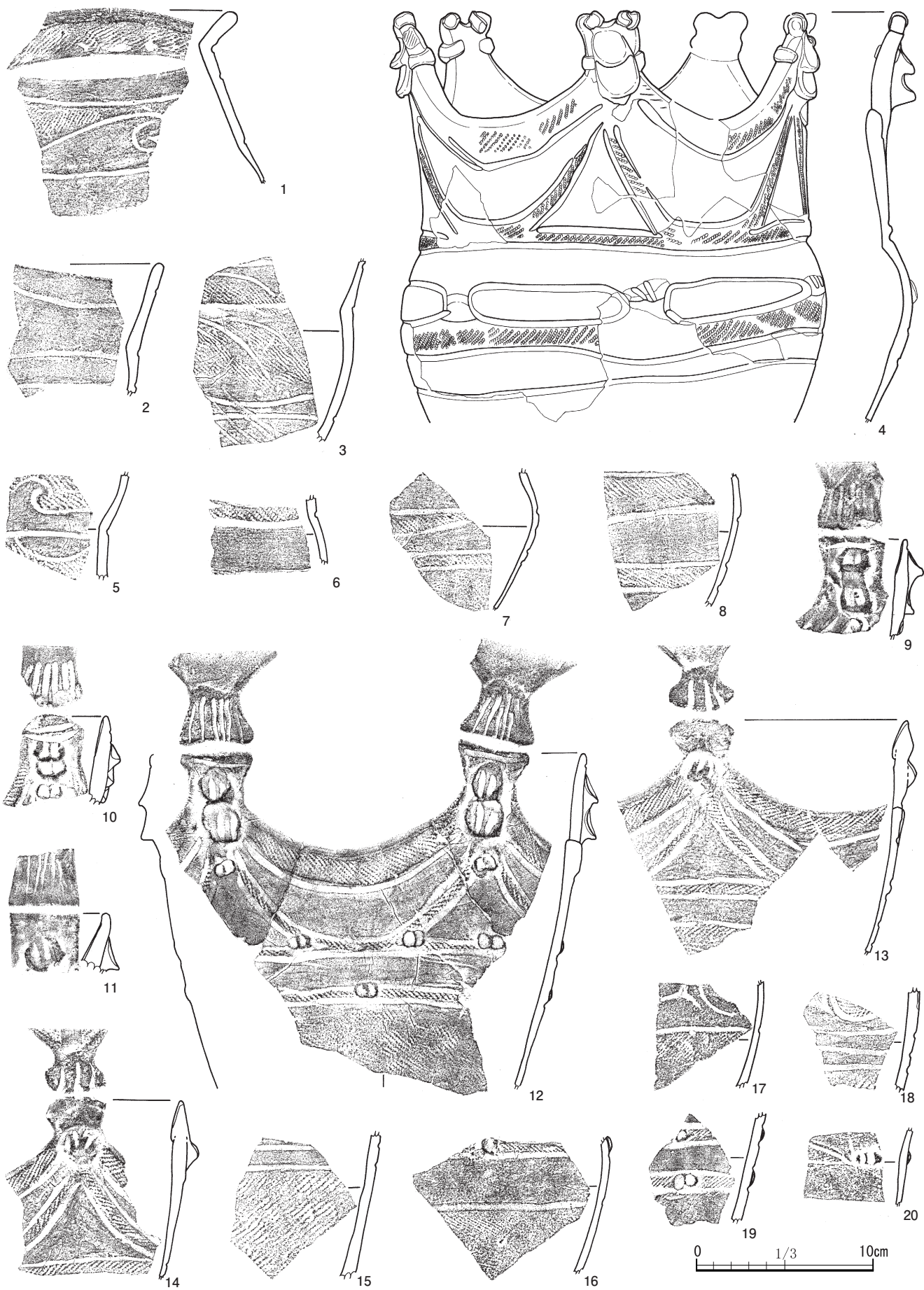
亀ヶ岡式風の土器及び東海地域以西からの搬入品の可能性を考えられるものである。

196～198は口縁部が外傾する皿形の土器で、接合しないが同一個体である。二次被熱のため脆い状態で、192・193を含めて口縁部約1/2強、上げ底の底部は3/4程が遺存する。199・204・205は分節なく体部から口縁部に到る鉢形もしくは深鉢形である。200・201・203は分節して口縁部が外傾する鉢形土器。209は注口土器で体部は完形、頸部半ばから口縁部は欠損し、注口部は先端を僅かに欠く。体部と頸部の境界付近に沈線二条を横走するが、深さは一定せず上側は途切れがちで雑な施文である。全体にミガキを施し光沢を持つ。なお注口部先端は欠損後に擦って再生しているものである。

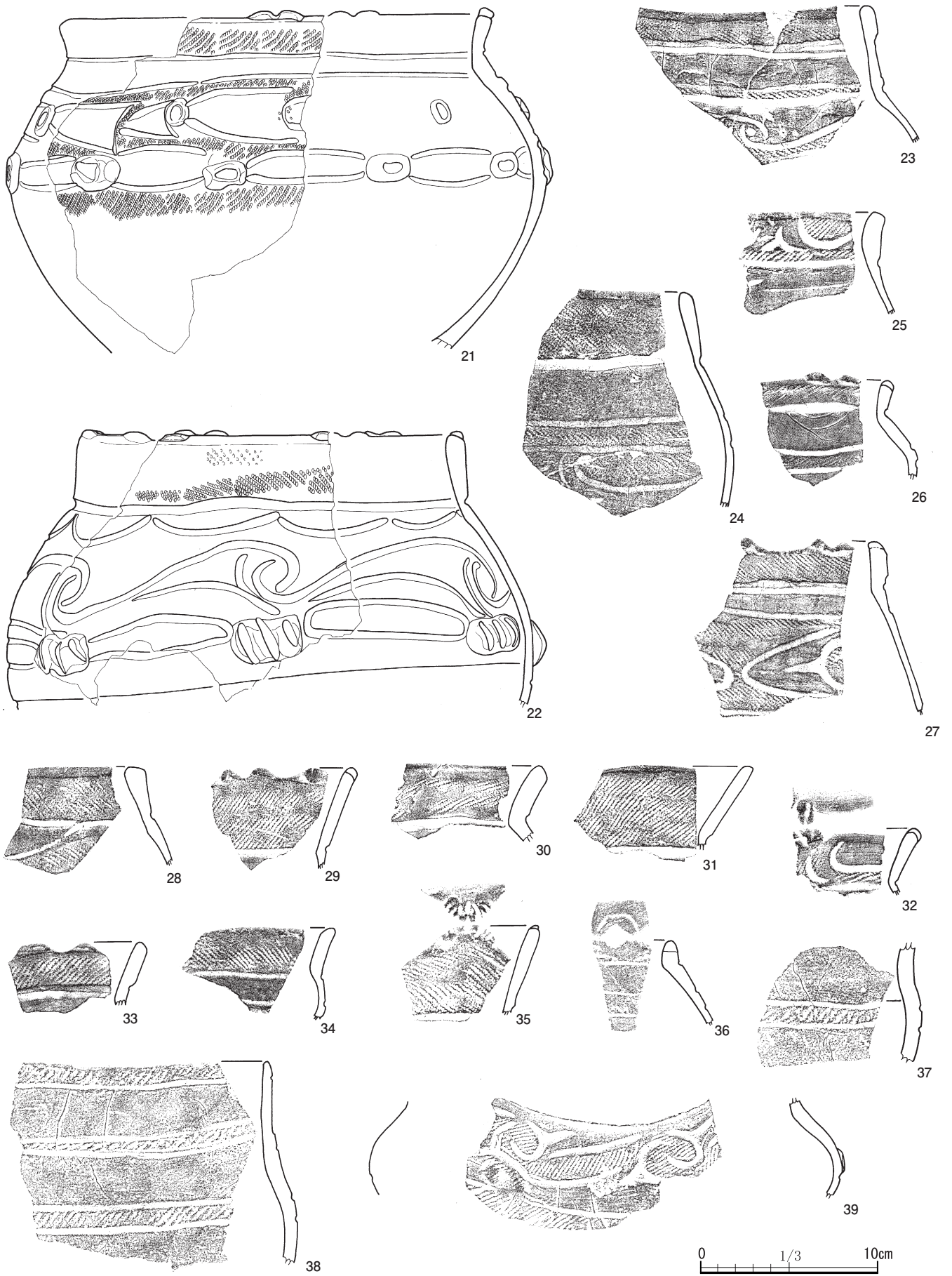
以上は亀ヶ岡式風の土器だが、羊歯状文を作出する196～198・200・201・205と、連続した刻文の間が浮き彫り風になる202は大洞B-C式に対比できると考える。一方、逆方向の弧線の連携部がレンズ状の長円形文となる199、三叉文の尾部が斜めに併行するように見える204などは大洞B式に対比できる可能性が高く、209も器形から同様の評価で、破片が小さく判断が難しい206・207も疑わしい。

215は椀形を思わせる器形である。破片上端と中程やや下に細かな刻文を充填する並行沈線が巡り、底部側には沈線4条が横走、刻文帯間には弧線4条を接続し、接続部には円形の抉りがある。泉拓良先生より滋賀里Ⅱ式に対比できる土器とのコメントをいただいている。

その他の土器 (第27図20、第28図37・38、第29図40・45、第31図82、第35図181～第36図195)



第 27 图 85 号住居迹出土土器 (1)



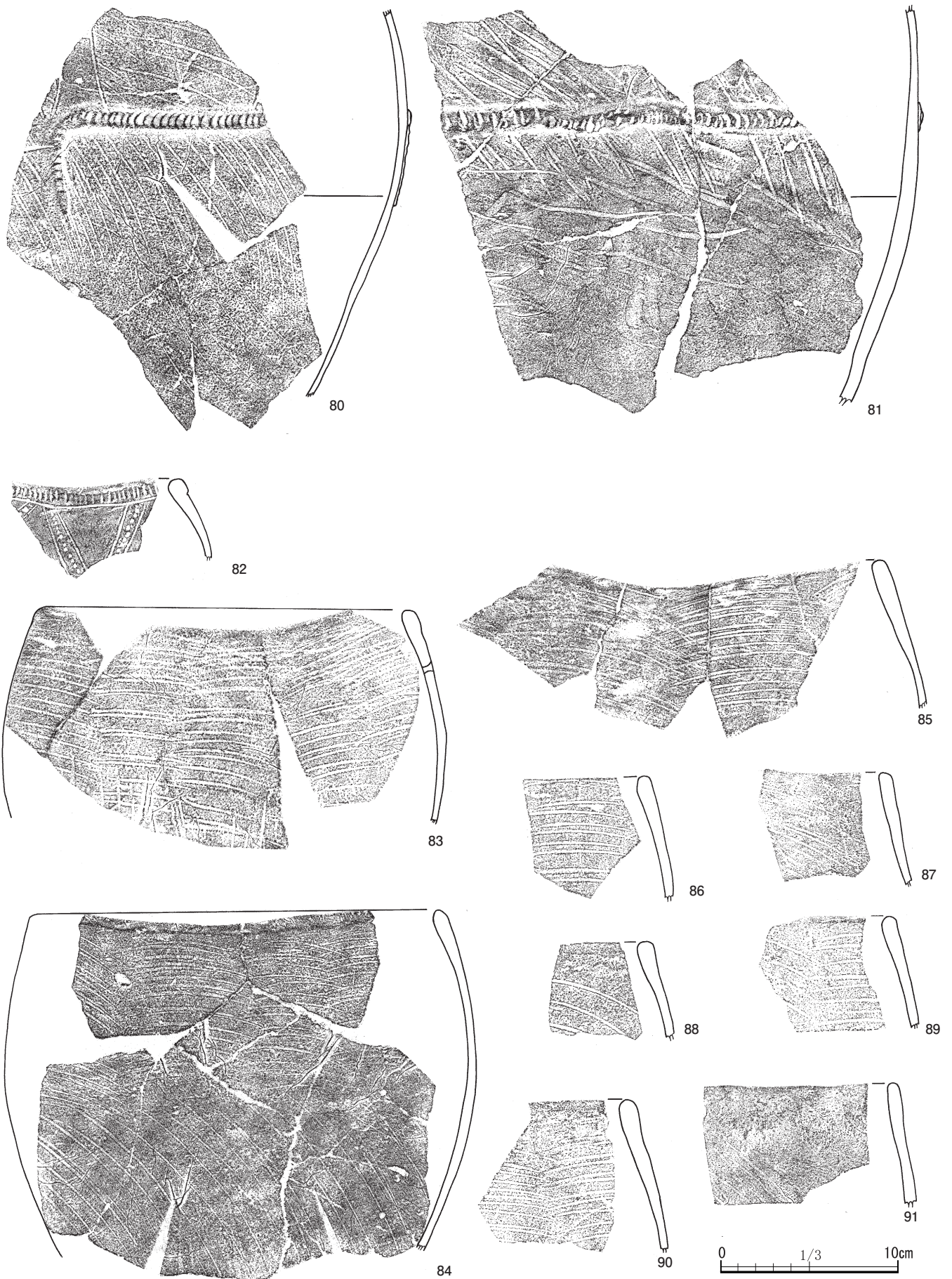
第28图 85号住居跡出土土器(2)



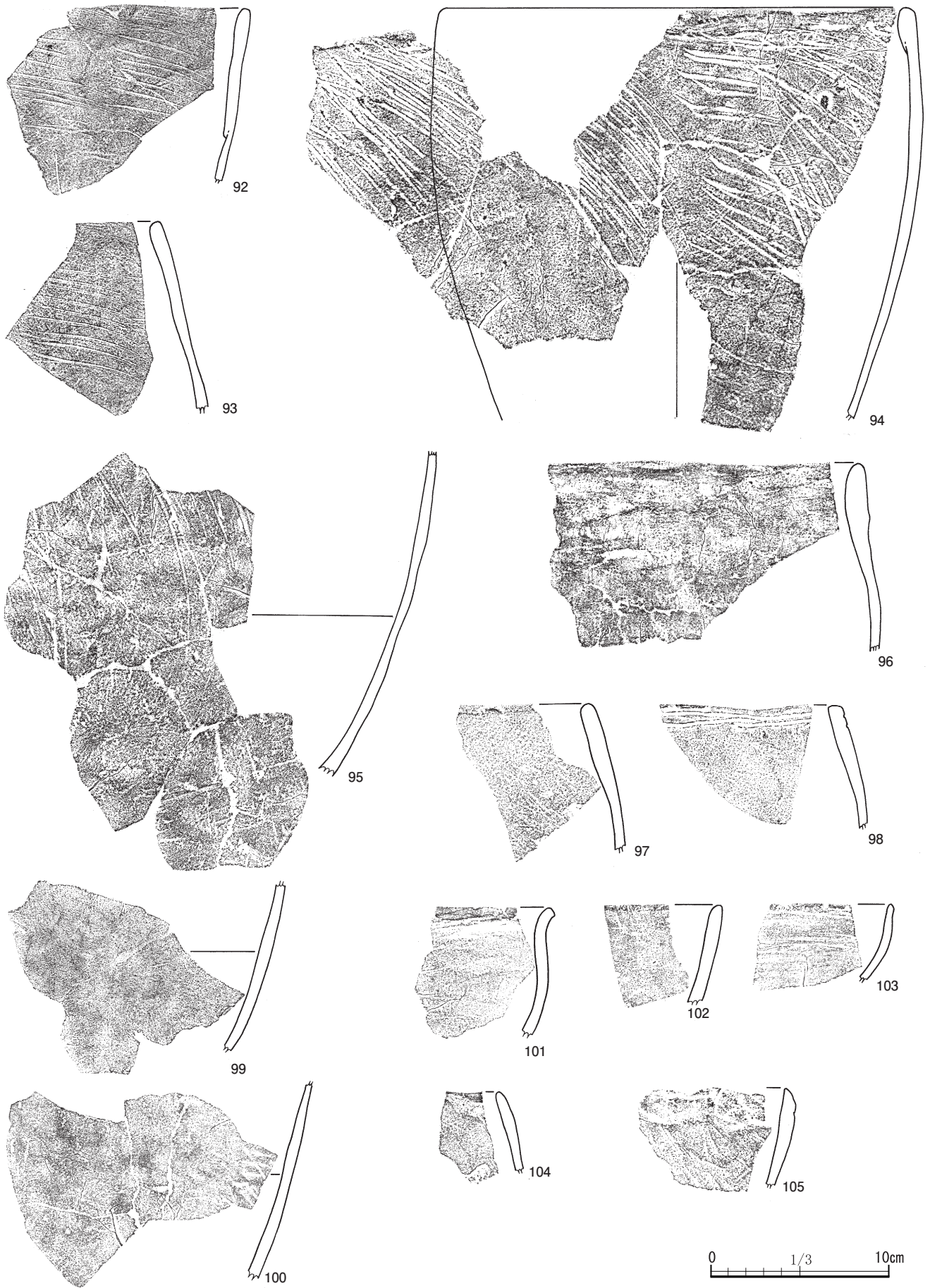
第29图 85号住居跡出土土器(3)



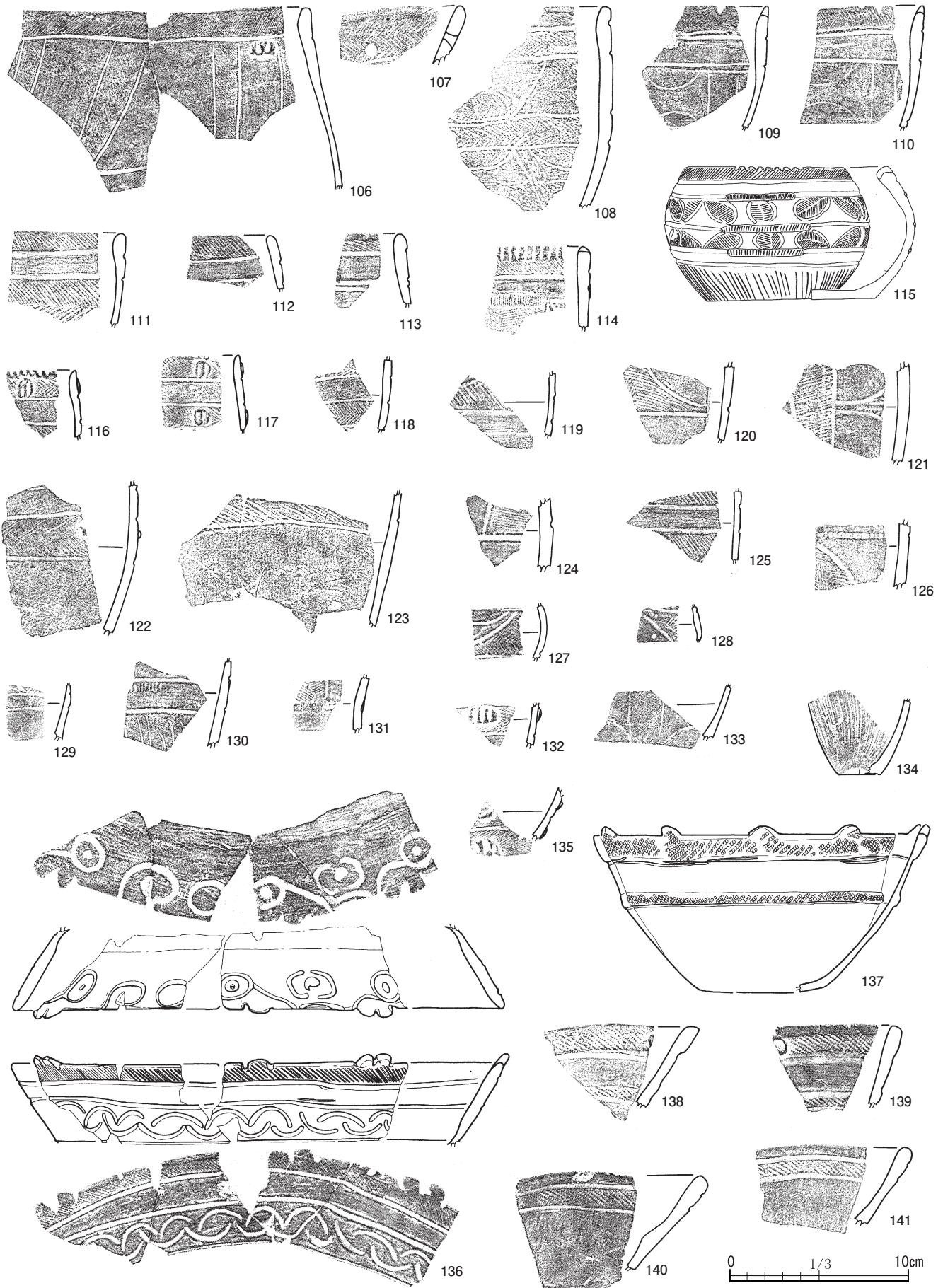
第 30 图 85 号住居迹出土土器 (4)



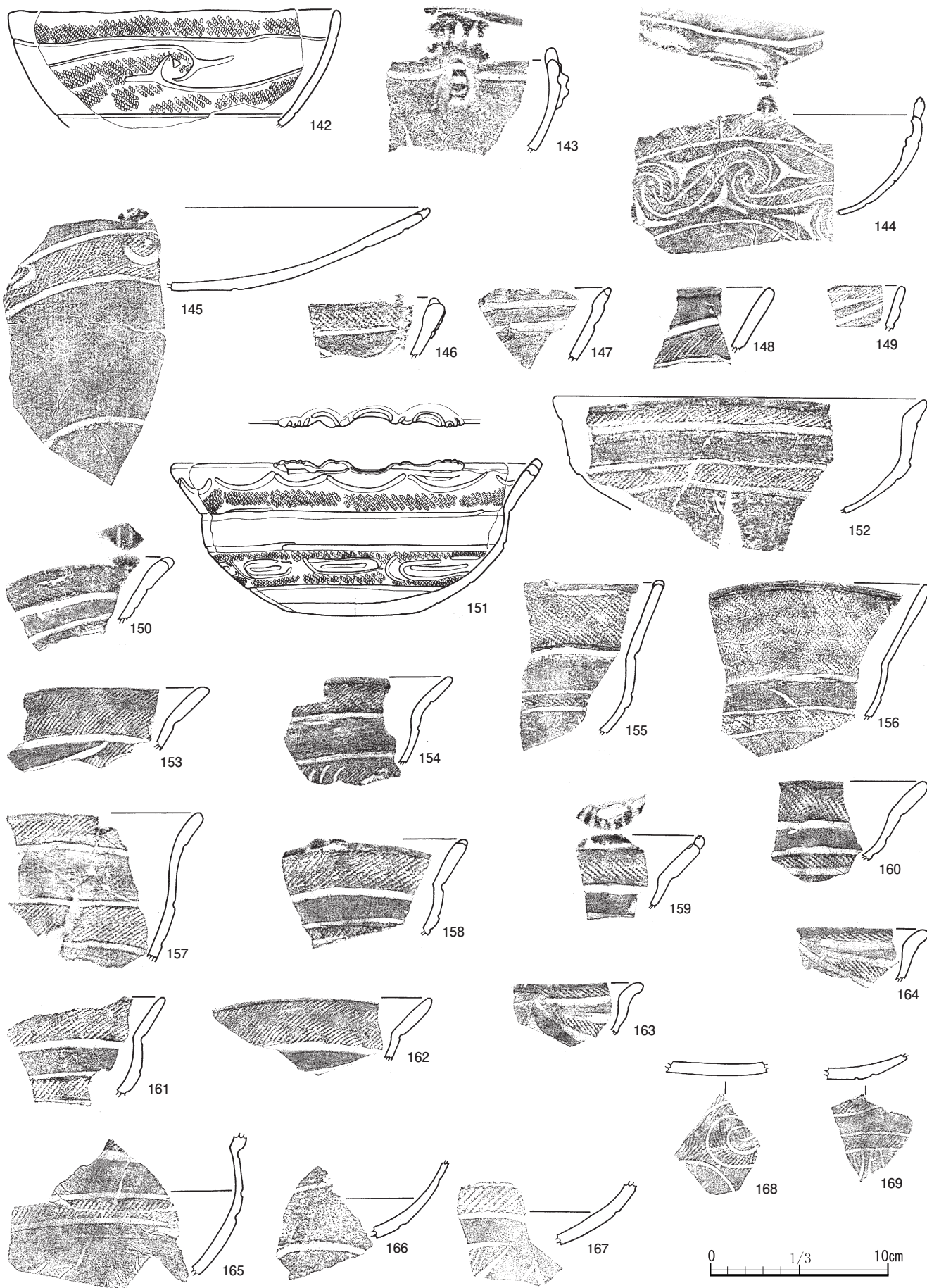
第 31 图 85 号住居跡出土土器 (5)



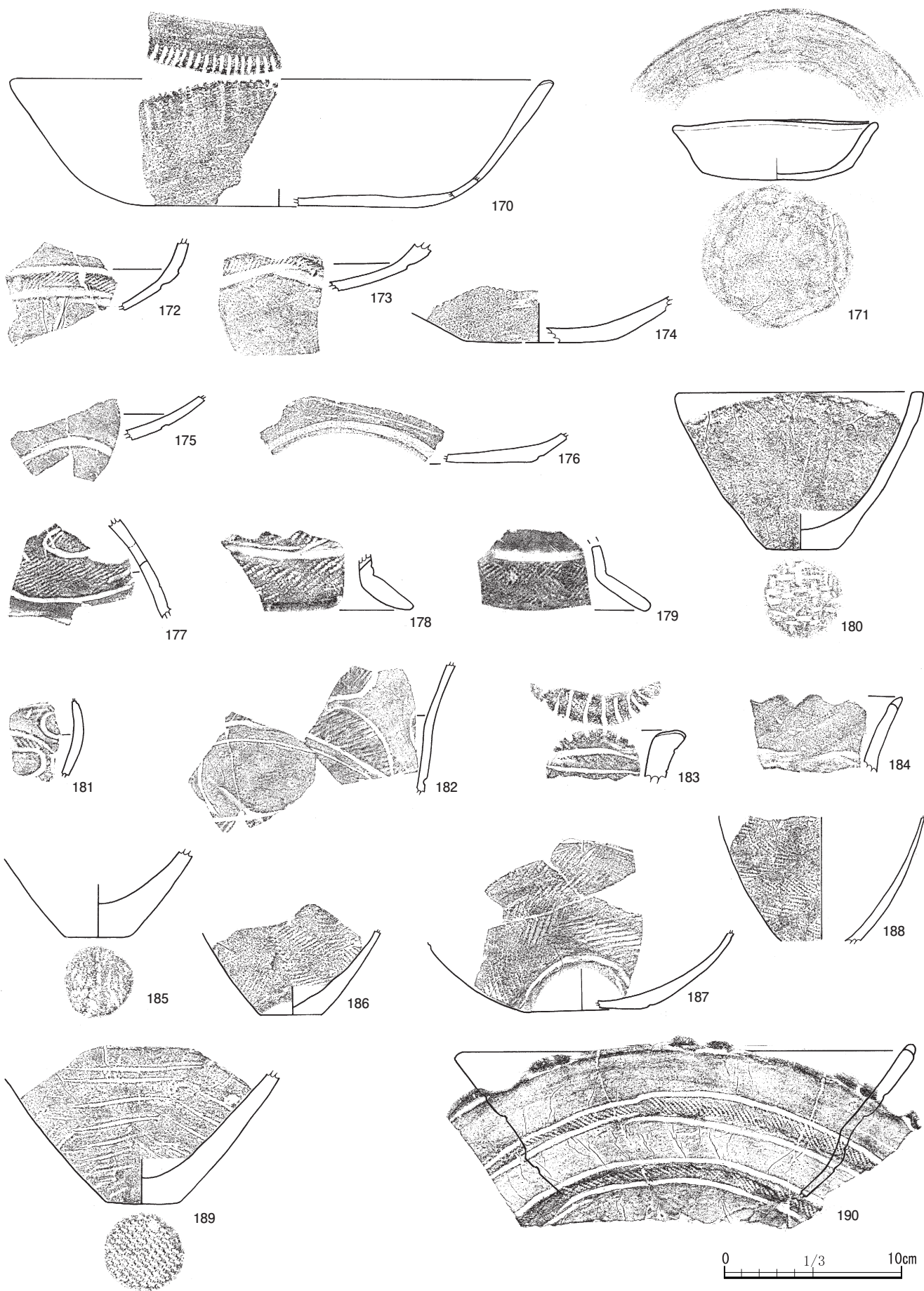
第 32 图 85 号住居迹出土土器 (6)



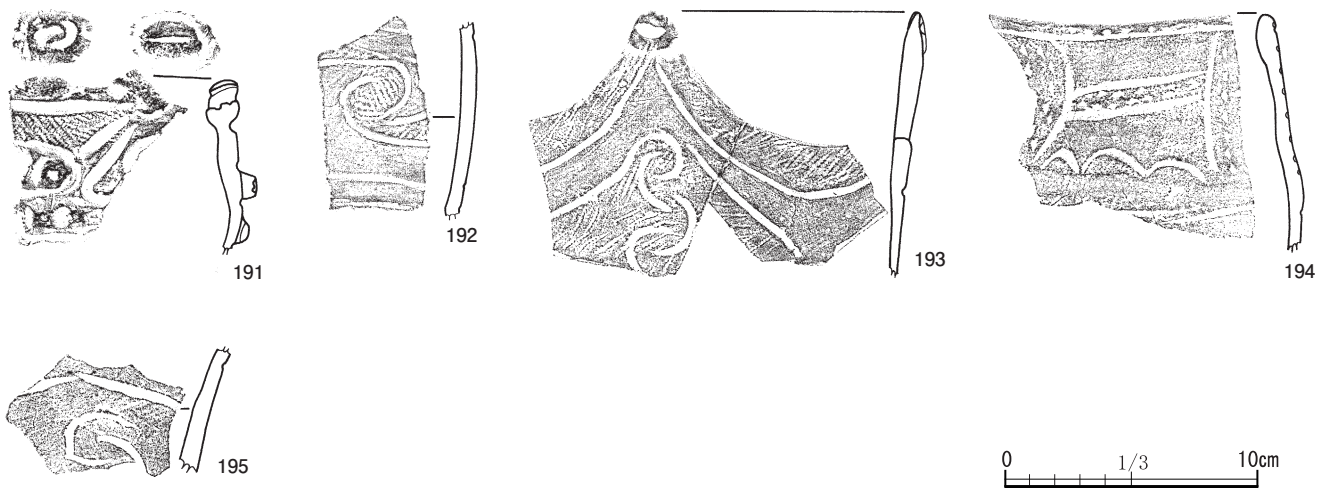
第33图 85号住居跡出土土器(7)



第 34 图 85 号住居迹出土土器 (8)



第 35 图 85 号住居迹出土土器 (9)



第36図 85号住居跡出土土器(10)

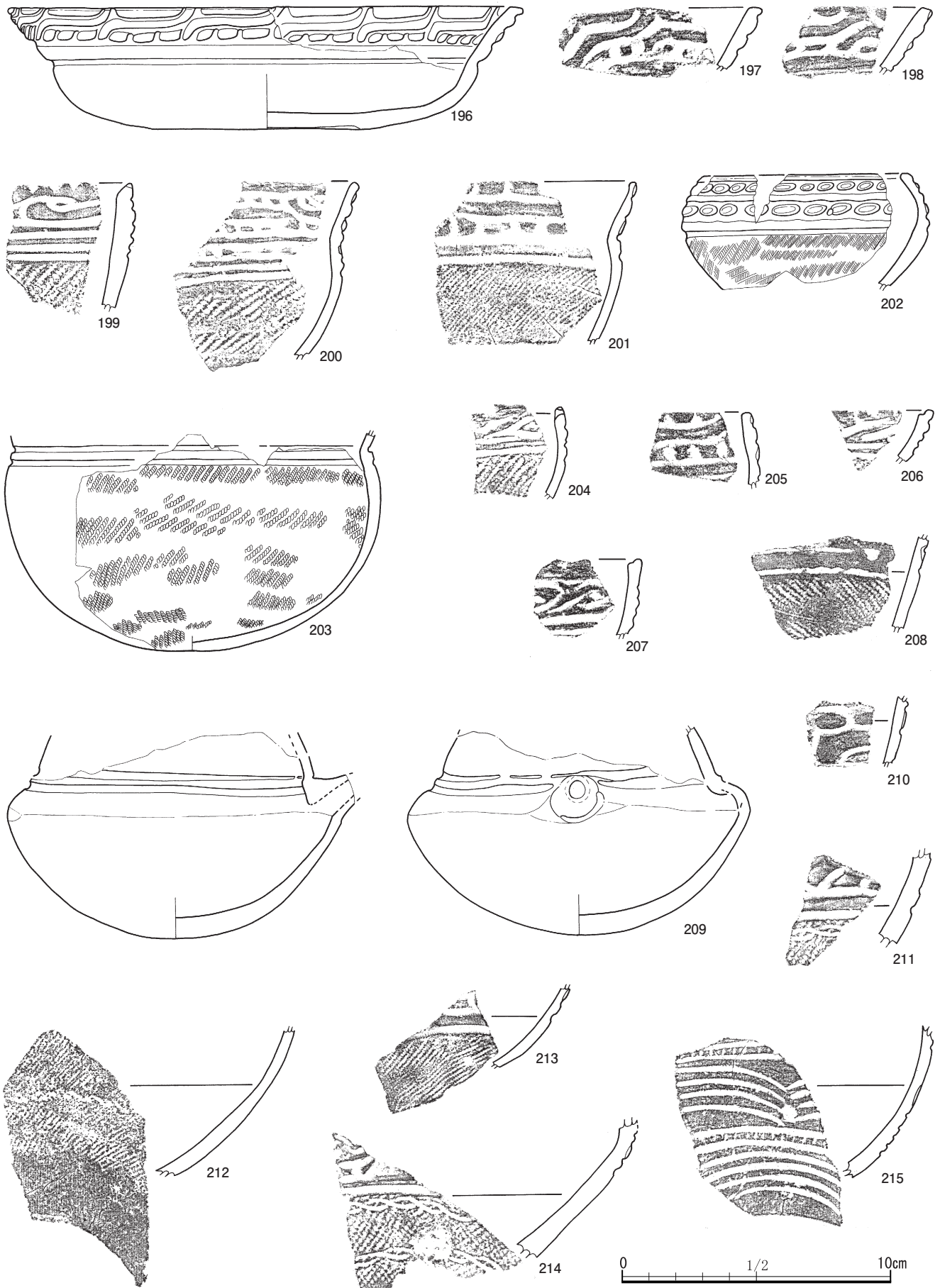
これまでの分類に該当しない個体について個別に言及しておく。

20は体部が直立に近い鉢形土器か。縦位の並行沈線と横位区画沈線の接合部に豚鼻貼付文を持ち、横位区画の上に弧線があるが縄文施文は無い。45の器形と装飾は近いが縄文を充填する。懸垂する並行沈線の左右に三角状の図形を持つようだ。37・38は体下半が僅かに膨らむ深鉢形土器で、口縁部・頸部・体部に横走する縄文帯を持つ。色調は黒褐色で胎土は砂粒に富んでいる。西側包含層に同一個体(第114図57)があり、口縁内側に丸棒状施文具側面を押捺した刻みがある。40は小突起を持つ平縁の深鉢又は鉢形土器。頸部には縄文を充填した縦位区画と上下対向する弧線文があり、中程の横沈線と縦位区画の接合部は三叉状である。82は副文様帯系の構成だが、器形は後期中葉～後半の瓢形土器を思わせる。181の器形は壺形となろうか。182は大径の鉢形土器であろうか。破片下端に横走する区画帯があり、その上は弧状の沈線を組み合わせた充填縄文による装飾があるが、全体を推測するには遺存割合が少なすぎる。183は口唇部と外面に沈線施文する突起。184は小波状を呈し外反する無文の口縁部だが、粗いナデ調整を斜めに施し、頸部には僅かに段差がある。185～189は底部か底部直上。187を除いて深鉢形である。189は底部に網代圧痕があり、後期安行式の混入の可能性がある。

190～192はJ11-47・48グリッドで本跡確認前に包含層の遺物として取り上げたもの。念のためここに掲載したが、本跡に伴う可能性は低い。190は本跡か140号住居跡の第9類A種であるが、いずれかを決する確実な根拠を指摘できない。191は口頸部が僅かに内傾する鉢形土器で、口唇上に頂部が水平と傾斜する二つの突起が遺存する。安行3a式としておく。192は深鉢形土器の体部にS字もしくはJ字状の描線の連鎖した入組文を持つ。193はB-B'セクション面の調整中・195はC-C'セクション除去中に、共に1層中に検出したもので後述する140号住居跡第1類B種に対比できるが、195は懸垂文左右に斜線を加えて菱形を構成する余地は無いように思える。以上は混入または本跡埋没後に廃棄された可能性が高い。

なお『総括報告書』3-164図183～192は、第2次調査の本跡に該当する範囲で出土したものである。

(菅谷)



第 37 图 85 号住居迹出土土器 (11)

140号住居跡（第38～43図、図版6・7）

概要

J11-58・59・67～69・77～79・87～89・K11-50・60・70・80グリッドにかけて位置する。6号溝状遺構に切られ、141号住居跡・168号土坑を切っている。未調査部分の平面確認範囲を含め、長軸約14.3m×単軸約12.0mの楕円形を呈し、北東－南西の主軸上に出入口と炉を配置する。『報告Ⅱ』には名称が無く、『総括報告書』では「未報告遺構5」とし、今回調査時の呼称及び遺物注記はIK3である。85号住居跡が埋没した頃に廃絶し、山武姥山貝塚第5層の形成時期に覆土下層・前浦式期に覆土上層が堆積した。床面直上に少ないが焼土形成があり、廃絶後全体に火熱を受けた可能性が高い。

第2次調査時の経緯・所見と第14次調査に先立つ課題

140号住居跡は、『総括報告書』作成の過程で旧Ⅳトレンチ3区の23-62・63グリッド、旧Ⅳトレンチ4区の23-64～67グリッド、旧Ⅴトレンチ3区の19～21-66グリッドにまたがり、調査時には認識されていないものの旧Ⅴトレンチ3区の北端に及ぶ、直径10数m・壁高1m以上というかなり大規模な遺構の可能性を想定し「未報告遺構5」としたものである。第2次調査の日誌を概観すると、該当する範囲は昭和39（1964）年9月8日～9日にかけて早稲田大学班と明治大学班が表土除去を行った後、別々の大学で編成された班が調査を実施している。

旧Ⅳトレンチ4区は10月5日～10日まで明治大学班が早稲田大学班の応援を受けながら担当。140号住居跡の相当範囲では、上位から黒色土→漸移層→黄褐色土と掘り下げている。黄褐色土について「硬質褐色土層を中ほどで見出し上部と下部に分けた」との記述があり、上部からは晩期、下部からは後期土器の出土を見た旨の記述がある（今回の調査結果はこの層位的な時間差所見を否定している）。

旧Ⅳトレンチ3区東側は10月13日～17日にかけて慶應義塾大学班が担当。140号住居跡の西南壁を検出している。壁際の覆土は暗褐色～黒褐色であったため、当初から遺構としての認識に迷いは見られない。尚、慶應義塾大学班の班長日誌を記したのは鈴木公男慶應義塾大学教授で、壁際から東に延びる暗褐色土（本報告での4a・4b層に相当すると思われる）を「黒色バンド」と呼称し「姥山Ⅱ式の包含層である」と記述している。（鈴木1963）刊行翌年の認識を確認できる情報と思われるので記しておく。

旧Ⅴトレンチ3区の北側範囲は10月12日～17日にかけて立正大学班が調査したが、黒色土を除去後に検出した黄褐色土をローム層と判断し、この範囲に遺構はないとしている。

旧Ⅴトレンチ4区は、10月16日～24日にかけて早稲田大学班が調査している。85号住居跡の項でも説明したように4区南半では西壁際のサブトレンチ掘削を優先しているが、慶應義塾大学班から調査所見の引継ぎがあったようで、4区南端付近での所見に「黒色バンド」はこの層の事かとの記述がみられる。

『総括報告書』作成に際し、第2次調査の調査日誌所見を上記の如く確認したので、旧Ⅳトレンチ・Ⅴトレンチ交点を中心に、かなり大規模な遺構が存在したと予想し、「未報告遺構5」として直径10mを超える大規模な竪穴住居跡の可能性を考え注意を促した。想定可否と時期の確認が、14次調査計画段階からの課題であった。

調査の経過

重機による表土除去は平成29（2017）年9月29日に第14次調査区北端から開始して南に進め、10月4日に旧Ⅳトレンチに埋設したとされる南貝塚貝層断面観察施設給電のための電源ケーブルを覆う山砂を検出した。断線を避けるため山砂の範囲は人力での除去として、重機は南側に移動して除去を進め、10月6日に14次調査区の重機による表土除去を終了した。この時点でケーブルの埋設位置と旧Ⅳトレンチが一致せず、ケーブルと分岐樁の埋設が未調査範囲を一部破壊していると判明した。安全のためケーブルの一時的

な移設が必要と判断し、旧トレンチ埋戻し土の除去以外平成29(2017)年度での調査は限定的となった。ケーブル埋設位置が旧トレンチの北側に大幅にずれていた旧IVトレンチ4区では、二カ所の深掘地点の黄褐色土を掘り残してあったのでこれを掘り下げたが、ケーブル下は翌年まで着手を見送った。旧Vトレンチ3区は分岐桝から南に延びるケーブルが収まっており、着手しなかった。旧Vトレンチ4区はサブトレンチ以外の黒色土から黄褐色土を掘り下げ、本来のトレンチ完掘状態での断面観察ができる状態とした。

14次調査区を迂回する形で仮設電源ケーブルを設置した平成30(2018)年度は、旧Vトレンチ3区埋戻し土と旧IVトレンチ3区ケーブル下埋戻し土の除去、昨年度調査しきれなかった旧IVトレンチ4区内覆土の掘り下げから開始した。旧Vトレンチ3区の底面は調査日誌の記述の通り一面ローム層かと思えたが、降雨後水を含んだ覆土の色調が変化し、本跡の範囲を確定できた。旧IVトレンチ内の住居跡床面を露出後、トレンチ壁面の精査と分層に着手した。覆土は上から黒色土(A~Eセクションの1層)・黄褐色土(同3層)・暗褐色土(同4層)に大きく三分できる。黒色土と黄褐色土の境界の上下5~10cm程の範囲は、黒色土中に黄褐色土の小ブロックや粒子が巻き上げられ、黄褐色土の上部に植物の根のような状態で黒色土がこまかく侵入するなど、攪乱された状態だった。覆土を掘り下げる際の遺物の帰属層位の判別に苦慮することになると予測できたため「黒黄中間層」と呼称して黒色土・黄褐色土の遺物と区別して扱うと方針を定めた(A~Eセクションの2層)。この時点で土層断面図を作成するラインと、将来の追加再調査に備えて覆土を残す範囲も決定した。既に第2次調査のトレンチが縦横に交差して覆土を分断しているため、基本的には旧IV・Vトレンチの壁面を極力利用することになるが、電源ケーブルの分岐桝が旧IVトレンチ3区・4区間に残っていたはずの2m四方の大半を破壊していたため、桝の北端に接して東西方向に140号住居跡覆土を横断する土層断面A-A'とし、旧Vトレンチの西壁を利用した南北方向の断面C-C'とした。旧IVトレンチの北壁を3区・4区が直線に近い状態になるよう調整したうえでB-B'とし、旧IVトレンチ4区南壁をD-D'・旧Vトレンチ3区東壁をE-E'として堆積状況の全体像を把握するための補助的断面とすることにした。旧IVトレンチ3区南壁は第2次調査時に本報告の168号土坑調査の為に拡張区が設定されて土層観察できる範囲に限られるため、断面図の作成は行わなかった。

ほぼ直交するA-A'・C-C'を基準に140号住居跡を4分割し、北東を起点として時計回りに1~4区を設定、2区の旧トレンチ内の掘り残し覆土は2区トレンチ、2区・3区の旧トレンチより北側は各区の拡張区とし、一括遺物は区と土層を記録して取り上げている。

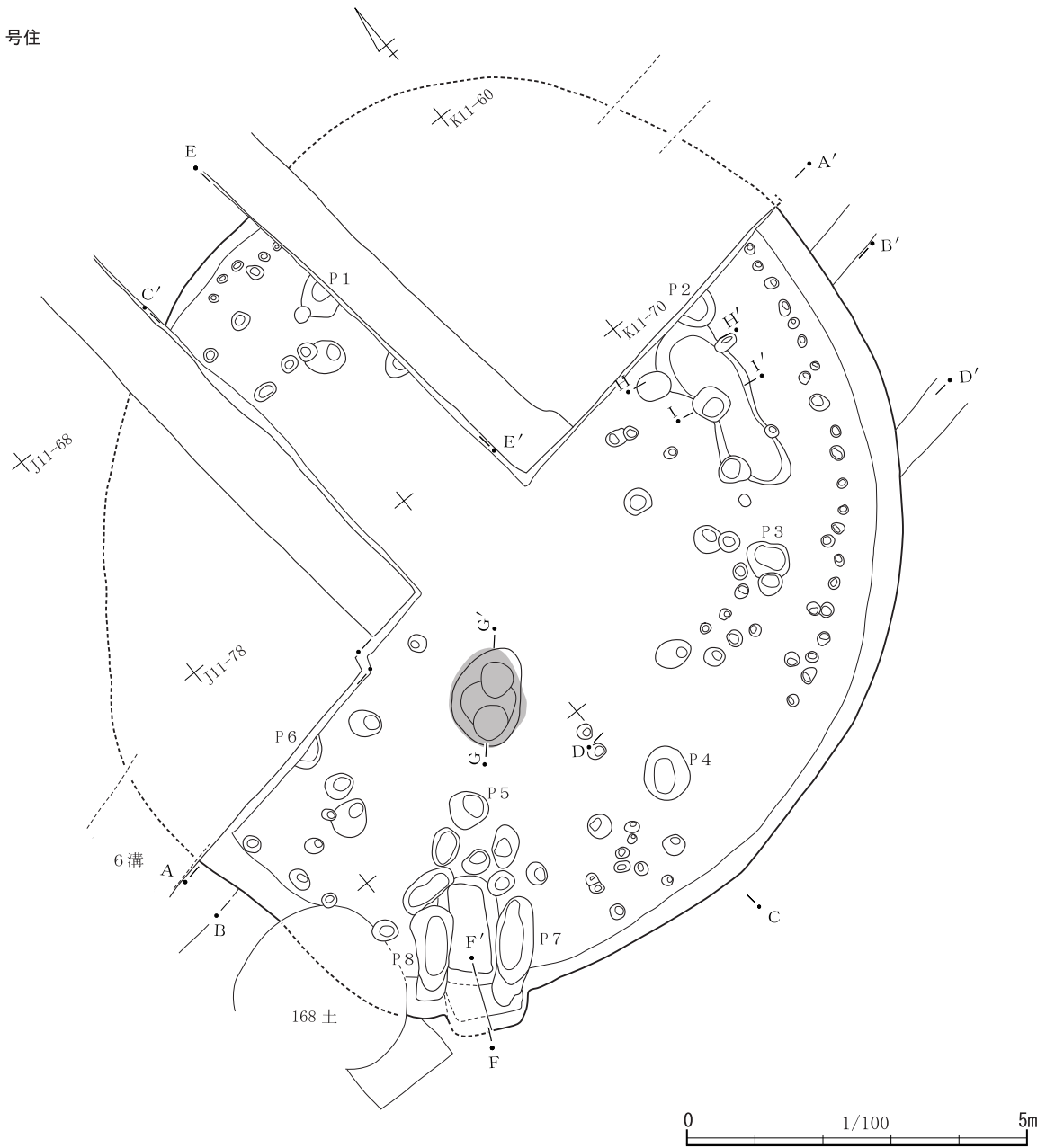
調査した範囲の大半で1mを超える覆土を持つ本跡の調査は、台風や集中豪雨で水没するという事態もあり、令和元(2019)年度の調査期間一杯を要した。

壁・床面・炉跡・柱穴・出入口・屋内土坑

壁 壁高はA'・B'・D'のポイントに近い東側で1.5m前後、南側のCポイント付近でも50cmを超える。壁の立ち上がりはかなり鈍角で130°前後の部分が多い。壁面の状態も軟弱で、3層・4層に比べわずかに締まりが強い程度であった。なお主柱穴P3に近い壁のほぼ中程の高さで、壁面に接して完形の土版(第130図)が出土している。

床面 軟弱で、明瞭な硬化面とは捉えられなかった。遺構を将来再調査可能な状態で保存する事と、床面としての確証を得ることの両立に調査中苦慮したが、第2次調査時の旧IVトレンチ4区の深掘りの一部で床面をわずかに掘りこんでハードローム層に達していること、後述の覆土4層を除去した段階で柱穴や炉跡・後述の屋内土坑などを確認できたことから床面であると判断している。

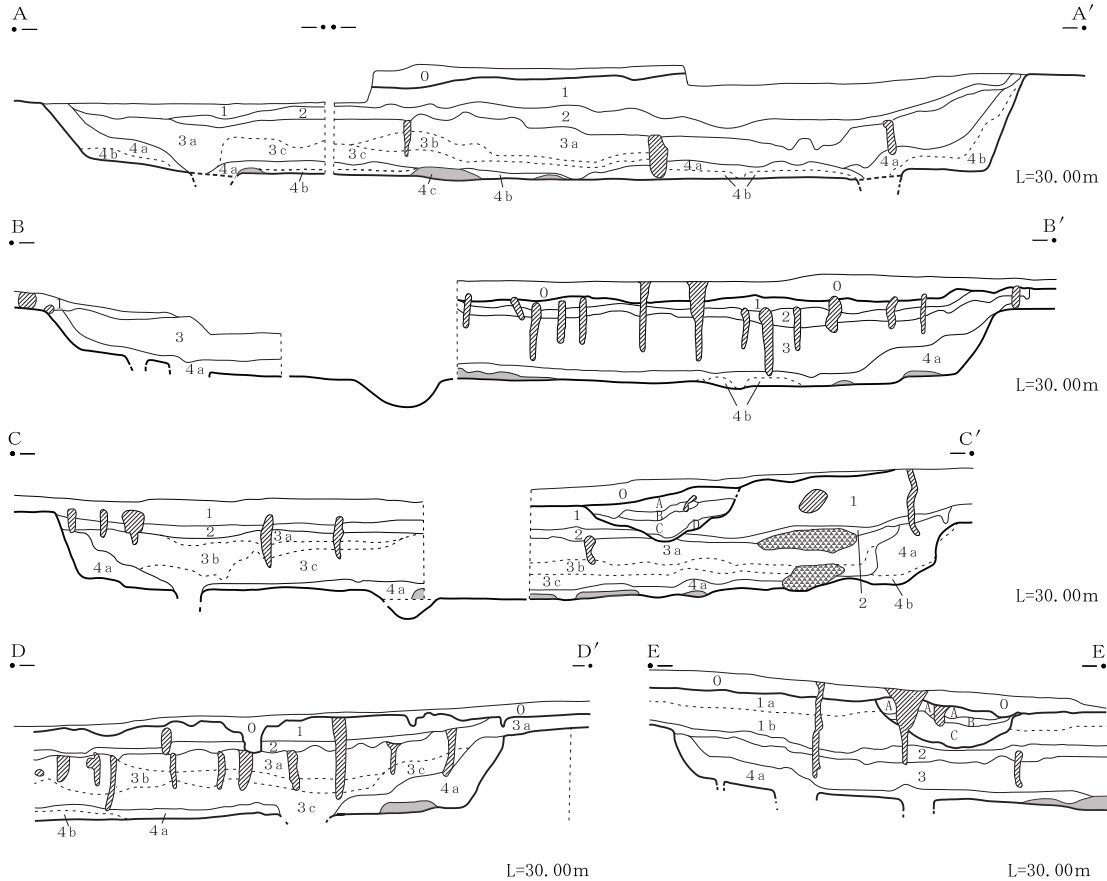
炉跡(第40図上) 住居跡主軸上の中央より出入口に寄った位置にあり、上面で150cm×100cm程の楕円形を呈し長軸は住居跡主軸とほぼ一致する。炉底面は出入口側と奥側が僅かに皿状に窪む。炉壁を含め全



第38図 140号住居跡(1)

体に焼土化してよく焼けているが、特に出入口側の底面の被熱が著しい。この部分には被熱によって崩落したと思しき焼土ブロックが厚く堆積していた(G-G' 炉跡5層)。一方奥側の底面の窪みの上には粉化した炭化物と疑われる黒色の炉跡8層が厚く覆っていて、中央には橙色の灰層(炉跡6層)がほとんど混入物のない状態で堆積し、奥側の壁に接して灰と黒褐色の混土(炉跡7層)があり、これら全体を黒褐色土(炉跡2層)が覆っていた。黒褐色土の上には覆土3層にあたる黄褐色土(炉跡1層)が乗っている。以上からすれば覆土4層は炉跡2層に当たるか、炉跡を覆っていなかったかということになる。

柱穴 大小多数の柱穴状のピットを検出したが、床面保全を優先したため未検出のピットは少なくないはずである。また検出したピットも小規模で浅い数本を除き底面まで掘り上げていない。従来の房総

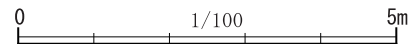


140号竪穴住居跡

- 0 表土下層
- 1 黒褐色土 7.5YR3/1 焼土・褐色土の小ブロックを疎らに含む。粘性やや弱く、しまりやや強い
1層と3層の混土層
- 2
- 3 明黄褐色土 10YR6/6 焼土粒子・ローム粒子・炭化物粒子を疎らに含む。粘性やや強く、しまり強い
a. 色調やや明るく炭化物粒子は少ない
b. 色調やや暗く炭化物粒子は少ない
c. 色調やや明るく焼土粒子・炭化物粒子が多く、粒子が大きい
- 4 黒褐色土 10YR3/2 焼土粒子・ローム粒子を含む。粘性やや強く、しまり強い
a. 黒褐色土が主体
b. ローム小ブロック・粒子が主体
c. 焼土小ブロック・粒子が主体

6号溝状遺構

- A 黒色土 10YR2/1 1~2mm赤褐色粒子を少し含む。粘性弱く、しまり弱い
- B 明赤褐色土 2.5YR5/6 アカスナを含む
- C 黒色土 10YR2/1 1~2mm赤褐色粒子を少し含む。粘性弱く、しまり弱い
- D Cに3層を少し含む



第 39 図 140号住居跡 (2)

地域の縄文時代晩期住居跡の調査例に照らして、支柱穴と思われるのは検出した内P1~P6の6本で、口径60cm前後・床面から50cm程度掘り下げたうえでピンポールを挿して探った深さが150cm以上(いずれも1mピンポールでは底面に到達しなかった)であることを確認している。軸線に対してP1とP2・P4とP6が対称の位置にあり、4区の未調査範囲にはP3に対応する支柱穴の存在が想定できる。1区の未調査範囲の軸線上にさらに1本が存在する可能性もあろう。軸線上のP5については支柱穴ではなく出入口施設に関わる柱穴という解釈もあり、他遺跡の事例でもこの位置のピットは他の支柱穴よりやや径が小さく浅い傾向があるが、本跡例も同様と思われる。壁際に直径20cm前後で深さ50cm内外の小規模なピットが列をなして並ぶ壁柱穴がある。P4近くの壁際は空白だが、壁柱穴が途切れているのではなく、調査時の人の出入り

場所としたためピットの検出を行わなかったからである。

出入口 南西側で、長軸125cm×単軸50～60cm程の楕円形のP7・P8が対になる。対ピットとP5の間にも、番号を付していないが、軸線を挟んで対となるピットがあり、これも出入口施設を構成する可能性がある。P7・P8間は床面より40cm程高いステップ状に掘り残されていた。このステップの南西側は壁外に50cm程突出し、外側の立ち上がりに接して幅80cm程の溝が切られているようだ。ステップ上面からの深さは20cm程である。突出部の覆土は、F-F'より西側を調査せずに残してある。同断面より東側の突出部覆土一括で第44図6～10の土器が出土した。点数は少ないが、後述のように本跡主体部覆土下層の出土土器と同じ時期の土器群と考えられるので、突出部も本跡を構成する施設である蓋然性が高い。対ピットの形状は東北南部や東関東地域で知られた縄文晩期の堅穴住居跡に類例が多いが、出入口先端の外側への突出と対ピット間のステップの作出は類例が稀である。従来報告の例は出入口付近の壁外と床面の高さに差がない場合が多いが、本跡では南西側検出面を当時の地表と想定しても、ステップを経由しなければ出入りは困難であることを、調査中に実際に体験した。

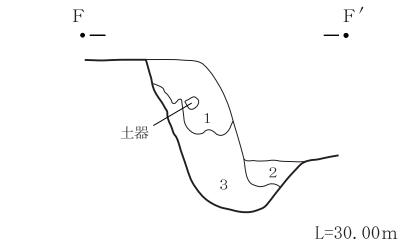
屋内土坑（第40図下） 支柱穴P2・P3の間に、280×100～80cm・深さ30cmの湾曲した長楕円形の土坑があり、覆土4c層の焼土を除去して検出できた。本土坑中央にB-B'セクションがかかるため本跡埋没後の別遺構の重複は否定できる。また本跡覆土1層上面から土坑を確認した床面までの深さが120cmあることで、本跡に先行して構築した別遺構の重複の可能性も少ない。土坑の湾曲が壁の湾曲とほぼ一致する点も本住居跡に伴う施設である蓋然性を補強すると判断し、屋内土坑と呼称する。底面はほぼ水平だが平坦ではなく、全体に僅かな凹凸があるが、住居跡床面より硬く締まっている。底面よりわずかに浮いた状態で獣骨・貝灰と思われる漆喰状の塊・後述する第44図1～5の土器片が出土した。半完形の1の装飾からの時期比定は難しいが、口縁部小突起の形状は85号住居跡覆土の土器と共通性がある。他の土器片も同様に評価でき、本跡覆土の主体を占める土器群に先行する時間的位置づけが考えられることから、屋内土坑出土の1～5が、本跡使用時～廃絶時期を示す可能性の最も高い遺物と言える。なお、I-I'セクションにかかるピットは、土層断面の観察から屋内土坑に伴う可能性が高く、その南側にある同規模のピットも、土層断面を記録できなかったが同様の土層であった調査時の所見がある。番号を付さなかった上記二つのピットは、支柱穴P2・P3を結んだ線上に位置している。

覆土の特徴と遺物の出土状態

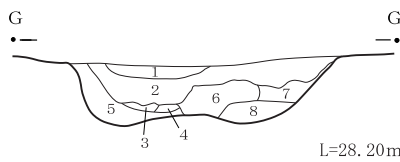
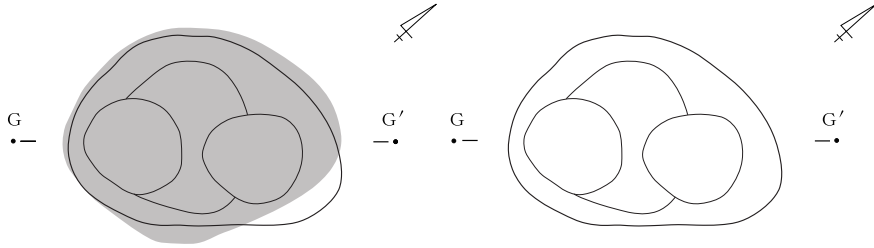
A-A'～E-E'の5本の土層断面で観察できた本跡覆土は、1層＝黒色土・3層＝黄褐色土・4層＝暗褐色土に大別した。このうち3層と4層の上部(4a層)は色調によって区別したものの粘性や締まりが類似しており、堆積段階として区別できる確証はない。2層は黒色土と黄褐色土が混じりあう範囲で単独の堆積段階とは考えていない。逆に4層の下部には焼土ブロックや焼土粒子が集中する部分(4c層)、焼土化してはいないが火熱を受け硬化や劣化したような変質したロームを集中的に含む部分(4b層)が複数見られ、直下の床面がわずかに橙色に変色したと見える部分もあった。こうした火熱の影響を受けたとみられる層の分布は面的に連続せず局所的だが、それぞれの場所で同時に形成したとすれば、覆土の堆積に先立って規模の大きな火を伴う行為を行った可能性を考えられ、一つの堆積段階と評価できるかも知れない。焼土が特に集中する範囲は第41図に示している。他にC-C'の北半のほぼ同一の場所に、間に3層を挟んだ二枚の貝層があり、この範囲では3層中に獣骨片が遺存していた。

1層はやや粘性があり締まりもやや強い黒色土で、調査区北半に堆積する黒色包含層と区別が難しく、C-C'の北半とE-E'では40cm前後の厚さで堆積し、粘性と締まりによって二～三に分層可能な部分もあった。土層断面図には現れていないが、南側でも出入口部のやや内側で凡そ出入口部対ピットを含めた

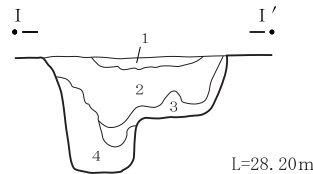
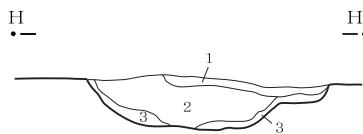
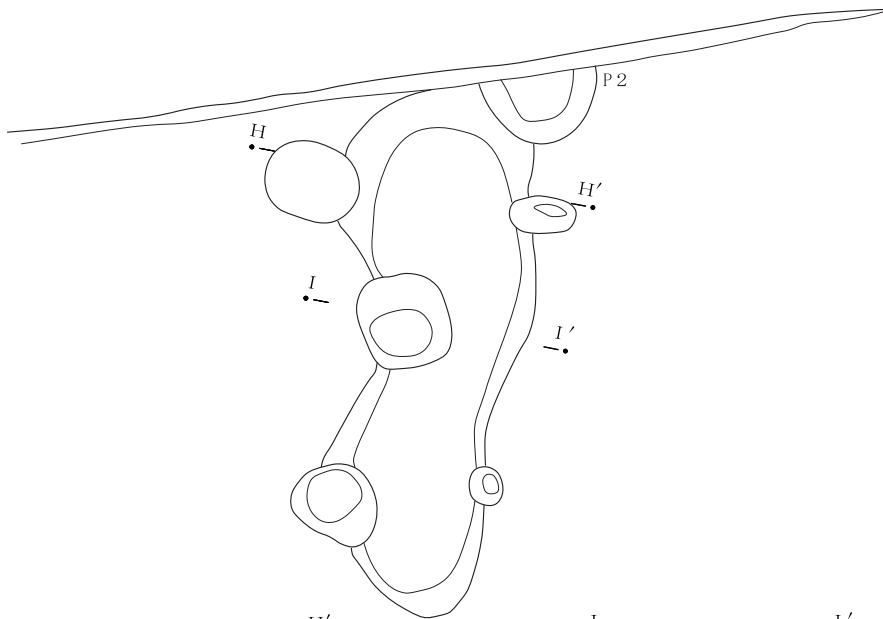
140号住



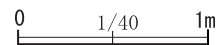
- 1 暗褐色土 ローム粒子を含む。粘性やや強く、しまり強い
- 2 1層と3層の混土
- 3 暗黄褐色土 ロームブロックを疎らに含む。粘性強、しまり強い



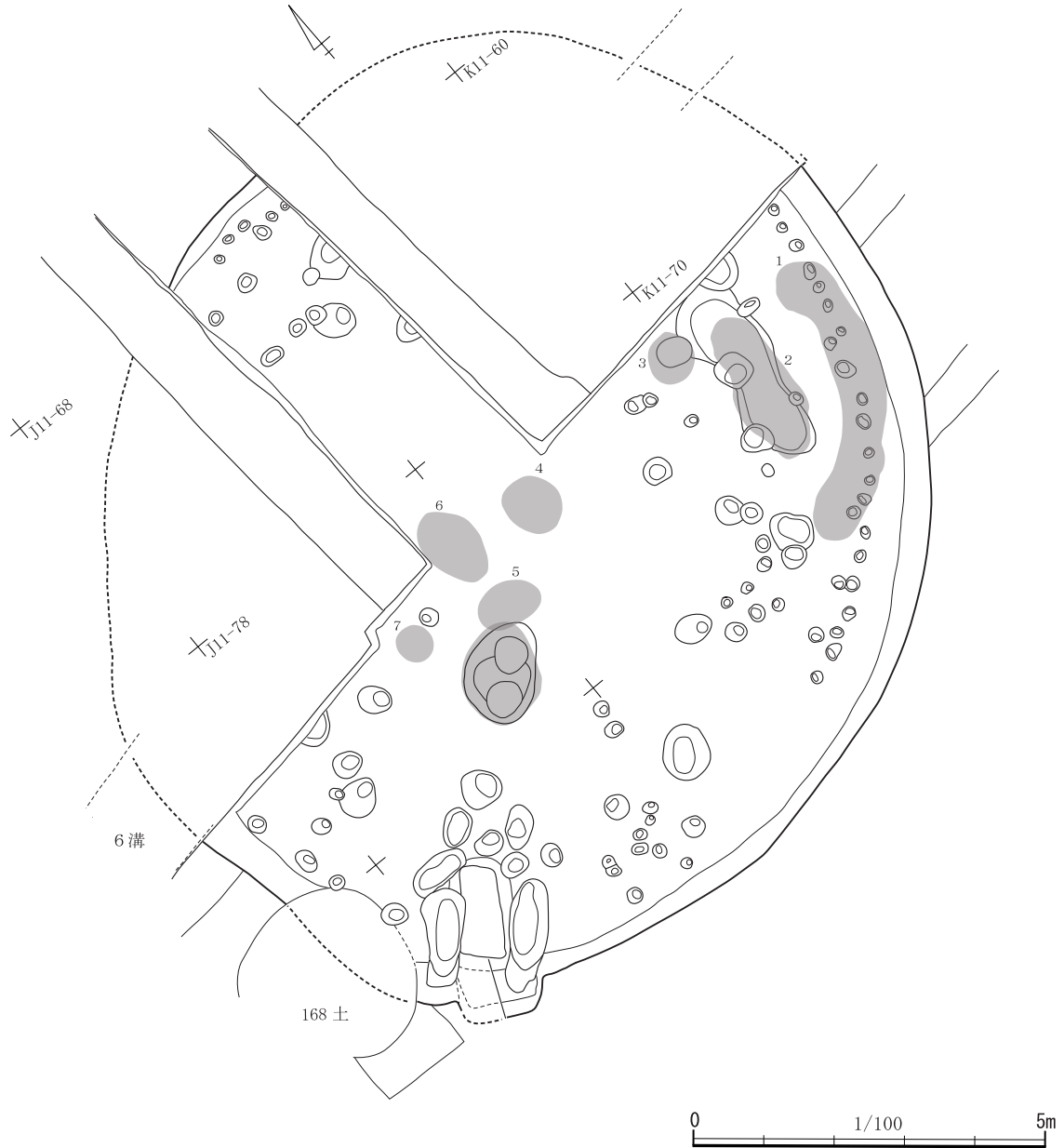
- 1 黄褐色土 覆土3層に同じ
- 2 黒褐色土 焼土小ブロック・黄褐色土小ブロック・炭化物片・焼獣骨を含む。粘性やや強く、しまり強い
- 3 暗黄褐色土 黒色粒子を多く含む
- 4 暗黄褐色土 焼土粒子を多く含む
- 5 暗黄褐色土 焼土小ブロックを多量、被熱固化したローム粒子・黒褐色粒子（2層由来？）・焼土粒子を中量含む。粘性やや弱く、しまり弱い
- 6 薄桃色灰 焼土小ブロック・黒色粒子を含む。粘性やや強く、しまりやや強い
- 7 薄桃色灰 焼土小ブロック・黒色粒子を含む。粘性やや弱く、しまり弱い
- 8 黒色土 粘性やや弱く、しまり弱い



- 1 暗褐色土 10VR3/4 ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い
- 2 黒褐色土 7.5VR3/2 焼土粒子をやや多く含む。粘性やや強く、しまりやや強い
- 3 褐色土 7.5VR4/4 焼土粒子を少量含む。粘性やや強く、しまりやや強い
- 4 黒褐色土 7.5VR3/2 焼土粒子を微量含む。粘性やや強く、しまりやや強い



第40図 140号住居跡（3）



第41図 140号住居跡(4) 焼土検出状況

範囲では周辺より深くまで堆積していて、調査時この部分の1層は他と比較して締まりが弱いという印象を得ている。この範囲では2層を確認できず、3層の堆積も薄かった。なお1層の上部には色調では区別が困難な表土下層があるが、1層に比べて締まりが弱く、乾燥しやすいことから土層断面では確実に判別できた。本層の土器は集中した分布を示さず、散在していた。本層一括で取り上げた遺物は、「黒色土」と注記してある。

2層はA-A'中程・B-B'・D-D'では黄褐色土中に黒色土が根茎状に侵入し、黒色土中に黄褐色土のブロックや粒子が浮いた状態であった。一方C-C'北半やE-E'では特に北壁に向かうに従い黒色土と黄褐色土は混じりあい、黒褐色の均質な層に見える状態であった。水平方向で観察しても混和の状態は連続的に推移する。植物の生育や土中生物の活動に起因する攪乱によって1層と後述3層が入り混じる範囲と考えている。本層一括で取り上げた遺物は「黒黄中間層」と注記してある。

3層は40～80cm前後の厚さで堆積する、一見するとソフトローム層と区別の難しい黄褐色土である。粘性はソフトロームに近く、締まりはより強い。ただし断面を子細に観察すると、直径数mm～1mm未満のハードローム様の粒子、同程度の大きさの焼土と炭化物らしき粒子を僅かに含んでいる。光線状態が良い条件で観察できたA-A'・C-C'・D-D'断面では、色調の微妙な明暗と焼土や炭化物粒子の含有の多寡により分層できたが明確ではない。3層全体としては、南東側が厚い堆積で色調は明るく、北及び西側は薄い堆積で色調が暗い傾向にあった。A-A'・B-B'では西壁際は色調が暗く暗褐色土に近いが、東側に向かって連続的に明度に変化していくので、分層せずに同一層とした。本層の土器も散在した出土という印象があるが、3区拡張区の4層に近い深度で集中していた。本層一括で取り上げた遺物は「黄褐色土」と注記してある。

4層は暗褐色土で、上部(4a層)は焼土の小ブロック(直径10mm前後)と粒子、炭化物の小片(長軸5mm前後)、硬質のローム層らしき小ブロック(以下ローム小ブロックと記載する。直径5mm前後)を、いずれも3層と比較して多く含んでいる。焼土とローム小ブロックは、それぞれを主体に暗褐色土を混入する程度に集中する部分(ローム小ブロック主体=4b層・焼土主体=4c層)が複数あり、いずれも床面に直接接している。4b層は上面が平坦でよく締まって貼床状に見える部分があるが、面的な広がりにはB-B'にかかる狭い範囲に限られた。逆にA-A'断面東壁際とC-C'断面北壁際は締まりがなく風化した壁の崩落土と思える。4c層は視覚によって判別しやすいため面的な判断は比較的容易であり、大部分の範囲を第41図に示しているが、断面でしか記録できなかった範囲もある。A-A'断面での観察で、4c層の堆積後に4b層が堆積し、更にこれらを覆うように4a層が堆積したと考えられる。4層の土器は3区拡張区の西壁近くに破片が折り重なるような状態で出土した部分がある他、2区拡張区の東壁からやや離れた辺りに比較的集中して出土した部分があった他は散在した状態で、ほとんどが4a層出土である。本層一括で取り上げた遺物は「暗褐色」と注記してある。

各土層断面には植物の根によると考えられるほぼ垂直に貫入する攪乱が多数見られた。現代の攪乱らしい表土下層より上位から入る攪乱は黒色の土壌を主体として締まりがない。一方2層途中や3層上面から入る攪乱の中には、3層がブロック状に砕かれた状態でほとんど黒色土を含まないものが目立った。(菅谷)

貝層(第42図、巻頭図版4-2、図版6-3)

本遺構の北側、旧Vトレンチ内に小規模な貝層が存在した。貝層は上下2層ある。

上部貝層は1.32×7.3mの長楕円形の貝層である。西側は未掘削部分に延びている。旧Vトレンチに随伴するサブトレンチの掘削により何ヶ所か直線的に掘削され、除去されていたので、不整形をなしていた。旧Vトレンチ断面である第43図A-A'を見る限り、1.33m程の長さを有していた。層位は明黄褐色土の上面に位置し、面的に存在していた。層厚は30cm。混土貝層をなす。

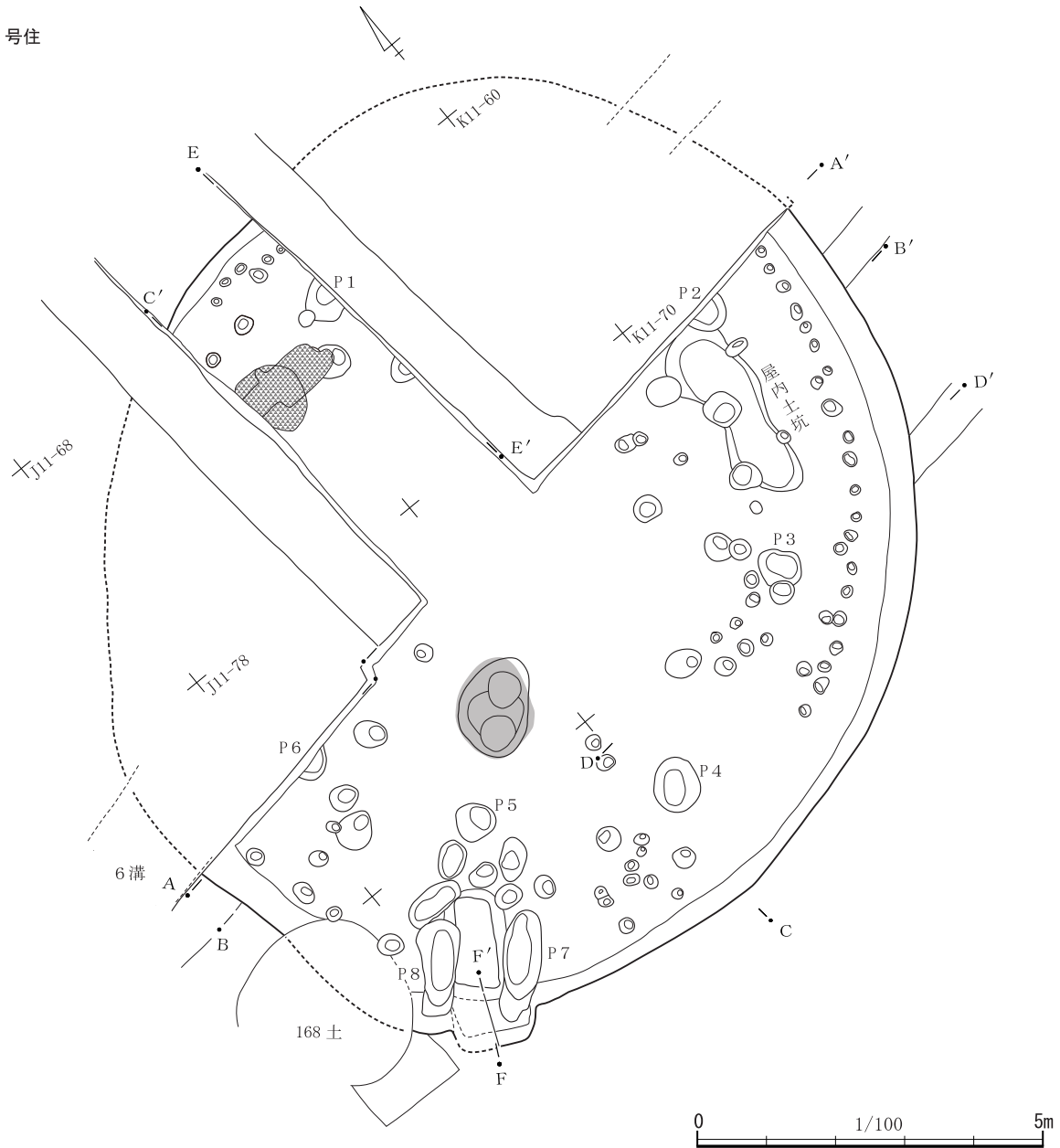
下部貝層は上部貝層の真下に存在した。径約1.7mの不整形円形をなす。西側は未掘削部分に延びている。層位は140号住居跡の覆土下部の明黄褐色土から覆土最下部の黒褐色土中に存在し、貝層下面は住居跡の床面に接していた。層厚は35cm。混土貝層をなす。

なお本貝層に関しては全て貝層サンプルとして採取した。

(松田)

出土土器(第44～71図)

出土土器の整理作業は、旧IVトレンチ4区と旧Vトレンチ4区の掘り残し土(大半が3層に当たる)の接合から開始したが、これは各年度の調査実施期間の間に進めたためである。令和元(2019)年度の現地調査終了後は、1層の接合を終えた後同2層との接合を試み、2層と3層→3層と4層の順に層間の接合状況を確認していった。前浦式の出土は1層と2層に限られ層間の接合関係も若干見られた。山武姥山貝

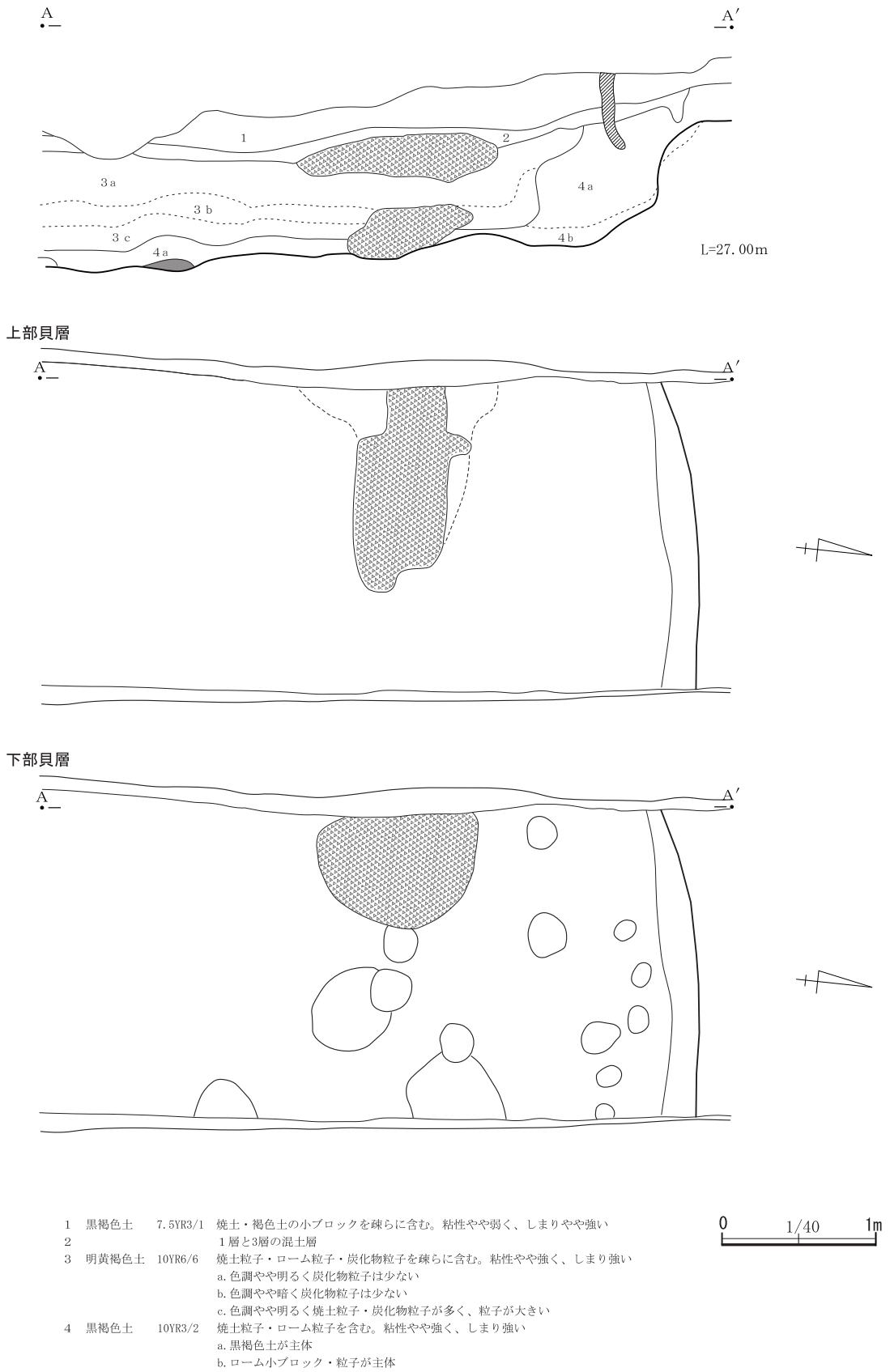


第42図 140号住居跡(5) 貝層検出状況

塚第5層相当の土器は1層～4層で出土しているが、1層では2層との接合が若干あったものの図示可能な状態に至ったのは第71図496のみである。3層と4層では層間の接合が多く2層とも接合したものもある。85号住居跡覆土と共通する土器は、屋内土坑から出土した他各層で若干出土しているが、屋内土坑出土土器は1～4層出土土器とは接合せず同一個体の可能性を指摘できるものもない。以上から140号住居跡の出土土器を、屋内土坑の土器・覆土下層の土器(3層～4層とこれに接合した2層出土土器)・覆土上層の土器(1層及びこれと接合した2層出土土器)という三つの層位的なまとまりがあると捉え返し次に記述する。また出入口突出部と住居跡本体の連続した土層断面を設定できなかったため、半截した際に一括で取り上げた土器を区別して提示する。

屋内土坑出土土器(第44図1～5)

廃絶時期に最も近いと考えられる。土坑の覆土上部には焼土が直接入り込んで蓋をした状態で、5点の土器は底面に接し、あるいは底面上の暗褐色土の上に乗る、焼土は土器の上に被っていた。2・3は85号



第43図 140号住居跡 貝層

住居跡第4類、4・5は85号住居跡第5類A種である。半完形の1は敢えて言うなら85号住居跡第7類B種となるが、体上部の帯状区画内に充填するのは細密沈線文とは言い難い粗雑な沈線である。

出入口施設突出部出土土器 (第44図6～10)

6は器形・装飾共に後述する140号住居跡覆土下層の1類B種に類似するが、平縁で口縁部下の縄文帯が無い。7は同4類B種である。8・9は6類A種、10は5類A種だが、この二類型は85号住居跡出土土器と140号住居跡下層出土土器との判別が難しい。85号住居跡で出土を確認していない7の出土を根拠として、出入口部突出部は覆土下層の形成と時間的に大差なく埋没したと判断する。

覆土下層出土土器 (第44図11～第70図)

覆土3層と4a層から出土したもので、2層出土の破片と接合したものも含まれている。従来「姥山Ⅱ式」・「姥山Ⅲ式」・「安行3c式」といった型式名で呼ばれてきた土器群で構成されている。第69・70図は同じ堆積中に含まれた亀ヶ岡式風土器と、東関東で異質と感ぜられるもので地域や型式を特定しがたいが念のため提示するものである。器体の形成技法と装飾に基づいて85号住居跡出土土器に準じた分類によって説明していくが種以下は必ずしも対応しない。

なお第44図11～14は混入と思える85号住居跡第1類、15・16は同第4類である。

第1類 (第45図17～第47図52)

充填縄文による装飾を基本とし、刺突文を充填する沈線区画(以下区画内列点文とする)を併用するものがある深鉢形土器で、底部から体部にかけて砲弾形を呈し、体上部が縮約する。分節の数と平口縁・波状口縁の造り分けがあり、更に三分できる。1類A種は(鈴木1964)で「姥山Ⅱ式を出土する単純遺跡」とされた茨城県築地遺跡で(H)とされたうち「深鉢形の形態をとるもの」に、1類B種は(鈴木1963)での「姥山Ⅱ式a類」と「姥山Ⅲ式a種」に相当する。

尚17・52は旧Ⅳトレンチ出土資料と接合した。既に『総括報告書』で報告済みだが本住居跡出土が確認できたので、再実測の上掲載する。

1類A種(17～20) 直線的で内傾する頸部の上に、直線的に外傾する口縁部をもつもの。口縁部・頸部・体部に三分節する土器である。外傾する口縁部に縄文施文するものと無文のものがある。17は炉址覆土上面で検出した破片が接合した。口縁内面から外端にかけて細い粘土紐を貼付して二頭ある小突起を作出し、18・19は小粘土塊を二つ接して口端に張り付けている。20は突起を持たないようだが、頸部の内傾が著しく、広口壺のような器形となる。17の頸部には複線の連鎖S字入組文に横長弧状の図形を組み合わせているが、弧状沈線の片側端部の曲率がやや強くJ字状に近い。頸部下端に区画内列点文がある。

1類B種(21～51) 直線的で内傾気味に立ち上がる頸部に連続して、やや反り気味の波頂部を形成するもの。口頸部・体部に二分節する土器である。分節構造は後述のC種と同様だが、波頂部形成の分だけ工程は多い。口縁部は口端に沿った沈線で区画して縄文を充填するが隆起帯化せず平坦である。頸部は波頂部から垂下する文様の連続(「波頂部懸垂文」とする)を中心に線対称になるよう斜沈線を組み合わせ、三角形の上に菱形を乗せた図形とするものが大多数である。波頂部懸垂文を中心とした図形は波底部下で左右接するが、ここにも垂下する印象を与える文様の連続(「波底部懸垂文」とする)をもつものが多い。波頂部・波底部の懸垂文は、円圏文(22・23・25～27・36～39・44・45)、二重円圏文(24)、円文(40・42)、縦位互連弧文(21～23・30～32・35・43)、蛇行沈線文(41)、帯状区画列点文(29・33・34・46～48・50・51)、帯状縄文(49)を確認できる。円圏文と懸垂互連弧文は個体内で併用する例がある(22・23)。

波頂部は膨らみなく尖った形状に形成し、裏面から表面側を挟み込むように粘土紐を貼付するものが大半だが、両側面を挟むように別々の粘土紐を貼付する(41・43)・波頂部前面に小粘土塊を貼付して押捺

を加える(38・44・49)・粘土紐を鉢巻状に全周する(30・31・34)といった変化が見られ、一点のみだが横に広く偏平に成形した波頂部内面に縦位の浅い沈線を加えるもの(41)が存在する。こうした波頂部の形成や貼付文が85号住居跡の土器群に近い特徴を持つ個体は、波底部懸垂文が無いが簡素で、波頂部下側の三角形図形が無い個体がある。

1類C種(第44図52)直線的で内傾気味に立ち上がる頸部の上端を口縁とする。口頸部・体部に二分節する土器である。A種の口縁部・B種の波頂部を除いたものとも言え、1類土器全てに共通する器体の土台とも言えるが、1個体のみ出土である。装飾は横位帯状の区画を基本とし、頸部は単線連鎖S字入組文の上側に縄文を、口端は刺突文を充填する。

第2類(第47図53～第48図73)

上部が内湾する体部と短い口縁部に分節される深鉢形土器。広口壺とも言う器形である。区画内に縄文を充填することを原則として、区画内列点文を併用することもある2類A種は(鈴木1963・1964)分類の「姥山Ⅱ式h類」に相当する。口縁部は外傾するものから内傾するものまであり、口端に二つの小粘土塊を接して貼付した小突起を持つ例が少なくない。平口縁を基本とするようだが、小波状を呈するものが1例ある。色調は暗赤褐色から鉛色を呈し、胎土は緻密である。無文部に胎土を圧縮するようなミガキを加えて光沢を持つ。

全形の判る個体に恵まれなかったが、体部上半の帯状区画内に入組文を持つものを複数確認でき、61は連続S字入組文、64・67は連鎖S字入組文である。口縁部には縄文を充填するものが多いが、無文とするものが一定数存在し、列点文を持つ59・72、左右対向する三叉文と長い弧線の図形を組み合わせる73がある。58～60に縄文はないが便宜的に本類に含めた。59は頸部の沈線内に焼成前に開けた円孔がある。

第3類(第48図78～第50図107)

上部が僅かに内湾する体部と短い口縁部に分節される深鉢形土器。第2類同様広口壺と言う器形である。縄文を使用せず、沈線による区画や文様に列点文を組み合わせることを基本とするが、列点文を欠く個体もある。沈線には太く深い施文と細く浅い施文の二者があり、列点文にも幅の広いものと狭いものがあり、沈線と列点文の幅は個体内で対応する。尚、色調・胎土・調整・装飾が共通する体部上端をそのまま口縁とする分節のない器形のもの少数あり、本来は別類とすべきだが体部中程の破片では区別が困難なため、便宜的に本類に含めて別種として扱う。また器形が類似し装飾を持たず、器面調整も粗雑なものが少量ありこれも本類の別種とした。安行3c式として想起する土器のうち、新屋(2008)が「古段階」とする埼玉県黒谷田端前遺跡遺跡(宮崎他1976)の晩期土器一括出土地点に類似する。(鈴木1963)分類の「姥山Ⅲ式d類・e類」に該当する。

3類A種(78～90・95) 概形は第2類に類似するが体部のふくらみは概ね弱く、口縁部が外に開く78～82では外傾というより外反であり、直立から内傾するものも含め2類と比較して分節が弱い印象を与える。但し95は体上部の縮約が著しく明確な分節である。

口縁と体の分節部と体部最大径のやや下を横に区画し、この間に入組文を配置するもの(78・83・86・88・89・95)と、口縁部または体上部と体下部を帯状に区画して刺突文を充填するもの(79・80・85)という二つの文様構成がある。入組文を持つものは、83・95が連続S字入組文、78・86～88が連鎖S字入組文で、87は二重線によるものである。87・88は体部上端を口端とするB種とすべき可能性があるが、文様構成を根拠として本種に含めた。

3類B種(91～94) 体部上端を口縁とする深鉢形土器。口縁直下の帯状区画に列点文を充填し、おそらくは最大径よりやや上に同様の区画を行い、この間に所謂副文様帯文様を配置すると思われる。

3類C種(105~107) 器形と色調・胎土は3類A種に近似するが、調整はより粗雑である。

第4類(第50図108~第52図135)

内湾する体部上端を口縁とする深鉢形土器。沈線による長楕円文を上下に重ねる所謂杵状文を持ち、その下に比較的短い沈線を連ねる。口端と杵状文下側にボタン状の貼付文を持つものがある。縄文施文の有無により二種に分類でき、(鈴木1963)分類の「姥山Ⅱ式d類」・「姥山Ⅲ式c類」に該当する。

4類A種(108~122) 杵状文の間に縄文を充填するもので、杵状文下の沈線は右下がりの斜線にほぼ限られるが、121のみ縦位である。また110のみ沈線を確認できない。大半は口端と杵状文の間を厚く形成しているが、109・111・116は隆起帯化していない。貼付文を持つものは109~115・117とほぼ半数を占める。全て縄文施文後の貼付だが111は貼付後に改めて縄文を施文している。杵状文を構成する長円形文は必ずしも揃っていないが、描出は比較的丁寧で描線の連続性が良い。色調は暗赤褐色から褐色を呈し、胎土は緻密で、調整は丁寧で光沢を帯びる傾向にある。

4類B種(123~135) 縄文を施文しないものである。126・128・131は口端と杵状文の間が隆起帯化し、貼付文をもつ。杵状文下の沈線は、125・127は垂直に近く、126・128・123・124は右下がりである。杵状文を構成する長円形文は描出がぎこちなく、雑な長方形に見えるものが目立つほか、下書き状の横走沈線を残している個体があるなど、A種に比して全体として雑な作りである。尚130のみ色調は黒褐色を呈して胎土・調整も緻密で、長円形文の描出も丁寧で手際よいものである。全体として胎土は砂粒に富み調整は粗くあまり光沢を持たない。

第5類(第53図136~第54図163)

上部が内湾する体部の上端を口縁部とする深鉢形土器で、口縁部外面に粘土紐を貼付するもの。いわゆる紐線文土器である。粘土紐は比較的厚く貼付し、下端近くに幅広の指頭押捺を連続して加えることで三角形に近い断面を示すものが大半だが、他に紐線文の作出が異なる多様な変異を示すものがある。後者は先行する時期の同類土器の混入の可能性が高いものだが、主体となる時期の変異の可能性も否定できないことから別種として一括し提示するにとどめる。

5類A種(136~149・159)

85号住居跡の同種土器と比較して明瞭な差異を指摘できないが、遺存の良い136・137・159に限って言えば、体上部の条線がいずれも垂直に近い点が本跡での共通した特徴と言える。また137・139などが判り易いが、口端部に向けての器壁の肥厚が目立たない個体が、85号住居跡に比べて目立つ。

5類B種(150~158・160~158・162)

85号住居跡の同種土器同様ほとんど接合せず、大形の破片も乏しい。

第6類(第54図160・161・163~第57図208)

紐線文を持たない粗製土器を一括する。器形は体上部が内傾・内湾する砲弾形で、分節なく口縁に到るのが多いが、直立に近いものもある。(鈴木1963・1964)分類の「姥山Ⅱ式e類」に該当する。

6類A種(164~197・200・201・204~208) 85号住居跡の同種とは明確な相違を指摘できない。口縁部は横方向に施文を重ねた施文単位があり、体上部は縦方向の施文で横位に全周すると想定される。ただし174は縦方向条線施文の余地はなく口縁部から続く横方向凹線のみと思われ、底部を含む破片の208も同様である。204も遺存状態からみて同様となるが、横方向条線の上に垂下する蛇行沈線を五から六単位施文している。200は右下がりの縦方向条線が口縁直下に施文されており、85号住居跡の第32図94のような構成になるかもしれない。

6類B種(198・199・202・203・258～266) 一応85号住居跡の同種に対比したが、やはり量も少なく器形・調整も一様ではない。258～266は器壁が薄く器高も20cm程度と推測する。中でも265・263・266はミガキやナデといった器面調整がなく、ヘラケズリ状の成形痕を残す製塩土器的なものである。ただし顕著な被熱や色変はない。他の個体は本類A種に近い器厚や調整で、条線施文を省いただけとも思える。

6類C種(160・161～163) 口縁下に刺突列や縄文帯で装飾を加えるものだが、遺存状態の良い163から類推すれば、本類A種に準じた条線の構成なのであろう。

第7類(第48図74～77、第58図209～第59図253、第64図375)

直線及び弧線を用いて区画した幾何学的な文様図形を描き、細密沈線文の充填で陰影を表出する土器。85号住居跡同様、分節の無い砲弾形の器形のA種が主体である。他の器形の装飾を細密沈線文に置き換えた個体が少数あるため85号住居跡同様B種として一括する。

7類A種(209～253) 上部が内湾気味の砲弾状の器形の深鉢形土器で、細密沈線文の充填・非充填により陰陽を表出する。85号住居跡の同類A種に相当し、そのものの混入が疑われるものもある。(鈴木1964)分類の「姥山Ⅱ式g類」に該当する。本類は図示可能なものをすべて掲載している。

口唇部は丁寧なミガキを加えて光沢を持ち、ヘラ状施文具で切り欠いたような刻文を集中して加える範囲が三ヶ所ある。装飾は横位の沈線区画で口縁部・体上部・体下部に器面を三分割し、それぞれの間は狭い帯状の無文部とすることが普通である。ただし213・214は口縁部と体上部の間の無文部がなく、232は口縁部区画がない。口縁部は口端と沈線区画の間に細密沈線文を充填する場合が大半だが、209は扁平な棒状施文具先端で加えた縦長の刺突を充填する。218は無文である。体上部の施文域では口唇部の刻文集中範囲の端に対応して沈線を垂下した縦位帯状区画を行い、全体をパネル状の六区画に分割するが、刻文集中範囲下の区画が狭く、その左右の区画は広い。体下半は底部との間に区画は無く、区画や文様描線同様と思える施文具を浅く当てた縦位の沈線を密に施文する。

やや変則的な印象を受ける210は体上部が一帯で縦位帯状区画を行わない。体上部は細密沈線文を充填する隅丸長方形区画と円形刺突を充填する円形区画(ただし実測図に表現していない拓本左側の区画内は渦巻状もしくは二重円となる沈線が加わる)を交互に配置している。なお210の実測図は遺存状態の制約から円形区画を正面に作図しているが、口唇部の刻文集中範囲に対応するのは隅丸長方形区画である。

209と210の対比から、体上部の装飾域を広く設定して二帯に構成するものでは縦位帯状区画も加え、狭く設定して一帯構成のものは縦位帯状区画を行わないという、装飾上の類型が存在するかも知れない。

85号住居跡の同類土器に見られず本住居跡下層に見いだせた装飾として、横位沈線区画の上から密集して加える縦位の刺突列がある。209と85号住居跡の第33図115を対比すれば、縦簾貼付文の粘土貼付を省略し細かな刻みを扁平な施文具先端での刺突に置き換えたものと理解できるため「縦簾刺突文」と仮称しておく。209の他212・214・225・228・238・243・244・247に確認できる。一方で縦簾貼付文を持つ個体は235・236と少ない。また85号住居跡にも見られた小さな豚鼻貼付文が233・234に認められた。

7類B種(74～77・375) 74は鉢形と思われるが、分節があるかどうか破片からは判然としない。帯状区画内だけでなく、口縁部にも細密沈線文を施文している。75は1類A種同様の器形。357も鉢形の器形で、装飾の構成は後述第9類の290・322に近く、連鎖する入組文をS字ではなくJ字や弧線で描き、頂部下と頂部間で連鎖の角度を変えている。

第8類(第59図258～266)

無文で小形の深鉢形土器。実際には単一の類型にまとめるのは困難だが、数が少ないため便宜的に一括する。器形は口縁部が直立からわずかに外傾するが、261は内湾し、262はゆるく括れて外傾する。263・

265・266は口端が尖り、外面にヘラケズリ様の調整痕があつて器壁が薄い。他は丸みを帯びた口唇部で、258・260・264はやや肥厚気味である。いわゆる製塩土器を思わせるが、器面に剥落や変色を示すものはない。

第9類（第60図267～第65図400）

鉢形・浅鉢形の土器を一括した。台の付く可能性のある個体もあるが含めている。以下には口縁部から底部にかけての分節の有無と装飾に基づき分類し、台部は別に第10類に一括して説明する。器体の形成・装飾の有無と手法の点で変化に富んでおり、全形の判る例も限られるため、おおよその分類である点を断つておく。9類A種1）・9類B種1）は（鈴木1963・1964）分類の「姥山Ⅱ式c類・d類・f類」に、9類A種2）・3）、9類B種2）・3）は（鈴木1963）分類の「姥山Ⅲ式b類」に相当する。

9類A種（267～288・360・386・400） 体部と口縁部を分節する鉢・浅鉢形土器。波状口縁と平口縁があり、装飾の有無と手法で更に三分できる。

1) 充填縄文による装飾を主とするもの（267～280・281・286・288）。

外反する口頸部に沈線で文様を描き縄文を充填するもの（267～269・272・273・275～281）と、口頸部全面に縄文施文するもの（270・271・274）がある。平口縁でステッキ状や短い弧線状の描線を持つ個体では頸部側、波状口縁で口端に沿った区画を行う個体は口端側を縄文施文域にする傾向が顕著である。以下幾つか特徴的な個体について言及しておく。

267は口径30cmを超える大柄な鉢形土器で、口頸部に互連S字入組文を持つ。269は片側を抉ったような非対称な波頂部で、低い側の波底部には二頭ある小突起を作出し、口唇部を長楕円形に抉っている。275・276は尖った波頂部に粘土紐を裏から巻き付ける。275は口縁部と体部の区画帯、276は波頂部懸垂文を区画内列点文で表現する。288は口唇上に三叉状の切欠きと長楕円形の抉りを組み合わせた装飾を施し、破片右端には薄く貼付した粘土塊に対向する三叉状の切込みと沈線で装飾する小突起を作出。表面は口端に接して横長弧状の充填縄文文様中に列点を加え、口縁部・体部の境界は区画内列点文を用いる。この間に対向J字文と斜線による区画をし、縄文を充填する。図上で復元した文様単位は十である。281は頂が幅広で平坦な波頂部で、端部に貼付文をもつ。

268・270・274・275・286など体部に装飾を持つ場合は、帯縄文に限られている。

2) 沈線文・列点文による装飾を持つもの（282～285・287・400）

282は1)の275同様の構成で、口端や体部の縄文帯を列点に置き換えたと理解できる284は口唇上に小突起を五単位、突起間に弧線を二つずつ配置する。283は連鎖S字入組文を体部に持つ9類唯一の例である。285は口端に小突起を持つが四単位で、体下半にケズリ調整がある。400は底部近くの破断面の状況から、台が付く可能性が高い。

3) 無文のもの（360・386）。

386は6mm前後の器厚で大きさに比べ厚い造りであるが、比較的丁寧なミガキ調整を加えている。360は口縁内面に沈線を巡らせ口端との間を刻んでいる。口縁部の断面形や比較的丁寧な内面調整から堀之内2式も疑われたが、外面の調整は本跡の他の出土土器に見られるやや雑な調整と共通し、口縁内面の沈線が深く、縁に調整が及んでいないことから本類型に含めた。

9類B種（289～359・361～385・387～399） 底部から口縁まで分節が無いと思われるもの。波状口縁と平口縁があり、装飾の有無と手法で更に三分できる。

1) 充填縄文による装飾を主とするもの（289～329・357）。

入組文・弧線文の他長楕円を呈するかと思われる図形を用いた充填縄文で装飾するが、区画内列点文を併用するものがある。平口縁のものと波状口縁のものがあり、平口縁のものでは口縁下に区画線を持つも

のが卓越する。波状口縁のものでは弧線文が多く、波頂部を中心に内面に装飾を加えるものが目立つ。変化が多く概念化が難しい部分があるので、以下の個別別の言及を多めにしておく。

289は弧線文を五単位配置する。294は口縁下に二重弧線を持ち後述の330と同じ文様構成を持つ。291～293は連鎖S字入組文に弧線を添えて横に展開する。290は口縁部の遺存が少なく確実ではないが、上面観が多角形を呈する可能性がある。頂部を「V字状」に結ぶように二重連鎖S字入組文を配し、底部直上に二重弧線文を持つ。322は波状口縁もしくは突起を持つ可能性が強く、波頂部もしくは突起間を弧線文で結び、連鎖S字入組文の連結部を波頂部下に配置するようである。303～306は長楕円状の充填縄文を組み合わせ装飾するもの。303・306は同一個体で長楕円の図形どうしを別の描線で結んでいるらしいが全体を推測するには不明な範囲が多い。324・325・328・329は区画内列点文を併用するものである。326は口縁下の区画内に縄文充填後に米粒状列点文を加えている。

2) 沈線文・列点文による装飾を持つもの(330～356)

縄文を一切用いないことを除けば1)と類似する特徴も多い。但し連鎖S字入組文を持つ343を除けば入組文で装飾する個体はなく、波状口縁を示す個体も少ない。その一方では平口縁で口唇部上ほぼ全周にわたって簡素な装飾を加えるものが目立つ印象である。

331・333・335は区画内列点文を二帯持つもの、330・334・349は口縁下に二重弧線文を持つものであるが、349は列点を入れない。332は上面三角形に近い形で、三角の頂部と各辺中央に小粘土塊を貼付した突起を持ち、頂部下に二重弧線の区画内列点文、頂部間を弧線で結んでいる。口唇上には沈線を一条巡らす。358は幅広く形成した口唇部に円形の窪みを並べ、外面口縁下を区画して、頂部が向き合う逆互連弧文とするようである。

3) 無文のもの(359・361～385・387～399)

やはり平口縁のものとは波状口縁のものがあり、突起を持つものや内面装飾を持つものも多い。器体形成時の粘土積み上げの状況を残す362のような個体がある一方で、丁寧なミガキ調整を施して内外面とも光沢を持つ359・361のような個体も多い。突起や内面装飾の有無は必ずしも内外面の調整の精粗に結びつくわけではなく、365・367などナデ程度の雑な調整でありながら突起や内面装飾を持つ個体が少なくない。前述のA種3)と共に、古い時期の混入を疑わなければならないものもあるが、今後の調査事例での検証を期待し、できる限りの揭示に努めた。

第10類 台付土器(第65図401～第66図420)

台付の鉢形土器と思われるものだが、全形の判明するものはない。形状は裾部が分節して末広がりとなるものに限られる。底部と台の接合部に刺突文を施し、台部は円形の透かしの周囲を環状の沈線で囲み、裾部は沈線を放射状に密に加えるのが通有のようだが、406は「X」字状の透かしを併用し、401・402も同様の透かしと見える部分がある。装飾は充填縄文(410・407)・区画内列点文(405)・沈線文(401・406・408・409・411～413)がある。

第11類 異系統土器(第69図454～第70図488)

亀ヶ岡式風の土器の他、地域や型式を確定しがたいが在地の土器とは思えないものをまとめた。

454～459は壺形・無頸壺形の土器と思われる。454は全体によく磨いて光沢を持ち、頸部と体部の境界に三本の沈線をめぐらすのみ。455は頸部に眼鏡状隆帯が巡り、体上部の文様下端の連続波状の無文部は彫去して沈線状である。456は短く直立する口端の一部を内側に向けて押さえている。457は頸部・体部の境界を二本の沈線で带状に区画し、半球状の抉りを連続させている。458は頸部の破片で、充填縄文の無文部は彫去したようにわずかに窪む。460～478は鉢形もしくは浅鉢形の土器。沈線間に刻みを加えた区画

帯を持つものが目立つ。充填縄文の無文部はわずかに窪み、475～477は明らかに彫去している。以上は大洞C1式に相当するだろう。

479～482も亀ヶ岡式風の鉢形の土器だが、大洞C1式相当とは断定できない。三叉文のある482については安行3a式の可能性もある。

483～485は充填縄文で装飾するが、亀ヶ岡式風とは言い難いもの。特に485は蓋形土器であることから佐野式の可能性も考慮したが、残念だが型式を特定できない。

486は壺形土器で口縁部下に丸棒状施文具による浅い沈線が1本巡る。487は口縁部が外反する深鉢形土器で、口唇部に指頭幅ほどの切欠きを連続させる。内外面に斜め方向の条線を施すが、半截竹管状の施文具による。488も器形は同様に、半截管状施文具による並行沈線で口縁下を区画し、体部に同じ施文具の斜線を加えている。486・488は細かな砂を多く含む明褐色から灰褐色で緻密感に欠ける胎土で、表面はわずかに磨いているが殆ど光沢は無い。一方487は大きめの砂粒を僅かに含む暗灰褐色で緻密な胎土で、条線施文前の磨き調整は丁寧に光沢を持つ。やはり型式の特定は断念した。

その他の土器と底部（第59図254～257、第66図423～427、第67図431～第68図453）

これまでの分類に含めることがためらわれるものが若干あるため、個別に説明する。

254・256・257は第4類から第7類に共通する器形のもの。256は充填縄文と区画内列点文を併用して装飾を行い、口端の区画帯は列点文・破片下端の区画帯は充填縄文である。256は横帯区画内に弧線を組み合わせて装飾する点は第7類に類似するが、区画内に充填するのは縄文である。257は第4類A種の縄文を細かな刺突の充填に置き換えたとも思えるが、棒状文を構成するか確実でない。

255は分節の無い波状口縁深鉢形土器で、口端と並行する沈線の上に縄文を充填している。

423は口縁が僅かに外傾する深鉢で、口頸部に半截管状施文具による描線の充填縄文がある。

424・425は接合しないが同一個体で、突起を持つ。

426は注口土器で、口縁から体上部に縄文を充填した棒状文で装飾すると思われる。注口部に対応する口端対になる小突起、その下に円形の抉りがある。

427は蓋型土器であろう。遺存範囲が少ないが、棒状や平行の沈線文様を持つようだ。

431～453は径の判る底部破片を示した。深鉢形土器と思えるものが多いが、鉢形や浅鉢形土器もある。体下半に縄文を施文し編み物圧痕を持つ441は後期安行式の可能性が高く、器壁の立ち上がりが丸みを帯びる453は後期前葉頃のものだろう。

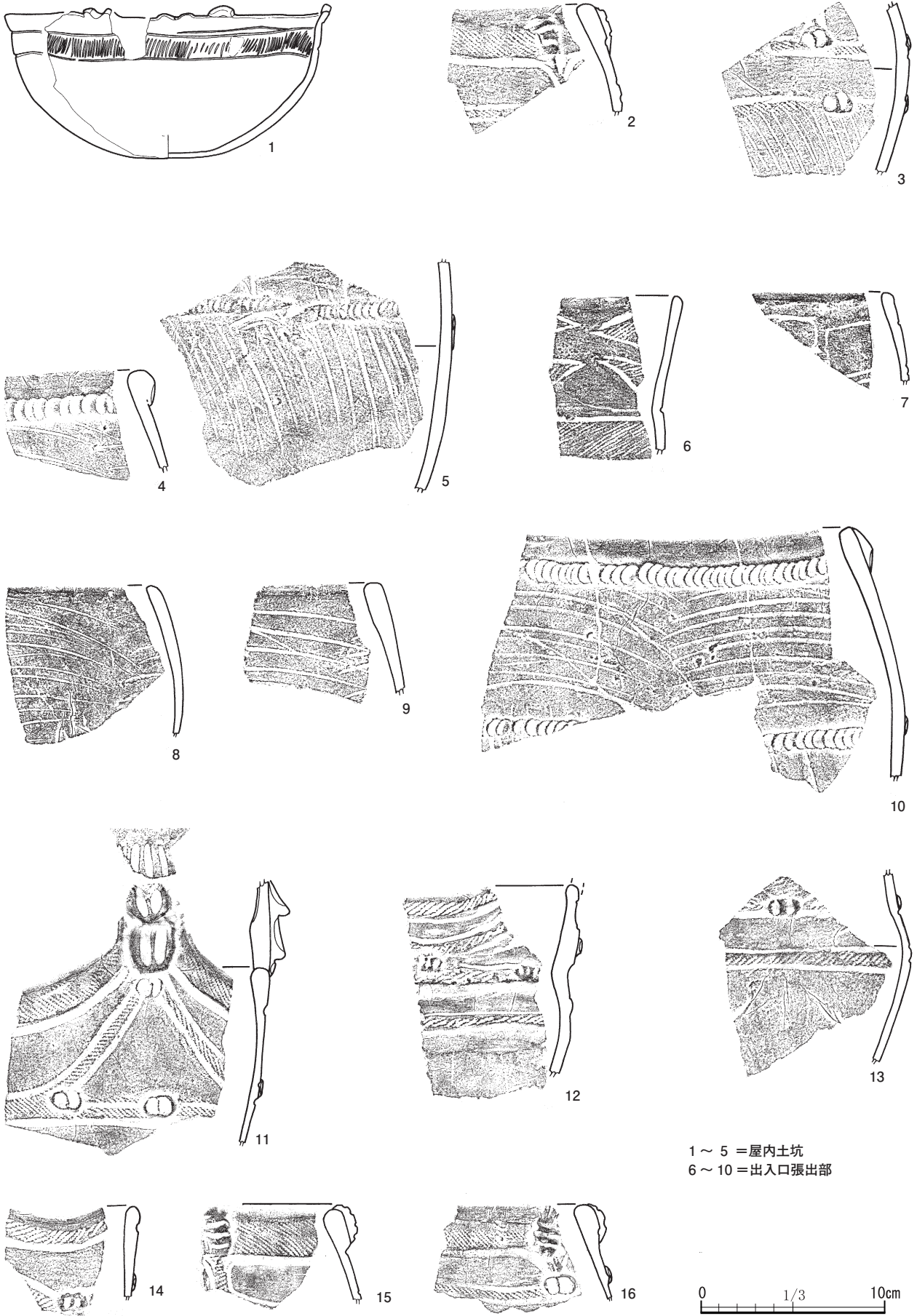
なお『総括報告書』3-149図348～3-150図394と、3-164図193～3-165図202は、第2次調査で本跡に該当するグリッド出土である。既に記した今回出土と接合した例の他にも、覆土下層に含まれたと考えて矛盾しない内容と言える。

覆土上層出土土器（第71図489～496）

覆土下層と共通する土器も若干出土したが、ほとんどが小破片で接合も少なかったため大半を省略した。図化できたほとんどは（鷹野1978）「前浦1式」に該当するものであった。点数も少ないため分類せずに個別に記載する。

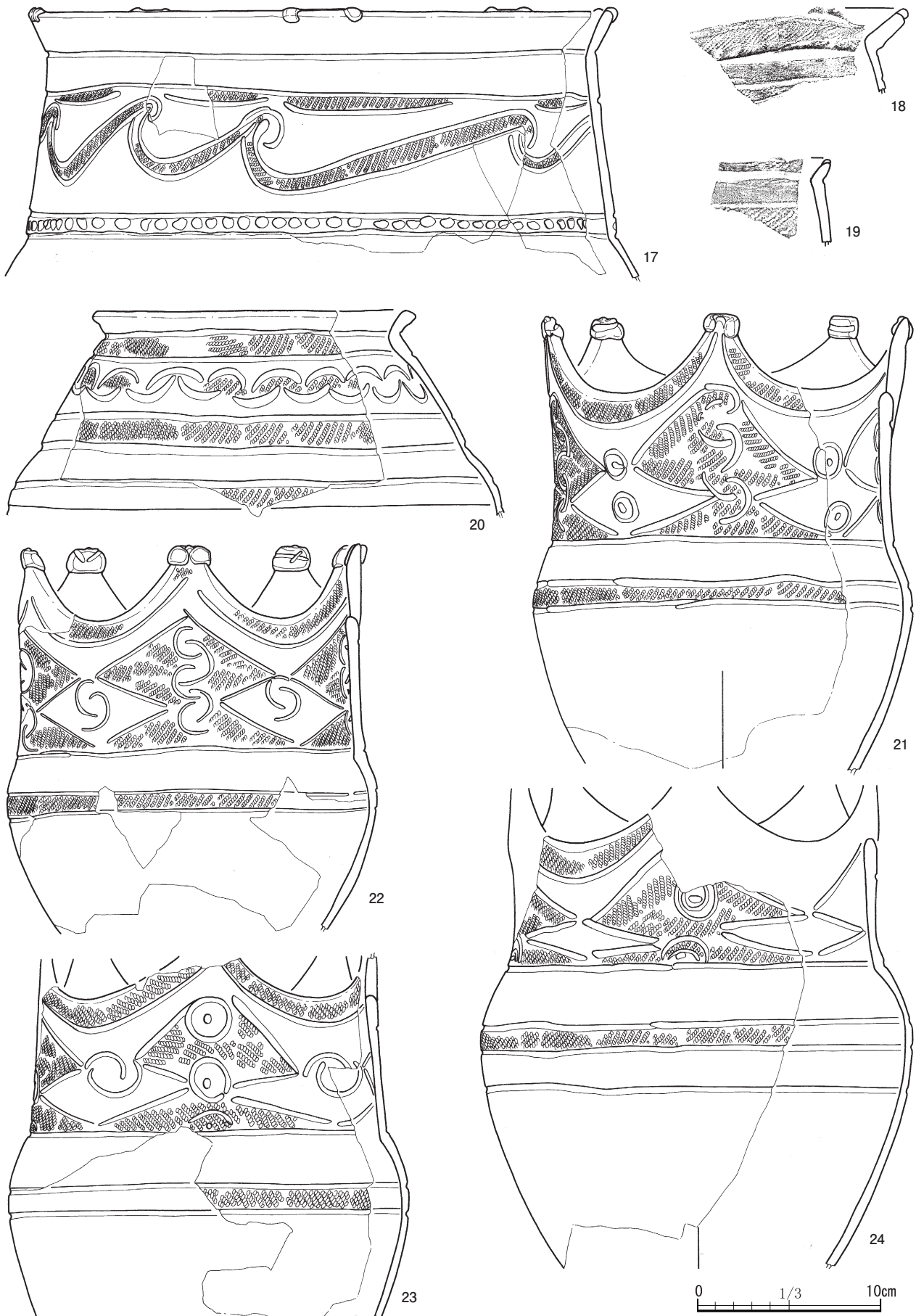
489は波状口縁を呈する深鉢形土器で覆土下層の第1類B種と類似する装飾だが、口頸部と体部で分節されているか判断が付かない。器壁を厚く成形する・文様描線の幅が広い・波頂部が突出しないといった点で顕著に異なる。波頂部から垂下する縦長の押圧（丸棒状施文具先端近くの側面を用いたと思われる）は左右に粘土が盛り上がり、器面が柔らかい状態で施文したようである。

490は口頸部・体部・底部に分節する浅鉢形土器で丸底は良く磨いて光沢を持つ。遺存する口縁部は1/3

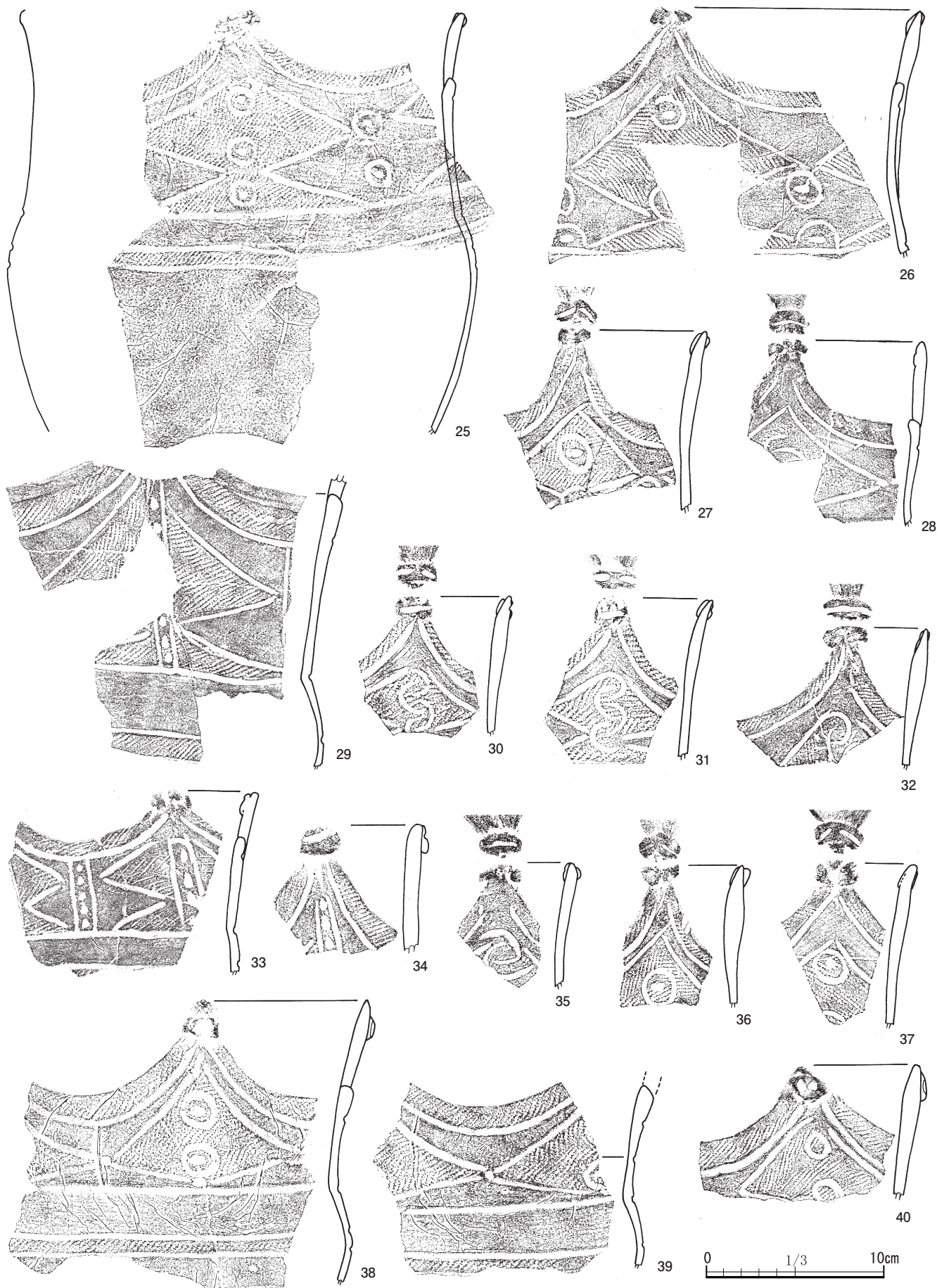


1 ~ 5 = 屋内土坑
6 ~ 10 = 出入口張出部

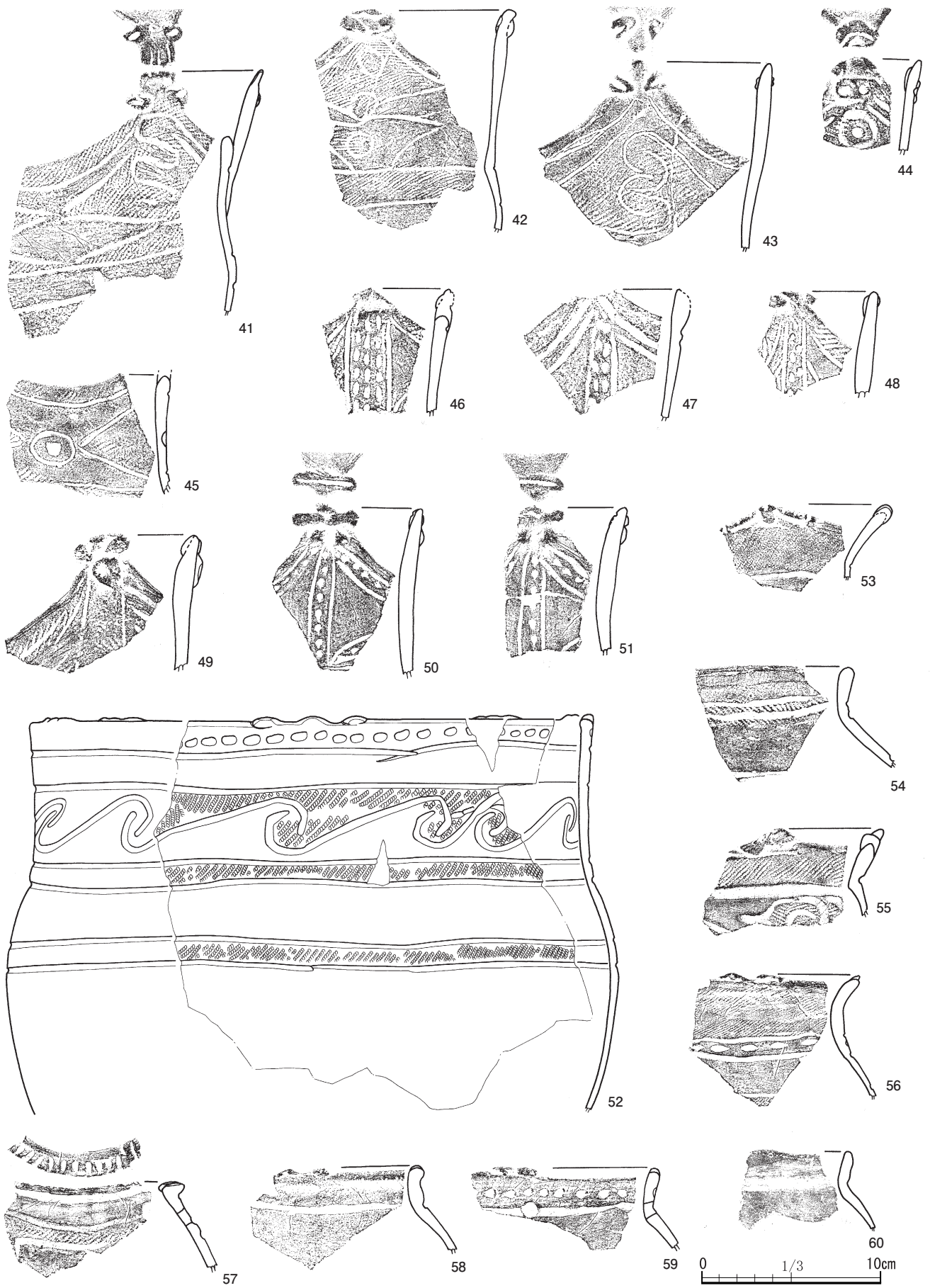
第 44 图 140 号住居跡出土土器 (1)



第 45 图 140 号住居迹出土土器 (2)



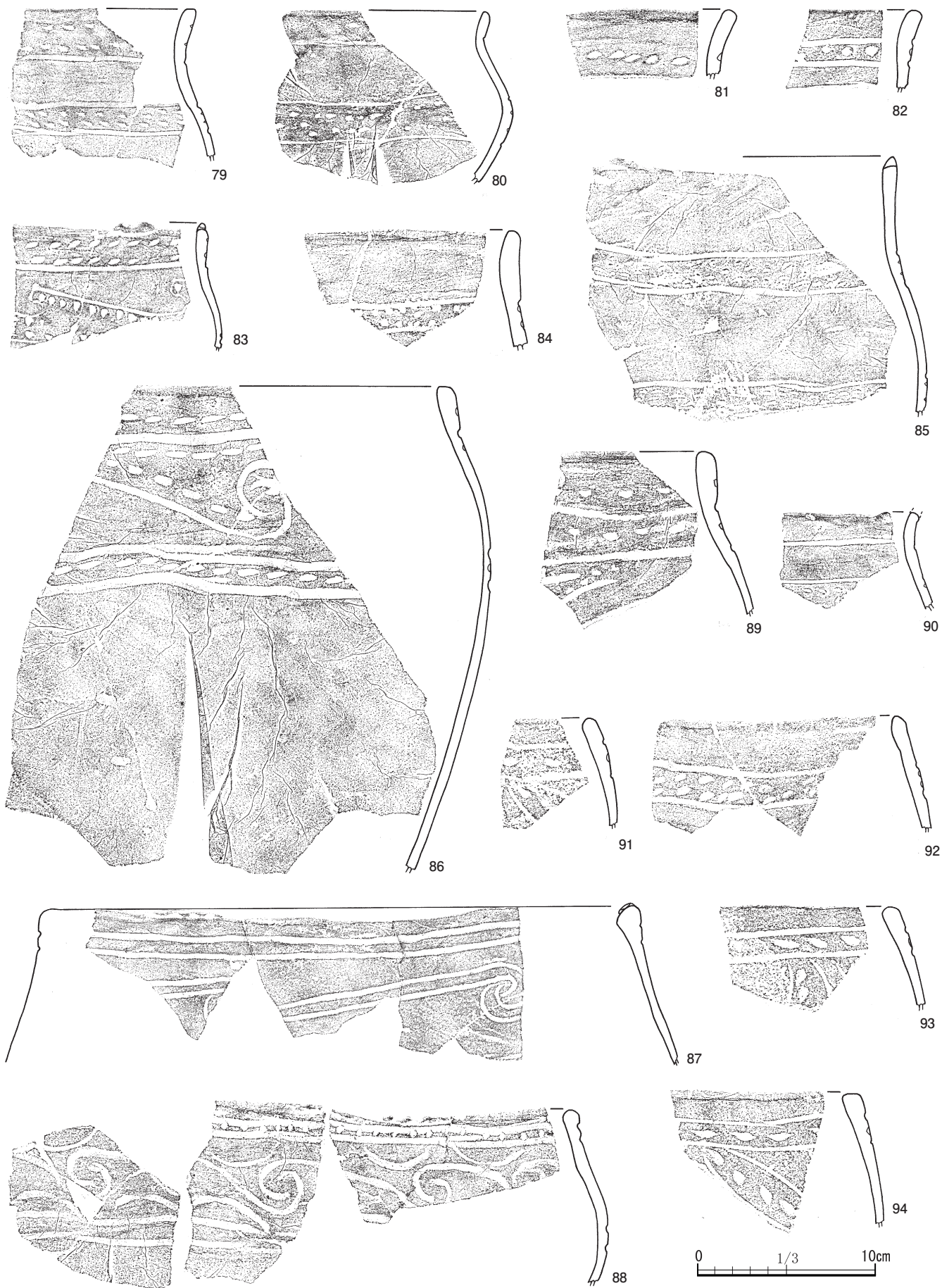
第 46 图 140 号住居迹出土土器 (3)



第 47 图 140 号住居跡出土土器 (4)



第 48 图 140 号住居跡出土土器 (5)



第49图 140号住居跡出土土器(6)